

姉は宮ぎの
妹はしのぶの
碁太平記白石噺

誰か知る盤中の殞、粒々皆辛苦すと農を憫む言の葉も、仁に止る君と民、君、君たれば神國の、
さればあやしの賤の女も、孝を守り義を知りて、婦人脱鬼の勇力は、石に立つ矢の虎と見つ、
龍の勢ひ南北朝、頃は建武の春の山、吉野の内裏時めけり。けふは彌生の三日の空、上巳
の節會桃柳、色香争ふ鷄合、南殿の御簾卷上げさせ、龍顔殊に麗しく、玉座の左は坊門の
宰相清忠卿、邪佞の冠巾子高く、右座も同じ我慢の相、智慧は纔に左少辨隆貫、其外月卿居
流れて、今日の節會を拜賀有る。階下は町人商人の、大人子供も打群れて、人來る日の門、日華
門、拜見門共いひつべき。制する北面めんくくに、抱へた鳥の檢非違使が、禿た天窓にたらた
らと、汗の玉敷鷄合、爪も立たざる賑はしき。まづ一番に白矮鷄の、地すりは地下と御垣守、
衛士が自慢の籠の中、夜は燃え立つ鷄冠の色、横ひらつよと左折は、烏帽子屋の黒装束、互に
目と目を狙ひ寄り、その糸毛の車毛、牛飼舎人も涎を流し、勝負付かねば和氣丹波、御醫者の

鳥は藥喰、檜柏に合すは獻立の、平野の禰官が秘藏鳥、迺れば跡を追鳥の、一羽ならず二羽三羽、何羽も蹴るは鞠の家、興を催す飛鳥井の、お家の装束大臣家、爰を先途と鎧毛の、大緘の大鳥泥脛は、衛門の志と知られたり。しやむは住吉三位の飼鳥、中將のとう丸に、栗毛の鳥は右馬の頭、身の上白きは陰陽師、黒きは四位殿赤きは五位の、はふく、迺るを追懸け追詰め、東天紅羽打つ羽叩き勝時は、目覺しかりける御遊なり。鬪鶏終る頃しもや、楠判官正成參上と披露して、優美の袂たふやかに、智勇兼備と菊水の、流に隨ふ家の長、恩地左近召具して、御階のもとに拜伏し、今日の天氣を伺はる。清忠卿遙に見下し。清忠「ヤア判官正成、今日の節會に遲參は如何に、今迄何してお居やつた。御不審の勅説も有つたれど、某よきに奏問遂けた。雜酒でも呑過し、晝寢でもおしやつたか」と、藪から突出す坊門宰相。正成猶も色を正し、正成「今南朝と立別れ、鎬を削る戰國の街、苟も勅命を蒙り、南朝諸軍の采配たれば、晝夜軍慮の工夫を運し、諸陣の手配出張の進退、其上今日注進有つて、敵兵攝州湊川迄押寄する條捨置き難く、兵糧運送彼是と、心に任せず只今の參内、恐れながら貴卿の執達、天聽宜敷希ひ奉る」と、恭謙辭讓の詞を打消す左少辨、左少辨、ヤ口利根にやつたりな、晝夜軍略に隙なしとは何事、此程續く味方の敗北、十に八つは北朝の勝鬨、負ける様の軍術なら、工夫も絲瓜もいらぬく。

楠でも樗の木でも、とちめんほうを振りぬが肝要、笑止々々」とあざ笑ふ。こたへ兼ねて恩地左近、憚もなくすつと出で、左近我々が主人を嘲哂の一言聞いて居られぬ。十に八つは北朝の勝関とは何の癡言。目に餘る寄手の大軍、何の苦もなくほつ散した、千早赤坂金剛山、釣堀から藁人形の計略も、神仙はいざ知らず、世の常の人間の胸からは出来ぬ事、御自分様の冠、頭打割つて、四五百年案じてもなくびより外出る事でない。似合うた様に鞠でも蹴つぶし、腹のへる御工夫なされ」と、すつけり云出す主思ひ、左少將ヤア公家に向つて尾籠の一言、退り居らう「左近」イヤ退るまい。身が主人の謀、清忠殿といひ合せ、又しては茶々入れる北朝最良、埃溜へ鳳凰が下りた様な、萬里の小路藤房卿は、あはう鳥の付合が厭さに、高飛をなされたわい。「ヤア重々の過言、彼引立よ」と清忠隆貫、こなたも反打つ血氣の若者、正成中を立隔て、正成ヤア推参なり恩地左近、高官に對し無禮の振舞、庭上なるぞ」と押鎖め、正成「イヤ何兩卿、某追打の宣旨を蒙れば、軍の事はお任せあれ。勝つも負くるも時の運、君の御爲國家の爲、何條疎略有るべきぞ。武の道は武士ぞ知る、公事有職は殿上人、今日の節會の鶏合も、早事終れば是よりは、御溝の流に曲水の、宴を設けて詩歌管絃、君の御心慰むる、是ぞ貴卿の職ならずや、早とくく」と良將の、詞は優々管絃の、調につれて入御なれば、清忠隆貫佛頂顔、恩地も尻目にかけて橋や、

堂上深く入り給ふ。後見送りて判官正成、正成「今に始めぬ宰相といひ隆貴の放逸。ヤヨ思地、若氣とは云ひながら、慎むが則ち忠義。汝は早く館に歸り、明朝湊川へ出陣の布れ流せ。和田の源秀、志貴源八、手筈は兼て談じ置く、早く」と主命に、座を立花の正成が、譜代の思地左近の櫻、後に見なして出でて行く。正成も奥御殿へ、入らんとし給ふ大紋の、袖をしつかと町人の、麻上下もしほたれて、用有けにぞさし俯く、顔は正しく、正成「ヤア其方は佐々目の兼房」兼房「ハ、先以て御安泰の尊顏拜し奉る兼房が悦び、御賢察下さるべし。幼少より御傍に育し詮もなく、さいつ頃天王寺の戦に手筈を違へし我誤、切腹と覺悟極めし所、命ながらへ時節を待てと、君の詛意におめくと、浪々の今の此態、何卒歸參の御願ひと、御館の御門迄、行通うたは幾度か。誤ある身の悲しさは、御門の敷居は目よりも高く、流浪の有様、古傍輩の手前を恥ぢ、すごとくと歸る計。幸かな今日の鶏合、諸人拜見の群集に紛れ入込み、久々にて尊顔を拜せんと、待に待つたる今日の優曇花、三千年に成るてふ桃の彌生の壽、花咲かぬ身を不便とも思召されて今一度、御勘氣御免の御詞、殊に御不便懸られし妹が懐胎、彼是思し廻らされ、御宥免の御一言御訴訟願ひ奉る」と、思ひ込んで泣き居たる。正成も心根を不便とは思せども、私ならぬ官軍の掟、假初にも赦されず、やと打潤み給ひしが、正成「ヤア如何に兼房、軍慮に心を碎

くといへども、宰相清忠なんと、我を嫉みて讒言まちく、計略もはかなくしからず。逆も微運の正成、大功なす事思も寄らず。今度攝州湊川の合戦、討死と覺悟極めし上なれば、兎に角其方は生残り、我亡後を弔へかし。今も今とて宰相のさかしら、町人體の汝、見咎められては、其方計か我逆も爲よからじ。早く出でよ」と振切る袖、隔つ思ひは千里の外、勝利を計る大將も、流石主従恩愛の、泪の大敵防ぎ兼ね、歎に時も移りけり。折から宰相左少辨、其外公卿ばらくばらとおつ取巻き、清忠「ヤア正成の二股武士、御殿間近く怪しき男と囁き點く、汝は慥に北朝の廻し者、楠と一味して、吉野を亡す計略に極つた。腕を廻せ」とねめ付くれば、判官正成取敢へず、正成「イヤ全く胡亂の者ならず、此者は某が家來」左少辨「ヤアヤ其家來が何故丸腰、楠家には町人の家來があるか。サア何と」と、罵る隆貫、清忠目早く、清忠「汝はどうやら見た顔付、先年天王寺の戦に、逐電せし兼房ならずや。彌以て心得ず。コレ使の廳の官人共、彼奴に繩かけ打はなせ」畏つたと下知につれ、捕たくと打かくる。兼房も一期の瀬戸、無雙廻し膝車、柔術體術、秘術を盡す無刀のあしらひ。正成聲かけ、正成「ヤレ官人に過すな。穢有つては彌重罪、禁廷なるぞ」と主人の詞。はつと弛へ付入る捕手、折重りく、壓へて繩をぞ懸けにける。清忠「ソレ正成も同罪、叶はぬ所、繩かよれ」と、宰相隆貫、いらつて下知する聲の下、勅詔

ざふと御簾卷上げ、主上は御聲爽に、主上忠勤無二の正成、何條さる事有るべきぞ。只此上は湊川に立越え、不日に吉事を奏せよ」と、花も實も有る桃柳、色をも香をも知る人ぞ知る勅詔に、ハ、ハ、ハ、はつと有難涙。「ソレ咎人を引立てよ」と、歪む冠のこじかける。殿上二人の佞人に、庭上二人の忠義と忠義、命を的の湊川、空しく討死し給ひし、名は末代に有明の、月と見る迄三吉野の、花の御殿や春の風、袂に薫る橘の氏の榮えぞ 三重

第 二

丑みつの空物凄き夜嵐に、襟を突くなる雨の脚、空に枝折の電、閃き渡り更渡る、葎の宿の屋根の上、すつくと立ちし立姿、丈の髷も烏羽玉の、闇に迷ふや立行の、淨衣の袖に鈴の音も、澄渡りたる聲震し、女百日満する我大願、感應あやまり給ふな」と、一念凝たる女心、思ひの念數摺立てく、祈の聲も風に連れ、物凄まじき折からに、雲間を分けて其形相、一日に夫と白糸織、弓手に立ちし旗の紋、是にぞ井手の山吹流し、さも欣然たる聲正しく、神靈善哉汝、赤心を抽んで天に誓ひて願ふ所、満する今宵感應有て、汝が胎中の一子に、我魂を合體なし、南朝を助け奉る」と、詞の下にハットひれ伏し、女コハ有難き御仰、斯く天勅を示し給ふ、君は

如何なる御方や」と、問へど答も口なしの、山吹の旗手に取添へ、神靈「ホヲ、いしくも尋問ふものかな。我こそは建武の亂に湊川の泡と消し、楠廷尉橘の正成が靈魂。汝が兄佐々目の兼房、吉野賀名生の皇居に於て清忠に怪しめられ、罪なうして刑に逢ひし、彼が修羅の怒も休め、我鬱憤も晴さん爲、今又汝が胎中の、一子の脾肉に分入つて、南朝を助け奉り、功ならずとも一度は、足利と一戦なし、再來の忠を盡すべし。一子出生の後人とならば、宇治兵部の助と名乗るべきぞ。必ず疑ふ事なかれ」と、旗一流與ふと見のれば、遠寺の碁に跡方も、さむるや夢の三幾世經し、荒れにし鄙の宮造、神寂渡る御燈の影、世を雲水の定なく、法の旅とは裏表、八重の汐路や岷々たる山、岩をも碎く武者草鞋、打違へたる一舎り、松吹く風も身に添ひて、拜殿の廣縁に、ふつと眼覺し四邊を詠め、山城の浪人兵部「ム、夢で有つたか。ア思へば希代の夢、我前生を眼のあたり、夫と知つたる夢中の示現。伯父兼房は楠の家臣。夫とも知らず此年月、筋なき土民の子なりと思ひ、井手の里の素町人と、埋れ果ん悲しさの儘、武術を勵む切瑛琢磨、胸に孫吳が骨髓を借り、三年に餘る武者修行も、今陸奥の果に至り、今宵はからず此宮居に、一夜を宿る夢の告、我先生を目前の奇瑞、今南北二朝戦國の中、何れを夫と心も定めず、漂ふ船のよるべを待ち、待ちおほせたる今日只今、ハア、忝や嬉しや」と思ひ凝たる一心不亂、南朝無二

の一人と、定切つたる丈夫の魂、夏の夜ながら夜は深き、又寐の夢と笠引寄せ、見やる向ふへうそくと、闇はあやなし夫ごとも、花橘の木の下へ、窺ひ寄つたる旅立ち、怪しと見やり引添ひて、ためらひ居るともしらぬ火の、御燈も消えて眞の闇、傍り見廻し手頃の枝、折るよと計地を掘穿ち、口にくはへし生首を、そつと埋めて心の印、建てて腰より矢立を出し、筆の立度も星明り、河内の浪人奥州白坂の町はづれ明神の森、一國一ヶ所の首塚」と、印にとめて過ぎ行く後、山城の浪人兵部「お待ちやれ旅人、イヤサ、待てと云はどママ待て。一國一ヶ所の首塚と、今の詞に我を忘れ、卒忽に呼止めしは、ハテお互に武者修行の、心は一つ水と水、お頼もしう存じ、お近附にもとお止め申した。一河の流れ他生の縁、御隔心なく、イザ是へ」と、云ふも答も暗紛れ、聲をしるべに、河内の浪人「是はく、ナニ貴公にも武者修行とな、武術御執心の程感じ入りまする」山城の浪人兵部「イヤ是はく御挨拶、サアまあ是へ」と膝と膝、打くつろいで摺火打ち、煙草の煙底意なく、山城の浪人兵部「扱先お近付には成りたれど、末の六日の月代も遅く、モ是ではお互に面體見知らず、ア、どうがな」と立寄り、青葉の枝を切りくべて、用意の火繩炎々と、梢音なふ風につれ、燃え立つ衛士が篝火に、互に見合す顔と顔、山城の浪人兵部「ヲ、コレく、是でこそ眞の近付」河内の浪人「ム、ヤ貴公も木お年若、シテ御出所はいづく何方でござりますぞ」

山城の浪人兵部「イヤ、手前事は山城の出生」河内の浪人「ナニ山城」山城の浪人兵部「いかにも」河内の浪人「ハ
テナ、そんなら我等迎も同國同然、河内産で罷在るてさ」山城の浪人兵部「ム、何、河内の出生の御
浪人とな」河内の浪人「いかにも」山城の浪人兵部「ハテナ、ヤモ境は隔つというた迄で、壁一重隣る山城
河内、ア、不思議な縁」と、ゆふしでの、神の廣前出合も神慮、あたる焚火も冬めきて、世は道連
の値遇の縁、河内の浪人「コレ見給へ、忝い火徳の用の、清光の月夜にひとしく、マア有難い陽徳
の妙用、御浪人左様ではござるまいかい」山城の浪人兵部「ム、河内の御浪人は扱々きつい陽氣を崇
敬なさるが、ソレ此陽氣の明かな徳と申すも、レ此青葉といふ陰氣の體を、捉まへた焚物と云
ふがなうては、陽の火徳も徒になる」河内の浪人「スリヤコレ、陽徳計が有難いでもござるまいか、
ム、扱は山城の御浪人には、陰徳が御信仰と仰るのか」山城の浪人兵部「ハテまあそんな物かいな。
アして又、陽徳が御信仰と仰るのか」河内の浪人「ハテまあそんな物かいな。アして又、陽徳が御信
仰と仰る心は、如何でござりますぞ」山城の浪人兵部「サレバサ、今戰國の其中に、南朝と位を争ひ、年
號迄を別々に、穩かならぬ世の有様も、實はといへば、陽徳の南朝が、陰徳の北朝に勝たうとなさ
るから起る事、ちやがコリヤ叶はぬ事ちやて」河内の浪人「ヤ、貴公はお若いに似合はぬ咄に味が有
つて、こいつはよつほど面白いわい。ガ若又南朝方に、よい軍師でも出來て、北朝に勝たらら

ば、よい氣味な事では有るまいかい」山城の浪人兵部「何としてく、勝つなぞとは思ひも寄らぬ事ぢや」河内の浪人「イヤ勝つまいともいはれぬて」山城の浪人兵部「サ、ソリヤ叶はぬ事ぢや」河内の浪人「イヤ勝つ」山城の浪人兵部「叶はぬ事ぢや」河内の浪人「勝つて見せう」山城の浪人兵部「叶はぬ」河内の浪人「イヤおれが勝つて見せう」山城の浪人兵部「ア、コレく、コレヤ咄ぢや」河内の浪人「ヤ、ヤサ咄ぢや。ヤほんに咄ぢや、あんまり咄に實が入つて、思はぬ高聲。ハ、ハ、ハ、ハ、南無三、今の咄に思はず知らず、あんまり力んで煙管を焚火の中へ打込んでのけた。シカシ咄も斯う身に入れば面白いて。ガ又、其叶はぬと云ふ咄の發句は如何でござりますぞ」山城の浪人兵部「サ、俗人も云ふ通り、中の悪い物をさして、火と水の中といふ様なもの。イヤ南朝ぢやの吉野方ぢやのと、いしこさうに口には言へど、見る影もない吉野内裏と、田舎者迄が見こなして、新田楠の良將でも、持餘したる北朝の勢、足利殿の武徳の高さ」河内の浪人「なんと」山城の浪人兵部「イヤサ、足利殿の武徳の高さ」河内の浪人「ナニガ何と」山城の浪人兵部「ヤ、貴様は咄を聞くと、びこくとするが、貴様は何と思召すぞ」と、向へ廻る喧嘩の小口。河内の浪人「ヤアスリヤ御自分は足利最良、京方へ付く御浪人な」山城の浪人兵部「ハテ異なる事を御念、若し京方へ付けば何とするや」「シヤ小頼な」と互の氣相、箭の炎燃立つ敵々、雙方顔に火花と火花、山城の浪人「サア此上は互の曠業、一立合勝負して」

山城の浪人兵部「ホ、其甲乙を試し見ん」サアくさあ」と驪り寄り、修行手練の手利と手利、打合せたる刃先と刃先、陽に開けば陰に閉ぢ、進み退く虚々實々、千變萬化手を碎き、秘術を盡して切結ぶ。早月代も山の端に、白むや夫と橘の、片枝を目がけ切込む切先、シヤならぬはと我身を楯、押圍へば飛退つて、河内の浪人「ヤア心得ぬ汝が振舞、鎧を削り一命に代へ、此橘の枝を圍ふ貴殿の心底合點行かず。察する所是則ち、南朝の忠臣楠廷尉橘の正成の子孫なるか。先帝の御徳全く再び榮ふ橘の、開くる御運と、表事によそふ花橘の香と共に、惜む心の香も深し」と、見透す計其一言、只者ならず見えにけり。横手を打つて、山城の浪人兵部「したりく。太刀筋と云ひ推察と云ひ、天晴此身の片枝と、成るべき器量、ホ、ヤ頼もしく。互に夫と姓名を、口外せんも壁に耳」山城の浪人兵部「名乗る我名は山城の浪人」河内の浪人「面白しく、我名とても河内の浪人。シテ在名は」山城の浪人兵部「山城の井出」河内の浪人「我は河内の八尾の邊」互の胸はアレかうと、砂搔平し指を筆、早月影も清らかに、打明したる密意の神文、互に認め、河内の浪人「イザ血制」堅誓の砂起請、跡打消して、山城の浪人兵部「何御浪人、堅の神文見替す上は、神文はコレ此胸中」河内の浪人「ホ、我とても誓の上、書いた物には心は留めず、白地の砂の胸の神文、委細は後の、面會を待つ」「しからば此場は別れく。ア、井出の里の御浪人」「八尾の里の御浪人」

「御縁あらば」と右左、締め直したる武者草鞋、別れてこそは三重行く空の。

第三

六尺の狐を託すべし、大節に臨んで奪はざるは、君子の人なりといへり。石堂大領の後室寄波御前、過ぎにし夫の遺言を、守りも堅き岩手の館、鎌倉よりの上使を請け、若殿家督の御祝儀とて、三寶土器鬘斗昆布、上下賑ふ計なり。浮氣盛の娼共、一つ所に寄舉り、歌本「コレ早苗殿、此間から鳴騷だ御上使の御入、九獻も御膳も首尾よう濟み、追付けお立に間も有るまい。嬉しや明日から隙になろ」早苗「何云やる歌木殿、又是からが御一家方、御振舞のお能のと、大體忙しい事ぢやない。妾らは今年で丁度五つ、宿下の木進が殿様へお貸に成つた。盆にはきつと取立てて、芝居も見やうし、よい男の見飽しよ。ソレハさうと、御草履取の伊達助殿、殿様と云つてもよい品な色男、千束様のきつい御魚貞。妾らもちつとおすべりでも戴きたいと思ひ、文迄書いても持殺、どうでこちとへお鉢は廻らぬ、いつそアノ、しつ深な臺七様へ遣つて見よ」歌本「おかんせく、あの臺七の憎體顔、臭い者の身知らずと、お姫様を附けつ廻しつ、色取りかけるが可笑しい。あの様な男に思はりよより、能い男持つ迄の心ゆかし、ソレ鬢の通り、馬持つ迄は

牛の角、細工物で間に合はそ。ハ、ハ、ハ、と高笑ひ。奥は祝儀の獻々も、目出度納まる千秋樂、上使の顔も淡紅、立出づる赤橋將監、後に續いて寄波御前、志賀臺七楠原普傳、其外家中の諸侍、敬ひ侍く廣間上、將監も會釋して、將監御念の入りし御馳走満足の至、彌綸旨の改は、鎌倉にて御沙汰有るべし。家督の祝儀首尾能く濟み、後室の悦び察し申す。何れも心を一つにして、小次郎殿を守立て召され」と、厚き詞に皆々平伏し、「御前直しくお執成、遠路の所御苦勞」と、武家の行儀の嚴に、上使は旅館へ立歸る。後室御機嫌麗しく、寄波何れも此程の心遣、鎌倉の御請も首尾能く濟み、嘸かしの悦び、自が嬉しさ推量しや。コレ小太郎、今日からは石堂家の主、おとなしうせにやならぬぞや。皆の者へも挨拶しや」と、仰に従ひ、小太郎普傳臺七皆大儀、母上様有難うござります。コレ臺七、姉上様は岩手の社へ御參詣、坊が好の伊達助もお供ちや。歸つたらば追付侍にしてやると云つてくれ。普傳も目を懸けてやれ」と、舌も廻はらぬ一聲も、育隠れぬ雛鶴の、素性露れ愛らしき。寄波アレ聞きやつたか、ホンニ胤は争はれぬ、今の詞は先殿様に其儘ちや」と、嬉し涙も亡き夫を、思ひ出したる其風情、當座の挨拶志賀臺七、臺七、イヤモ仰の通り、大人も及ばぬ御發明、石堂の家は萬々年。又今日は千束姫にも岩手の明神へ御參詣、イヤ追付御下向でござりませう。ガ、マ後室には先御入。扱今晚はわつさ

りと、へ、へ、へ、カノカ中交りの御目出た酒、お請り申上げます」と、己が懸路の得手勝手、寄波、成程々々、打揃うて、後程ゆるりと逢ひませう。サア皆おちや」と、夕なぎの、寄波御前は若君の、手を引連れて入り給ふ。後は一組人喰馬、相口同士が打くつろぎ、臺七「ナント先生、此程ちらとお咄の天眼鏡、百里二百里隔ても、手に取る様に移ると申すは、眞の事でござりまするか」劍術先生普傳「成程、先師呂洞賓より傳りしトンクルケリキヤ、漢字には天眼鏡、見たいと云ふ方角へ鏡を向け、秘文を唱へて是に向へば、世界の内は扱置き、地獄天堂迄鮮か。行法成就の門弟へは、附屬する了簡。其外にも忍び松明、毒箭炮弩の軍器の傳授、手柄は仕勝、精出されよ」臺七「コハ有難しく。此臺七も追付傳授して見せませう。此頃上の御用で稽古も解怠、丹下松兵衛イザお來やれ」と、竹刀しなへ取寄て、屏に下り立つ一盃機嫌、袴の股立襪かけ、ヤア〜トウトウ互の勝負、普傳も悦び躑みのかけ聲、暫く時をぞ移しけり。絆なき身の氣散じは、野山越、何國泊と定めなく、人目飾らぬ麻羽織、綱代に紋も藍剥けて、刀を纏し宇治兵部の助、門外近く立ち止り、兵部「竹刀の音居合のかけ聲、誠に是は石堂家の屋敷、主君は幼稚と聞きつるが、後室の操正しく、武備怠らぬは、ハア、奇特々々。我武者修行の志も、斯様の家に因んでこそ。由縁なき身の残念」と、好める道を過ぎがてに、暫し佇む其折から、臺七は姫君の、辰

り遅しと門の外、臺七其處に居るは誰ぢやい。イヤ其處に御ざるは、ア、旅人か。是へお出の道筋、女中乗物はそと見給はずや。ガ又、其元は何故其處には休息」と、答に兵部は小腰を屈め、兵部「ハ、イヤ、拙者儀は上方邊より武者修行に出でたる者、ガ餘り御稽古の聲、羨しく、思はず足を止めし」と、語れば臺七、臺七「是はく、御奇特の御志、傍輩共へも申聞せ、苦しからずと申しなば、ヤモ、未熟の稽古御目にかけん」兵部「夫は大慶仕る」と、草鞋とくく其用意。臺七は内に入り、臺七「イヤナウ何れも、アレ門外に浪人と覺しき奴、武者修行と名乗る片腹痛さ、呼入れて慰まうではござらぬか」松兵衛「いか様、大層にぬかす奴に、ヤモ、業の碌なはないものさ。日永の慰打てく打据ゑん。コレく斯うく」と叫いて、小陰に松兵衛、心得丹下、伺ひゐるとも白菅の、笠脱置きて威儀繕ひ、靜々通る妻戸の蔭、聲をかけず左右より、はつしと打つを沈んでつま取り二三間、莞爾と笑ひ、兵部「ハ、コレく旁、拙者儀は片田舎より罷出でたる宇治兵部の助と申す者、私しきでも刀を帶せば、武士の數と思し召し、御當りなされて御覽とは、ヤモ、一分立てて過分の儀、以來は御入魂下さるべし」と、直に座に付く丈夫の眼中。二人は元より臺七は、手持不沙汰に見えにけり。普傳は始終手を拱き、見上げ見下す一工夫。兵部の助は顔振上げ、兵部座上に在する御老人の御姓名は「普傳」イヤ愚老は楠

原普傳と申す、御見知り下されよ」と、詞に傍から臺七が、臺七「則ち是は拙者の師範と頼む博識の先生。自分は志賀臺七」「唐崎松兵衛」と、互に會釋打終れば、宇治は横手を礎と打ち、兵部「ハ、先生には御見忘れ候か、某は宇治兵部の助、西國經廻の折から、御門弟の列にもならびし者」普傳「其時の御名は、ヲ、成程々々、旅勞れ見違申した。今に出精頼もしく。マ、コレ各、隔心召さるな、聞かると通りあの仁も身が門弟」是はくと計にて、挨拶取々なる折節、姫君様お歸りと、先走の若黨が、しらせに普傳は、普傳「ヤコレ臺七殿、アレ早、姫君にもお歸りとや、とくと申度き儀もあれど、今はサ云はれぬ。兵部殿を伴ひ先奥へ、後刻々々」と式禮に、返答志賀も唐崎も、宇治は備はる兵部の助、打連てこそ入りにけり。家の名の石には有らでほんじやりは、大領の娘千束姫、積るは雪か玉笹の、一夜は寢たき品容、氏神詣の歸りがけ、乗物止めて道草や、伊達助と云ふ下部、月代青き縷子鬢も、紺に匂ふや花かつらぎ、さしも立派な柄前の、鐔は角でも物云ふは、角のとれたる色奴。伊達助「アお姫様、モウお屋敷でござります。姫衆もお氣付けられ、おしとやかに御入」と、申上ぐれば、千束アレ伊達助、今日の様に面白い、樂な物詣は終にない。其方はさうも有るまいなう。お屋形へ歸つたら、すぐに小庭へ廻つてたも、いろく頼む用が有る。又部屋へついと往て、氣を揉ましてたもんなや。エ、憎いと、

一つひつしやりは、打殺さるゝ道具なり。伊達助「ハア、是はく、何の是が氣を揉むのもまぬのと、お主様の御意とござれば、憚ながら、たとへ手鍋を提げよと有つても、夫こそもう下郎めが身の仕合、冥加ない儀で御はりまするでござります」千束「ヲ、そしたらアノどんな辛苦をする逆も、そなたは辛抱する氣や」伊達助「何のマアつがもない、お前様に下郎めが、偽申してよい物でござりまするか」千束「ヲ、夫で落付いた」必ずやいのと目で知せ、しづく上る書院先、草履取る手を人目のすき、ちよつと戴く尻目で見ると、冥加ないやら嬉しいやら、妣共に誘はれ、奥と勝手へ別れ行く。引違へて志賀臺七、普傳を誘ひ立出て、席を改め、臺七「イヤ何先生、只今奥にて談ぜし通り、御印可傳授相違なく、頼み上る」と手をつけば、楠原ほくく「打點き、普傳」先刻より見られし通り、兵部の助へは懇望の妖術、貴殿は天眼鏡、御兩所へ引分て、祕密残らず傳へ申した、元來拙者西國にて、一つの島に閉籠り、呂洞賓より授りし、祕法を以て土民を語り、時節を待つて南北朝、左右に握る我妙計。東國へ赴きしも、豪傑の士を求めん爲、先此鏡の奇特を見せん」と、雲氣の鏡臺錦の袱紗、敬敷飾立て、西に向つて呪文を唱へ差出せば、漫々たる青海原、煙も雲も一つの島、城壘民屋整々と、時を松浦の沖津波、海人の焼く草藻鹽草、手に取る如き鏡の内、是はと計手を打つて、暫し感ずる計なり。臺七は悦びの、天へも上る

其心地、「第七」かゝる秘術を授け給ふ、尊師の御恩報するに所なし。夫に付き某、兼て松兵衛と示し合せ、千束姫を婦妻にせんと、いろく手段を廻らせども、見かけに似合はぬ木娘木像、堅きを砕く我軍學、大小衣服に綺羅を盡し、髮月代摺磨き、口中の掃除迄、備へをまうけて待ちかくれど、今以て埒明かず、先生の妙計あらば忽ち出世、其時こそ御厚恩謝し申さん」と、眞顔のやくたい。普傳は片頬に笑を含み、普傳「千束姫を娘などにイリ利々々々。あれは彼のお草履取の伊達助めと、ほてくろしい色事、性惡の徒娘、攻落さぬ杯とは、アイやはや愚將」と打笑へば、臺七は熱く成り、臺七「さう聞いては堪へられぬ。ガ併、拙者にさへ靡かぬ娘、中間づれに何としてく。コリヤ先生の御惡口、左様不義はござるまい」と、合點せねば猶も摺寄り、普傳「ハテサテ貴殿人が好い、疑しくば證據を見せん」と、件の鏡押直し、奥庭へ指出し、普傳「アレ見られよ小書院に、蹲うて、人待顔は千束姫」と、いふに摺寄り差覗き、臺七「ハ、成程成程、コリヤ奇妙。ハ、又鏡で見る故か一倍見事。コリヤたまらぬ」と、餘念正體目も綾に、見とるゝ影は奴の伊達助、切戸を開けて水手桶、提けて入る體こなたの姫、何かは傍へ寄添ふ影、爰こそと目も放さず、肩で息して守り詰め、普傳「アレく先生、何か物を申す様なが、エ、聲迄は移らぬかい。ハ、なう悲しや、アレ抱付きましたわいの。ア、イヤくついと立つたは奴め

が小氣味悪さに、ハア、コリヤ逆けるさうな。ア、イヤ、逆けはせいで、アあれ又傍へ寄り
ました。エ、アレ見さつしやれ小胸の悪い、姫は後で衿に顔。アレ膝で背中を突きながら、やい
のくくと云ふ様に見えます。エ、さうして何だほてくるしい。アレ、くくく互に肌へ手を入れ
て、エ、けち忌ましくしい。ア、イヤ、くくく、もうくくく此鏡は見ますまい。見るに目の
毒障るに煩惱、モウ見ませぬく、ハテ扱埒もない。何、先生、扱此鏡は馬鹿々々しい鏡でござ
るの」普篤ム、何、鏡が馬鹿々々しいとは。エ、扱は貴殿のお心に、僞事と思召すか。左様ござ
らば其鏡、ドレ此方へまづ納めませう」と、立たんとすれば、發七「ア、イヤ、くくくなに先生、
エ、とんともう、見まいとは申したが、何かのそこに、エ、ちと心がかかりな事も有り、最一度
ちよつと拜見を致さう」やはり夫にと押直り、見ればありく庭の面、移る二人が、發七「アレ
アレくあのマ美しい頬べたへ、奴めが髭を拵付け頬拵は、エ、夫が痛くて堪へらるゝ物かい
やい。エ、是ぢやによつて見まいと云ふものを。ヤア、くアレ又二人が何か囁く様に見ゆる
が、ハア柄杓の水を、ハア、エ、情ない、アレ口移しにしけつかりくつさるわいの。エ、腹の立
つく。コリヤ堪らぬくモウたまらぬ」と抱付く。普傳は胸り鏡はばつたり、臺七は小鼻怒
らし眼を見つめ、兩手で前を壓へながら、鏡に向つて吐く息は、猛火といはんか阿呆らしよ。

普傳は呆れて、普傳「コレサ志賀殿、如何でござる」と、聲かけられて臺七は、苦しげなる聲音にて、臺七「エ、胴欲なぞや千束姫、是迄ト拙が口説く時は、七里けんばい寄せ付けず、たま〜傍へ寄ろとすりや、生猿の様な爪立てて、両手と顔に生疵の、本に〜絶る間とてはなけれど、爰が戀路と明暮に、堪へ〜し甲斐もなく、アレ奴めに頬摺を、させるといふは恨めしい、あんまり聞えぬ〜」と、傍なる人に云ふ如く、たわけのせいらい突立上り、戀の敵の伊達助め、まつ二つにしてくれんと、勢ひ込で駈出す。普傳ハテ扱一興先待たれよ。ひらに〜」と止むるも聞かず、駈込む臺七楠原も、續いてこそは入りにけり。最前より物影に、様子窺ふ兵部の介、手を拱いて歩出で、兵部「ハテ心得ぬ兩人が振舞、殊に普傳が始終の有様、南朝を慕ふ義兵なるか。アいや〜、彼が詞の端々、利欲に溺るゝ奸邪の相、天子を補佐の才に有らず。北朝一味の不義の軍か。ハテどうがな」と首傾け、見やるそなたは夕陽の、影入りはてて遠山に、幽に浮ぶを雲かと見れば、雲にはあらで不祥の氣。兵部「ア、心得ず、時は五月、日は井宿、赤狗の如き雲氣の下には、血流るゝ事千里といへり。正に天市宮に屬せば、候太夫にあらず。ム、ハ、七草の一揆起らん、天のしらせか。ハ、ハ、ハ、ハテ怪敷雲の有様ぢやよなア。イヤ〜、無道にこりし百姓原、一揆の企頼みなし。良禽は木を擇みて棲む、危邦に居らぬは聖人の

戒、匹夫の勇は學ぶに足らず。南朝恩顧の味方を集め、時節を待つて旗上せん。夫よく」と打ち
うなづき、立出でんとする塀の上、見越の松を傳ひ來る、忍びの曲者、透し詠めて兵部の介、様
子あらんと身を潜め、息を詰めてぞ伺ひ居る。奥庭傳ひ出來る普傳、相圖と思しき呼子の笛、
夫と聞くより忍びの者、探り寄りて、曲者「普傳様、彼の御朱印は」普傳「ヤレ音高しく」。暫く夫
にて相圖を待て、盗出して手に渡さん。必ず傍に氣を付けよ」鼻息もせず奥の方、忍びの者は
打黠き、しすましたりと一人笑、今や遅しと待ちゐたり。始終とつくと兵部の介、探り寄つて
曲者の、首筋擱んでぐつと絞め、うんと仆るゝ死骸の裝束、手早に著替る即座の頓智、猶も潜
みて待つとも知らず、普傳は奥より御朱印の、箱を難なく盗出で、探る庭先呼子の笛、時分は
よしと兵部の介、以前の忍びと見せかけて、探り寄りて囁き聲、兵部「首尾は」と問へば、普傳上
首尾々々々。一刻も早く此御朱印、件の方へ急げ」と畏つたと押戴き、天の賜物有難しと、闇
は綾なし五月の空、行方知れず成りにけり。影も眩き銀燭の、光照添ふ千束姫、戀しき人のも
しもやと、奥より忍び出で給ふ。松兵衛は姫君の、素振に氣を付け居たりしが、何氣なき體後よ
り、松兵衛「コレノ」申しお姫様、何をそはく遊ばすぞ。先々は」と膝摺寄り、松兵衛「今日は峯
の社へ御參詣、御神拜も相濟み、又若殿様にも御跡目御相續、斯様な日出度儀はござりませぬ。

いつぞは申上やうと存じました、能い折柄、別の儀ではござりませぬ、アノお前様にはいつく迄も、お一人でも御ざられますまい。畢竟斯様申すもあなたへは、お手習の水上市を、致して上げた唐崎松兵衛、ア、どうぞな、能い聲君を、ヤ夫に付きアノ志賀臺七、ア、苦みの走つた能い男、手跡は拙者、兵法は普傳が高弟、御家中での器用者、其上お前様にきつい執心、お心がござりますなら、拙者がそつとお仲人致しませう。申しコリヤどうで御ざります」と、云はれて姫は面はゆく、千栗あの松兵衛のいやる事わいの、そんな事は此方知らぬ。夫に又臺七が噂聞きともない、耳穢る。モウくくく重ねてから云つてたもんな「松兵衛」ハテネ、左様ならば、くつと下つてお草履取の伊達助め、サ、コリヤどうかお氣が有る様に見えます。何と是にでもなされませぬか」と、口うら引くも胸に一物、とは知らずして、千栗コレ松兵衛、あの伊達助が様な賤い者でも、女夫にも、アノならるゝかや」「ハテ扱夫が外見すの懷子。コレ申し、エ、おまへ様は、隠すくと思召しても、とうからへ、知つて居りますわい。ハテ何と致しませう。お前様のおきらひなさるゝ臺七殿、拙者めがよい様に申しませう。ハテ私も腹からの野夫ではさらくござりませぬ」と、可笑味交て姫君の、得手にほの字へ持ちかけて、乗せる詞に好いたのは、つい乗安く莞爾と、笑顔に戀の糸口も、顯はれさうな折からに、伊達助「申し、松兵

衛様、若君様が召します」と、奴の伊達助出来り、伊達助「扱申し、私めはお庭の掃除、山程御用がごはりまするに、如何に御意なれば、歩中間の身分で高上り、部屋に居るとは違つて、行くも行くも備後表、滑るまいと致すので、一生覚えぬ身は冷汗、もう下郎めはお赦し」と、搦手をすれば、松兵衛道理々々。身共が参つて其趣若君へ申上げ、其方にも休息させん。暫く是に扣へ居て、若し姫君の御用があらば、何仰らうとナイくと、ナ。イヤ申しお姫様、彼の内々の御用を、ナ、夫しつかりと仰聞けられ然るべし」と、底の心は知らねども、粹と不粹の紛れ者、奥の間にこそ入りにけれ。後に二人はさし向ひ、互に心おきの船、言葉のしほに寄り添へば、ちやつと摺退き、伊達助「エ、お嗜なされませ。物堅いお屋敷で、マこんな自墮落な事、後室様のお耳へ入れたら、チ、怖」と、立つ其手をばじつと取り、千裏、其方をふつと見初めてから、いとしらしと思つても、人目の關に隔てられ、つい云ふ事も岩つとじ、色をも香をも知る人は、そなた一人と思つて居て、胸は千束の錦木の、朽ちぬ縁を松島の、神に誓ひし我願ひ、どうぞ首尾していついと、思つて居るにあんまりな、心づよい」と計にて、わけも涙の口説きごと。伊達助「ハ、イヤ、なんは左様仰つても、私は歩中間お前様はお主様、どうして見てもみんな嘘、軽い者でも心は一つ、上下の差別はごさりませぬ。私は疾うから諦めて居ります」と、云はれてはつと差備

き、暫應答もなかりしが、顔振上げて、千束、コレ伊達助、其疑を晴す爲、嘘か誠か見やいの」と、用意の懐劔小指をばつたり。伊達助「ア、コレ夫は」千束「イ、ヤ驚く事はない、お前へ立つる此心中、ア女夫に成つて下さんせ。伊達助とは世を忍ぶ假の名、御本名は」伊達助「シイ、イヤ申しお姫様、疑は晴れました、ガ私ガ心もまづ斯う」と、脇指抜かけ小指の血汐、伊達助「幸ひ爰に有合ふ銚子、コレ二世も三世も變らぬ盃」千束「そんなら疑晴れたかへ」伊達助「晴れいで何と致しませう。イヤ申しお姫様」伊達助「あれ又あんな事計」と詞をしほに抱付き、こちらも得手に帆を上げて、色の湊を出船の、戀風受けし如くにて、何れわりなき風情なり。「不義者兄付けた動くな」と、一間を出づる楠原普傳、二人ははつと消入る心地、普傳「ヤア下司僕めが高上り、主人を相手に不義ひろぐ、言語道斷憎い奴ら、不義はお家のきつい御法度、姫君連も是非がない、觀念せよ」と云ふ聲の、漏れて奥より寄浪御前、續いて臺七走出で、臺七スリヤ何ぢや、姫君も此有様、ハテ斯う云ふ事が有る故に、ヤイ其處な糟奴め、生白けたしや面いまくしい。イヤ申し後室様、此お捌は何と遊ばす」と、何がな戀の意趣晴し。寄浪「ヤイ扣へよ臺七、二人が不義と仰山に、夫には慥な證據が有るか」臺七「ハ、イヤ證據は則ち伊達助めが、爰に居るのが慥な證據」寄浪「イヤ夫は證據には成らぬぞよ、常から若が氣に入りのアノ伊達助、若が伽して夫で爰に、サア夫

が證據に成る物か」臺七「サア夫は」「サアく何と」に行詰り、返答しかなの志賀臺七、臺七「イヤ
慥な證據は此普傳が手に入りし此艶書、國取の姫君が、下司下郎と不義徒、モ隣國の聞えも如何。
コリヤ家の掟は背かれまい」と、てつべい揀ぎの折も折、息を切つて若侍、若侍「最前何者とも知
れず齋藏を切破り、御給言を奪ひ立退きし」と、知らせにハット驚く人々、後室千束は重る難儀。
千束「コレく、申し母上様、コリヤ何とせうどうせう」と、立つたり居たりうろく」と、中に普傳も
臺七も、呆れて詞もなかりけり。寄浪御前は當惑の、胸押さけて、寄浪「イヤナウ普傳、今聞きやる
通りの一大事、緩かせに詮議せば仕様も有らんが、自は女の事、其方は家の輔佐、家國を納むる了
簡、其方の思案は」普傳「ハア某とても火急の場所、御家中列座の其中なれば、思案もあらば遠慮
なく、申上けるも一つは忠義。アレくあつよじは、當家に名高き岩手山、アノ花に似たる花は
ハア何とやら、ヲ、切しまつよじの花も切りしまに、ア、よき思案も有りたきもの」と、底意は何
と楠原が、詞はなぞ、肩に皺、寄浪御前思案を極め、寄浪「ヲ、普傳の詞で、自が心の覺。イヤナ
ウ小太郎、幼けれども石堂の家を継ぎ、讓を請くれれば一國の主、綸旨の紛失、鎌倉への申譯」
是非に及ばぬ此場の時宜、用意を何と白小袖、携へ給ふ手もふるひ御目もうるみ、「コレ小太郎、
神様へ參る程に、此衣服著や」と御手づから、上著の小袖引代へて、無紋の小袖死裝束、それ

と言はねど心には、脱ぎし上著の鶴龜も、千代萬代と祝ひしに、變れば變る有様と、喰しばるのも人々の、手前包めどせぐり來て、隠せど知るゝ息づかひ。小太郎「チ、コレ坊はよい衣服著た」と、稚子の今はと知らぬいぢらしさ。有るにもあられず千束姫、千束エ、御心強い母上様、何ほう武士の子ぢや迎も、腹切れの自害のとは、成人した人の事、五つや六つで何の其、あの子の業では有るまいし、思案してたべ母上」と、身を打臥して泣詫れば、母上涙の顔を上げ、寄浪「そなたも武士の娘でないか、家の爲に侍の子が、腹切るにマ未練な縁言、自は覺悟極めて、コレ介錯をするわいなう」と、立派に云ふも諸士の前。千束イヤく、何ほ立派に仰つても、子を思ふは親の常、少しの事の煩ひでも、神や佛を頼む身に、如何に云譯なき迎も、幼氣なあの若に、腹切らすとは胸愆な、死ないで叶はぬ事ならば、あの子の代りに私を殺し、云譯立てて給べ。母様申し拜みます、拜むわいの」と身を打伏し、弟を思ふ眞實に、頼む身よりも頼まるゝ、母の思は百千萬、包む涙は五月雨の、晴れては曇る如くなり。寄浪御前は氣を取直し、寄浪「未練の歎に時移る、ヤア〜誰かある、切腹の用意せよ。早く〜」と仰の中、ハツト答へて唐崎松兵衛、三方に腹切刀御傍近く直し置き、座を隔てぞ扣へる。母上涙を押隠し、若君の御手を取り、口に稱名九寸五分、手に取りは取りながら、流石恩愛別れの涙、胸一ぱいに突詰めて、

くらむ心を取直し、思ひ切つて我子の腹、突かんとすれば楠原が、何か心に唱ふる祕文、痺る腕寄浪御前、コハ遅れしと取直し、又突きかくれど叶はぬ手先、コハく如何にと後室も、軻怪む計なり。やよ有つて寄浪御前、寄浪「イヤなう普傳、其方を始め人々も、嘸かし未練と思やらうが、子故の間に手も顫ひ、切つても切れぬ恩愛。そなた頼む、介錯して潔う、若の切腹」普傳「アイヤ、夫は御免くださるべし。勿體なくも主人の我君様、エ、亡君に別れ參らせしより、何卒若君を守立て、國家を治めんと思ふ我心、夫に付け後室様へ申上げ度きお願ひ有り、此場の御生害を暫く御猶豫有りたきもの、暫の内は我君諸共、何も共に先一間へ。必ず早まり給ふな」と、様子は何と楠原が、差圖にいなと志賀唐崎、皆々伴ひ入りにけり。後見送りて寄浪御前、普傳の傍へ摺寄りて、寄浪「今其方の思案が有ると言やつたが、どうやら心有りそな事、サア早う聞きたい聞かせてたも」普傳「ハア仰御尤の至り、最前申上げしつよじの謎は、つよじに似たるきり島、ナ、蕾のきり島、憚りながら女儀の才發、夫故に斯くの仕合、御身代を拵へ、首打つて鎌倉への申譯」寄浪「イヤそりや儂り、自が心を引き見ん其爲に、夫で其方の」普傳「ハイヤ、忠義に凝たる此普傳、若御身代顯はれて、云譯なくば腹切つて、鎌倉への申譯」寄浪「イヤモウ、腹切る迄もない、コレ其方に見する物有り」と、取出し給ふ怪の繪像。コレハト普傳が愉り仰天、

曼珠沙華に男女の生血を灑けば、忽ち邪法破るとは、コレ時至る天の告「伊達助」ハツア仰の通り、辰の年辰の日辰の刻に誕生の女、未年未の日未の刻に生ると男、互の血汐は幸に、お姫様と拙者が生血、一ぱいまるつて重疊々々。覺悟ひろけ」と嘲笑へば、普傳は無念の齒嚙をなし、普傳「エ、奇怪や腹立や。よし是からは妖術も何かせん、後室始小太郎千束、奴めも捻り殺して我大望、一天下平均せん事まのあたり。逆も生けては置けぬ奴ら、我本名を語り聞かせんよつく聞け。我は九州七草に、洞理軒と云ひし者、先祖は唐土ヨウカクとて、黄巾の賊と呼ばれし者、故有つて日本へ押渡り、習覚えし妖術を以て日本を切隨へ、其虚に乗りて唐日本、魔國になさん我大望、軍勢催促の其爲に、石堂家の繪旨を奪ひ、小太郎を人質に先手始は、此家を押し領せんと思ひしに、見顯はされて残念々々。まだも工は某に、一家中も大半味方、術は失せても計置く、相圖を印、館も残らず塵灰同然、仕懸けし地雷火は見よ」と、云ふ間に立出る志賀臺七、ひらりと電、楠原が、首をはつしと打落せば、驚く人々伊達助は詰寄で、伊達助「ヤア詮議の有る楠原普傳、何故首を討たれしぞ」と、せけば落付く志賀臺七、後室に打向ひ、第七「アイヤ、最前より普傳が振舞、合點行かすと心付くるに、普傳が工魔術を以て、又此上計り置かんも知れ難く、憎さが凝つて思はずすつぱり。去ながらコリヤ拙者が不調法、譬楠原生置ても、繪旨の

有所安々と、白狀も致すまい。謀でも不義の科人、二人が仕舞を見物」と、空嘯きたるいがみ顔、「チ、なる程尤ぢやが、家の政道正すのに、其方の差圖は受けぬ、自、不義と浮名の立つ上は、二人ながら勘當ぢや」と、仰に伊達助千束姫、身の誤に應答なし。寄浪「チ、姫が歎きを察しやる去ながら、紛失の綸旨、尋出すはそなた二人、ヤ合點がいたか。其時はもとの親子主従、再び歸參の時節を待つ」と、情も籠る御仰、夫を力の有難涙、寄浪「ヤア、臺七、綸旨の日延よき様に申上げよ。普傳に一味の者どもも、そこらあたりには有らうも知れぬ。是より直に臺七は、鎌倉表へ、早急け」と、詞に疵持つ足の裏、底氣味悪く立上り、不精々々に行きしが、臺七「ヤイ家來共、二人の科人用捨はならぬ、門前より追拂へ」と、詞鋭く言放し、立切る襖。千束「コレなう暫し母上様、せめて今一度お顔を」と、立寄る姫を止る伊達助、伊達助「長居は恐れ片時も早く、館を放れて綸旨の詮議、日出度對面待ち給へ」と、萎ると姫を作うて、立上る向ふの方、大勢引具し切石丹下、丹下「ヤア伊達助の糸だて野郎め、似やつた様に飯焚の、お玉杓子を引込んで、三百店でも持たうとはし居らいで、館の姫君千束様を、女房などとは騙つた奴、罰が當つて此丹下が、刀に息を引取證文、死骸は店受葬禮は、投込む寺へお布施はころり、首を渡せ」と呼はつたり。伊達助に「く、打笑ひ、伊達助」ヤアぬかしたり裏店武士、此僕が新世帯、心祝ひと赦

して置けば、竝に外れた惡味憎を、ぬかしたる代のしがはり鱗の齒ぎり腹の皮、寺受狀の一
番筆、切石丹下御座なく候、宗旨は代々笠の臺、離れぬ仲に臨終の、念佛申せ」と嘲笑ふ。「ヤ
ア物な言はせそ打つて取る、かよれく」に家來共、有合ふ手桶おつ取つて、火水に成つて三重打
合ひける。手練の働き根限り、梨割立割捲り切、捲り立てたる太刀風に、むらくばつと小
鳥武士、迸出す後を追うて行く、心得丹下が繰り出す鏑、ひらりとかはして伊達助が、鏑首擱
んでコリヤくく、傍にハアく危む千束、抱へ解いて即座の氣轉、結んで引張る心の助太
刀、ひらいて付込む切石が、思ひがけなき帶の羂、轉ぶ途端に投出す鏑、出合頭の家來が胴腹、
二人重ねて鳥刺突、倒ると丹下を搔擷み、ぐつとさし上げ投付ければ、眼玉飛石切石が、微塵
に成つて死してけり。外に相手も艶きし、姫に付添ふ伊達奴、是も一つは今日の沙汰、明日は
女夫と鹽籠や、出世を松島まつ山の、御恩は母様御主人へ、おほ隈川もならぬ身の、心のたけ
隈名残をば、岩手館を三重出でて行く。

第 四

歌 奥脇街道に本宮なくば、何を他に奥通ひ、夫が旅路の憂さはらし、唄ふ臯月の草苗歌、歌や連

歌の雲の上、供御と云ふから下々の、盛切物相二合半、内裏女臈も喰ふにや縦横十文盛、一膳飯の一粒も、皆百姓の汗零、艱難辛苦の種ぞとは、誰白坂の御領分、植付くる田にづらりと、並ぶ管膏一文字、二百姓おくらヤイ、もう晝餉時ちや有るまいかい。ヲ、今朝から精出しただけ、昨日よりははかがいた、植付ては跡へ寄りく、夫でか腹もア跡へ寄つた。武兵衛も藤兵衛も、お松も煙草にせうちや有るまいか、「よかるく」とすき切火繩、樽に詰めたる煎茶も、吐を床几の一休み、甲百姓何と又此與茂作は何して居るぞいなう。此方は昨日今日に植付仕舞に、三分一もはかどらぬ「與茂作」さればいなう、内の唄衆が此春からの煩ひ、あの和女も心遣ひであるぞいの」甲百姓「サア夫でも植付時に遅れると、秋入の時分迄、草取肥しに大抵や大方骨が折れる事ぢやないなう」乙百姓「いよやいの、何と云うてもあの與茂七の唄衆は、庄屋殿の妹、年貢の時分はどうなりとなろかい」丙百姓「イヤ夫でも堅い氣の庄屋殿、眞直なお人ぢや」と噂半一村の、支配を庄屋七郎兵衛、七郎「ホ皆の衆精が出るよ、随分と働かしやれ。外の人の爲ぢやない、今の辛勞が秋は酬うて来るわいの。シタガもう晝餉時、又休んで働かしやれ」と、下をいたはる慈悲詞、百姓「ハ、結構なお庄屋様、其おまへのお心を、お代官の臺七顔に、ちつと煎じて飲せたい」七郎「ア、コレく、かりそめにも上の噂、ひよと誰が聞くまい物でもない、慎ましやれく、

サアくおれも歸り道、道々咄して歸るぢや有るまいか。百姓「ハイく、今私共も晝休に歸る所、サア御一所に」と氣散じは、茶碗もそこに沖の石、乾く間もなき泥足を、引連れてこそ立歸る。館の騷動仕合と云抜けながら己が身の、志賀へはかくれぬ臺七郎、家來引連れ、欸待顔、臺「イヤ何丹介やい、其方も知る通り昨日館の大騷動、桶原普傳を討つたる故、身共が身には構ひなければ、エ、残念なは千束姫、又憎いは伊達助め、併し毒藥祕方の一巻と、天眼鏡は身が手に入る、是さへ有れば人を懐ける術の第一去ながら、騷動の舉句何とやら心懸り、一巻は懷中もなれど、是此鏡は置所に困る、上屋敷へ行き歸る迄、隠し所は有るまいか、」丹介「何さく、拙者めに御預け」臺七「アイヤ人手に置くも心障、ガ夫はさうと弟臺藏、一昨日から行方知れず、貫平めに申付けたが、未何の沙汰もないか」丹介「ハア、成程、貫平めも諸々方々、臺藏様の御行方、吟味には出しましたが、今に何の沙汰も御はりませぬ」ハテ心得ぬ」ととつ置いつ、思案時つく鐘の聲、臺七「ヤ南無三寶早八つ時、御用の刻限延引は疑の元、エ、此鏡の置所ハテ」どうがなと屈詫も、凝つては思案に悶邊見廻し、臺七「エイ暫しの其間、人の心の付かぬ所」と、畦の間に鏡を埋め、草引覆ひ、臺七「先よしく、丹介來れ」と何氣なく、打連れ彼處へ急ぎ行く。爰に城下の片在所に與茂作と云ふ律儀者、元は河内の武士の果、女房の縁に撚糸の、袖布衣障奥の、けふの仕

事の肩弛く、一荷に荷ふ早苗より、また若草の小娘が、介錯らしけに袂かよけ、親の手助正直の、頭に戴く晝餉物、土瓶片手に、娘は父様よその衆は植付けも、大方濟み、晝休みに行かしたりつたが、此方は母様が寝てぢや故、何もかも遅なつた。嗚おまへは氣が急かう」と、いへばほろりと涙をこぼし、與茂作「チ、よう云うたなア、今更言ふではなけれども、俺も元は上方で、刀もさいた者なれど、ふとした事で浪人し、侍止めて物作、如才はせぬと思うても、拵に追付く貧乏神、未進に追はれて八年跡、姉めは江戸へ勤奉公、おのれやれ土に喰付ても、拵溜めて金調へ、姉めを取返さうと思ふ中、噂は病付く人手はなし、エ、俺や残念なわい口惜いわい、蝶よ花よと、樂は我ばかり、必ずきなく思つて、煩うてくれなよ」と打萎るれば、娘「コレ父様、わしと云うても女の事、何處ぞから男の子貰うて成りと、早う樂して下され」と、眞實眞身のしほらしさ、與茂作「チ、合點ぢやく、氣遣すな、疾と前侍の時、姉のおきのが生れると、直に傍輩衆の子と云號して置いたが、是も其後便も聞かず、其姉といへば吉原とやらに君傾城、とかく我が大きう成るを苗の延びる様に待兼ねる、又庄屋殿は噂が兄なりや、何や角やと氣を付けてくれらるよ、案じてくれな」と云ひつよも落ちぶれし身の跡や先、思ひ廻せば味氣なく、歎く涙の玉苗や、植ゑぬ先より袖濡らす、浮世渡りぞ是非もなき。與茂作「ア、愚癡な事云うて、終泣

て退けた程にの、其様に案じ廻しはせぬ物ぢや、人間は老少不定、今煩うて居る嗚は長生して、
達者な俺が先へころりと死ぬまい物でもない、其時にやわりやどうするぞ」娘、サア其時はわし
や泣くわへ」與茂作「ハ、ハ、エ子供と云ふ物はなあ、コリヤ、ヤイ泣いた辻喚いた辻、死んだ者
は歸らぬわい。いつ何時か知れぬで持った世の中ぢや」と、いふも女房が煩ひの、十が九つ
あつちもの、今から云うて覺悟さす、心と見えて哀なり。與茂作は心付き、與茂作「ヤほんに思ひ
出した、内に藥を煎じかけて置いた、いり付けぬ中汝太儀ながら一走り、一番煎じを嚙に呑し
て来てくれぬか」娘「イ、エ内には昨日來た旅のお侍様、夫はくゝ氣を付けて、内の事は構は
ずと、田へ行て父様の手傳せいでよ」與茂作「ヲ、あの人も由緒有る浪人衆と見たが、さうく、他
人に任せて置かれぬ、つい一走行てくれ」と、云ふに娘も、娘「アイそんなら必とばく、怪我せ
ぬ様に、わしが來るのを待たんせや。どうやらわしは往きとむない」「ハテ逡巡と何言ふぞい、
早う戻りや」と親と子が、見送り見返る畦傳ひ、是ぞ此世の別れとは、後にぞ思ひ知られる。
「ソレはいぢばたの久六が畦は滑るぞよ、隠居の田へ廻つて行け、ヨ、利口な奴、どりやあい
つめが來ぬ中に、植付けて悦ばせう」と、踏込む畦にしつかりと、足に觸るは以前の鏡、「テモ
マア替つた物」と打込しく、見るを遠目に見付ける臺七、丹介引連れ驅來り、臺七「ヤア其鏡此

方へ渡せ。汝が持つて無用の物」と、取りにかよれば、與茂作「ハ、コリヤ御代官様、是は只今私
が田から拾ひ出した此鏡」臺七「ヤア百姓連が持つ物ならず」と、引つたくれれば武者振付き、
與茂作「此方の田から出た物は、お代官でもさう無體には成りますまい、但しお前覺えが御ざりま
すか」臺「ヤア面倒な土穿りめ」と、突放せば又取付き、與茂作「へ、滅多無上に欲しがらしやる
と云ひ、イヤモ隠した物に碌な事はない物ぢや。聞けば昨日殿様のお家に、何やら紛擾が有つ
たけな、夫を思へば、コリヤコレ合點が行かぬ、此方から殿様へ、持つて出て伺ひます」と、
いふに臺七胸にぎつくり、又取りかよるを突飛し、逃け行く首筋引戻す、放せやらじと競合ふ
はずみ、鏡は飛んで深田の中、「小言いはすな夫丹介」、心得抜打ひらりとすかし、あしらふ後を
臺七が、手だれの早世後袈裟、ふり返つて、與茂作「エ、非道な臺七殿、コレくわしが死んでは
の、かよはあすをも知れぬ大煩ひ、スリヤコレ娘一人が路頭に立ちますわいのく、命は助け
て下さりませ、娘ヤイ、おのふヤイ」と、喚くも晝中人や聞くと、主従寄つて滅多切、倒るよ
上に乗つかより、ぐつととどめを四苦八苦、無残と云ふも餘り有り。血押し拭ひ立ち上る。折か
ら何の氣も付かず、戻る娘が、娘「ヤア父様を誰が殺したく。父様なうく、コレ母様はあの
やうに煩うてなり、お前に別れて、わしや何とせうぞいの、コリヤマアどうせう悲しや」と

足摺りしたるいぢらしさ、涙ながらに四邊を見廻し、蟬ム、扱は傍にござる臺七様、親の敵と有り合ふ早苗手早に取つて打付けく、蟬ヤレ人殺し来て下され、在所の衆く」と呼たける。聲に駈寄る一村在所、村人ヤア與茂作を殺しやつたは臺七様か、お代官でもめつたに人を殺しては濟ますまい。此子の加勢は村中一統、サア元の様にしてかへしや、何で殺した譯聞かう。どうぢやく」と田舎育の高調子、聞付け駈け来る七郎兵衛、争ふ中へ割て入り、七郎「マ、マ、村の衆俺が来るからは悪うはせぬ。おれに任しやくく」と、臺七に打向ひ、七郎「イヤ申しお代官様には、エ、どういふ譯で與茂作を、此様に慘たらしう、お手打にはなされましたな、日頃から正直正統なアノ男、無禮致さう様もなし、様子によつて此庄屋も、聞捨には致すまい、コリヤ急度吟味を」臺七「ヤイ黙り居らう、與茂作とやらんが殺されたる其場所へ來かよつた某、何ぞや身共が殺した、エ、それには何ぞ證據でも有るか。土穿りめが、又それなる女郎め、親の敵などと譯も云はず、苗を以て打付け、コリヤ見よ、侍の顔に泥を塗つたる慮外者、眞二に打放す」と、反打かよれば、とどむる庄屋、娘を圍うて在所中、村中「ヤア何ほでも切らしはせぬ、ヲ、それく、非道な事に人が切れるか切つて見や。お代官でも怖うない、さうぢやさうさや」と口々喚く、七郎「ヤレ村の衆喧しい、靜かに物を言やいの、又臺七様も臺七様、此子

の慮外は計の事、畢竟申さばコリヤコレ、幼少の頑是なしと申すもの、それにお手打などとはへ、ちとお役柄に似合ひませぬ。又與茂作が殺されてゐた所へお出なされましたが不仕合、是非お前様もナコレ懸り合と申すもの、此通り殿様へ村中一統訴へます、さう心得て御ざりませ」と、理窟親仁に云ひ込められ、返答しかなの其折から、臺七が家來貫平、息を切つてかけ來り、貫平「お旦那是に、弟御の臺藏様、昨日よりお行方詮議致す所、隣村明神の森の内に此お首、お骸は一町ばかり、山道に捨て置いたを、漸見當り則持參」と、聞くより悔り、臺七「何弟臺藏が隣村に殺されるたとな、へエしなしたり何者の仕業ぞ」と、驚く中にも一分別、臺七「コレ見よ庄屋百姓ども、身が弟一昨日より行方知れず、然るに今聞く通り、殺されたるも隣村、是を思へば人を害めるあぶ者、此近邊を徘徊するに疑ひない、すりや與茂作を殺したも、大方同奴と思はるよ、見れば數所の刀疵、百姓づれが手際でない、浪人者など尾羽打枯し、荒れ歩行に違ひない、何と與茂作は身が殺さぬと云ふ事、サ是で疑ひ晴たか」と、頓智の倭姦辯舌に、云ひ廻されて百姓ども、流石の庄屋も理の當然詞の一理、思案の吐胸、臺七は仕濟し顔、臺七「マナニ丹助貫平やい、ソレ弟が死骸、身が屋敷へ持ち歸れ、ア思ひも寄ぬ災難、七郎兵衛身が心を察してくれやれさ。ナニ與茂作とやらも不便千萬、娘が歎き思ひやる」と、此場をくろめる間に合

詞、善と惡とは紛はねど、暫の曇天道の、鏡に心残れども、家來引連のさばり行く。跡は泣き入る娘のおのぶ、庄屋が差圖に在所の者、傍の戸板に與茂作が、死骸を乗せて昇よれば、まだ幼氣なき子心に、思ひ詰たる孝行の、念力通す大磐石、敵は誰とも白石や、石に矢の立つ例し迄、弓も引く方在所中、田の面の蛙なき連れて、我家にこそは立歸る。早黄昏の畦道を、うそく戻る志賀臺七、あたり見廻し見覺えの、深田押分け件の鏡、忝なしと押戴く、後へぬつと忍びの曲者、鏡撈ぎ取り臺七が、脾腹を一當一散に跡を晦まし、三重行空の、

第五

陸奥は、何處は有れど鹽竈の、それにはあらで朝夕の、煙も細く白坂の、城下に近き逆井村、與茂作が留守のうち妻は春よりぶらくの、枕も床も散積る、山田の畦は見晴せど、晴ぬ思ひやありし世を、忍ぶ涙の六畝七畝、やせ百姓の氣も浮で、水に汗をや絞るらん。七助、ヤどうちやかみ様、ちと氣色は良いかの」と、すつと這入れば女房おさよ、枕を上げ、おさよ「ホ七助殿おうね女郎ようこそ見舞うて下さつた、昨日今日は少し頭痛も止んで悦びます」七助「ホそりやよ、ござる、折節見舞たうても知つての通り植付時分、與茂作もこなたの病氣何かで、嚙わくせきとして居ら

れう」あまよ、アイ推量して下さりませ、したが今日つと見えた旅のお侍、足が痛むとて宿の御無心、今日も逗留して御ざるが、何から何迄氣を付けて藥迄煎じて下さる、ア氣の和かいお人様、それ故與茂作殿もおのぶも田へやります、留たお人のお蔭故植付もはかいき」と、咄しに二人が、七助「さつてもなう、與茂作も元は侍であつたけな」もうね「ア、正直な善いお人、夫に引替へアノお代官の臺七殿、百姓の油を菜種の様に搾りぬく無得心、此まあ代官には何がなるぞいなう」もうね「夫いの、ヤほんにそれで思ひ出した、爰の殿様の御家に昨日大紛擾が有つたけな」七助「ヲそれく御家老の普傳殿、何やら鎌を遣ひかけて、とうくれこさをやられたとの噂、今の殿様は御幼少でしほく髪のうへ付時、後室様は四十足らず、どうでも後家御の青田でも刈りかけたか、但お姫様をかいわり菜ちよびと摘菜と云ふ様な事であるかいなう」あまよ「フン夫れでも武士と云ふ物か」七助「アイヤ武士はぶしちやが穀潰、喰ひ潰し」と打笑ふ。藥求めて立歸る浪人姿 窺 れても、捨扶持にして五千石一萬石とは見えすく骨柄、浪人「ホコレハ在所の衆御免なりませアイタ、ハア」七助「今かみ様の咄で聞いた御浪人、お足が痛ますさうで氣の毒様やの」浪人「さればく、某は諸國を巡る浪人者、ふと足を踏損じ、昨夜から思はず此家の世話になります。それはさうとナニちと所の衆にお尋ね申したいは、エ此邊に杉本甚内殿と申す人

元は上方の浪人、今は此邊の百姓と成りゐらるゝ由、各方御存ないか」七助「さればなア、甚内とは覚えませぬ、錢ないならば此處ら一面、銀ないちやんないお望次第、うかく、咄て肝腎の仕事忘れて錢ないに、なつてはたまらぬもういにます」もうね「かみ様随分用心さしやれ、御浪人様面倒ながら世話して進せて下され」と打連れ田の面へ急ぎ行く。浪人「ア、流石田舎の正直一遍、が一へん尋ねて知れぬ人、ハテどうがな」と思案中、床をたよく病ふの女房、おまよ「御浪人様、お足の痛は良ござりますか、却つてお世話になります」と涙ぐめば、浪人「ア、氣の弱い、一人旅の迷惑は、宿貸さぬ時は山に寐たり野に寐たり、一昨日などは隣村の明神の森の内、一夜を明す程の事、一樹の蔭一河の流も他生の縁、まして昨夜よりの宿の無心、見れば人手も内證の、暮し見る目も笑止さに、介抱致すもお宿の返禮」おまよ「コレハ又御迷惑、必ず氣兼ねされますな。イヤ申しそれに付いて、今お咄しの杉本甚内といふマ何の御用でお尋ね」と、問ひかけられて、浪人「さればく、拙者も面は見知らねども、其甚内と云ふは河州の浪人身が親とは至極懇意、幼少の御其方の娘と某、行々は夫婦にせんと云ひ約束、ふとした事で浪人せられ、此邊にと風の便、此方の親も相果て流浪の身、斯申すは楠家の浪人、金江勘兵衛が勲谷五郎」と、半分聞

が舅殿か「あま上」チイノ「浪人」是はしたり」と互に手を打ち、「さうとは知らいで夕からよそ外の他人待遇ひ、戻つて聞かれたら嘸悦び、モそれ聞いて如何やら氣分もよい様な」と、ぞく／＼悦ぶ女房に、谷五郎も安堵の思ひ、谷五郎「イヤモほんの燈臺元閣し、奥聞かうより口祝ひ、晩は目出度う盃事」あま上「チ、昨日は旅の御浪人今日は掣殿」「姑御」ヤレ嬉しや」と女房が病ふの床も忘れ水、絶えて久しき名乗合ひ悦びあふぞ道理なり。谷五郎心付き、谷五郎「シテ其以前親々が、云ひ約束致せしと有る御息女は何國に、夜前より左様の女も見えず、心得がたし」と尋ねられ、ハットと胸も突つめて何の返事も、どぎまぎ／＼、あま上「サア其姉娘は今内には」谷五郎「ム、すりや、外々へ縁組でも」あま上「イヤ去御屋敷へ御奉公、是も追付お隙を貰ひ、目出度く祝言させませう」谷五郎「チ、重疊々々」然らば後程親仁殿、歸られ次第打明し、改めて掣舅、ドリヤ酒買うて参らうか、留守の内に戻られたら様子徳利引提けて酒屋へこそは急ぎ行く。後に女房がうつとりと、暫詞もなかりしが、あま上「ア、世の中の、苦は色かふる習はしとは誰がいつの世に、云ひ初しぞ、元は楠普代の家來、杉本甚内と云れし身の、浪々の身の方として百姓と迄成さかり、本名かくすそのうちも、以前娘の云號、勘兵衛殿の惣領子谷五郎に廻り合ひ、女夫にせんと思ふ願ひも、過し年の水指早損、仕慣れぬ業に辛苦の迫り、未進の替りに姉娘は、君傾城の

憂勤め、それも浮氣徒ならず、親の水牢見て居られず、孝行からの勤奉公、やうく未進は納めても、納め兼ねたる貧の病、さぞや娘が心にも今日や迎ひにくる事か、明日やとばかり在所の空、ながめて暮さん可愛やな、年月焦れた聳殿に、不思議に廻合ひながら、その娘はと問はれた時、何と返事なるものぞ、うき川竹の勤の身、多くの肌觸れたと、聳殿が聞かれたら若愛憎も盡けうかと、思へばく、いぢらしい、どうぞ仕様はない事か。聳殿の戻らぬ中早う相談して置きたい、戻つて下され親仁殿、背中に腹はかへられぬ。いつそ妹のあのしのぶ、姉の替りにやつてなり取戻しては下されぬか。ア、それも不便さ浪人の、いかに貧苦にせまればとて、姉も妹も浮勤あんまり惨いぢらしい、只さへわしが胸一ぱい、辛苦艱苦の七重八重、何と命が續かうぞ、談合したい親仁殿、いつに替つて戻りの遅さ、どうした事」とのび上り「親仁殿、與茂作殿」と呼び病に弱る女氣に、それは此世を去しとも、知らで焦ると胸の火に、涙の湯玉涌返り、叫び慄がれ泣き仆ふれ、病疲れたる泣寢入、はかなき、夢をや結ぶらん。なき魂も、死出の田をさとはやなりて、歸るにしかじと泣くやらん。血を吐思ひ七郎兵衛、泣入るおのぶが手を引いて、しほく戻るあとからは、戸板に空しき與茂作が死骸を乗せて、在所の者。村人「イヤコレ庄屋殿、此佛内へ入れたら直に惣黨の坊様を」七郎「ア、コレシイ」。聲が高い

わいの、知つての通り與茂作が女房はおれが妹、此春からの大煩ひ、此土用が持てまいと案じる程の病の中へ、與茂作は切られて死だというたら、いつそ直に泣き死。モどうでは云はにやならぬ事ぢやが、せめて一日寸時なりと息災で置たい。コリヤおのぶよう聞けよ、今内へ這入ても、與茂作が死だ事はコレくぢやぞ。エ、酒に酔てよう寢てゐるといふ程に、必ず汝も嗚に泣顔見せなよ、ヨ、サミ悲しいは道理ぢや。無理ぢやない。が今知らすと母はナすぐに死でのける、モ一時に二親に離れたあと、汝が途方にくれて、うろくするで有らうと思や、モ思ひ返しが知られて、涙がはらくくくと、イヤナウ皆の衆、一村の束もする者が、女子共の様にめめる泣くと、笑うてばし下さるなや。シタガ又此佛の様に不仕合な男はないわいの、其くせ正直で神信心、是を思へば世上に神も佛も、おりやないと思ひます」と、云ふにおのぶも泣く目を拭ひ。おのぶ「姉様は遠い所へ行てなり。只さへ便のない上に、母様のアノお煩ひ、杖柱とも思つてゐる父様に此様な、はかない別は何事ぞ。又此上に母様が、若もの事があつたらば、妾やどうせうく」と、わつと泣き出す口に袖あて、七郎「是はしたり今も今とて云つて聞すに、コリヤ其泣聲を嗚が聞くとすぐぢやく。スリヤ第一嗚へ不孝ぢやぞよ、泣きたいも孝行、所を又泣かぬも孝行、ヨ、賢い者ぢや聞分けよ。ア、親ぢや物子ぢや物、泣のが無理ではないわいの可愛の者や」と

抱しめて、短羽織の襟先も喰しぼりたる恩愛の、庄屋が涙は一村の時雨に増る貰ひ泣き、氣を取直し涙を拂ひ、七郎「ア、泣くまい、モウ泣かぬ、モウ泣かぬ。サ、皆の衆、そんなら内へ昇入て貰ひましょ、ヤコレ今も云た通ぢや、必何も云うまいぞ、おのぶも合點か、呑込だナ、サ、サ早う」と泣顔隠して内に入り。七郎「ホ是は又滅相な、其大病で端近へ出て堪る物か、コレハ扱寢て居るか、チ、それも幸ひ、サ此間に早うくア、コレ靜にく、チツトよし、」村人「ハイハイそんならお寺へ行くには」七郎「ハテ扱いらざる事云うまいてや、何も云はずと去だく。コリヤおのぶ、ソレ蒲團を出して、父によう著せて置け」と、おさよか寢姿打守り、「ア、寝れたな、何として土用は越まい。端折鏡の兄弟、今汝が死んだら俺も力ないわい、カ此上へ風引したら堪るまい」と、立寄つて抱かよへ、七郎「コリヤくおさよ、風吹に滅相な、サ、床へ這入つて夜著きて寢や。コリヤおさよく」と、喚様イなう」と、揺起されて振仰のき。おさよ「ヤお前は兄様、七郎兵衛様か」七郎「チ、マ、マ、氣色も大分能さうで嬉しいく」おさよ「アイシテお前はいつの間に」七郎「イヤたつた今、コレ汝や寢惚けたか、おのぶも爰に泣いてゐる、アイヤ笑うてゐる」おさよ「チ、おのぶ、わがみや父様と、一所に戻りやつたか」おのぶ「アイ喚様精出して藥を呑み、どうぞ早ふ達者に成つて下さんせ、私は使ない」としやくり上ぐれば、おさよ「チチ

「此子とした事が、私が煩うて居たとて、父様は達者なり、其上七郎兵衛様と云ふ結構な伯父様はあるし、何便ない事があるぞ。ソシテ父様は何處にぢや」七郎「チ、用の有るも道理々々、逢たかろく、ガ與茂作處にぢやぞいの、急な用が有るはいの」七郎「チ、用は取分苗の出来もよし、南無阿彌陀佛、アノ酒呑で南無阿彌陀、それはくよい機嫌で、そしてからアノよう寢入て居るわい、モウモウどんな急用があつても、あれではモウ間に合うまい程に、俺にでも相談しや、サ咄しや。急な用とは何事ぢやく」七郎「ム、與茂作殿は酒に酔うて寢てかへ」七郎「チ、寢てゐるともく、百年立つても起る事ぢやないはい」七郎「エ、時も時と今日に限つて、チ、そんならお前に談合せう。コレタベとめた旅のお人はナ、こちの掣の金江谷五郎殿ぢやわいなう」七郎「ヤア、ム、シテそれが如何した」七郎「サアあの人もこちらを尋ねて、やうく今先咄し合ひ廻り逢うた嬉さ、酒とてくると隣村へ」七郎「ム、まあよし」七郎「サア夫に付てお前も御存の、其谷五郎殿に云號の姉のおきのは、八年あとの難儀の時に勤奉公」七郎「チ、知つて居るく、それも親の爲ぢやもの、大事ないく」七郎「イエく、それでも掣殿の手前はさうも云はれず、お屋敷へ奉公にと

云ひくるめ、常分はそれで濟めども、行々は取戻さねば聲殿はもとより親達への聞も」七郎「ヲ立ぬは道理ぢや〜」七郎「サと云うて金の才覺の出来る身代でも」七郎「ヲ、無いも知つてゐるてや」七郎「サアそれぢやによつて私が思ふには、いつそエ、妹のおのぶを、不便ながら替りにやつて」七郎「エ、もうそんな事云ひやんないなう、年も行ぬ者を可愛さうに」七郎「サ、イエ〜それでも早う姉を取戻さにや、傾城に賣つた事、ひよつと聲殿が聞かれたら、日頃堅い與茂作殿の氣質では、谷五郎殿の手前を恥ぢ、短氣な心でも起らうか、百姓なれど以前は武士、姉を勤にやる時さへ、腹切るの何のつて突詰めた侍氣質、煩うてる其中に、若其様な事があつたら、私我先へ死まする。コレ兄様、どうぞよい了簡を」七郎「サ、合點ぢや、ガおれぢやと云つてどうせうぞ、マ此様な悲しい事の數々が、一時に出来るといふ因果な事の聞役は、けふ一日で百年の命が縮む」と計りにて、涙吞込む横しぶき、顔を背けてくひしぼる。七郎「エ、可愛や妹何にも知らずに」七郎「エ、コレ〜兄様思案が付いたかへ、サ、どうせうぞいな」七郎「ヲ、尤もぢや〜、が、どうせうぞ」七郎「エ、おまへの子でない故に、返事のないも、ヤコレ〜、親父殿起ていなう」七郎「ア、モウ起さずとよしにせいやい」七郎「サ、イエ〜お前は遠慮がある、親父殿に咄して相談せねば氣が濟ぬ」と、死骸に這寄る女房を、七郎「ハテ扱コレ、マ、寝さし

ておきやいなう」と獨氣をもむ七郎兵衛、おまよ「イエ、今にでも聲殿が、戻られては談合ならぬ」と、隔る兄を押退け、蹠躑立寄る死骸の傍、コハ心得すと引まくる蒲團の中、おまよ「マア親父殿は切られてか、ハアハツ」と計りにてうんと見つめる病人を、抱きかゝへて七郎兵衛、七郎「コリヤ、おさよ、氣をしつかりと」おのぶ「噴様いなう」七郎「おさよヤイ。エ、おれがてつきり斯うであらうと思ふ事、エ、如何せうぞ。コリヤ、おのぶ、ソレ水を氣付に、茶碗を一口」何を云ふやら狼狽騒ぎ、七郎「コリヤおさよヤイ」おのぶ「噴様いなう」七郎「おさよヤイ」おのぶ「か様いなうか、様」と、伯父姪聲の續くだけ、息をはかりに呼立つれば、漸に目を開き、おまよ「チア兄様か」七郎「チ、兄ぢや七郎兵衛ぢや、氣をしつかりと」おのぶは「おのぶは」おのぶ「アイ、アイ爰に居るはいな」おまよ「チ、おのぶか」七郎「ソレ何ぞ呑む物一口」おまよ「チ、もう快い、氣がはつきり成りました、コレ兄様、與茂作殿は誰が殺したへ。コレおのぶ父様は誰が切つたぞ、何故母に隠しやるぞ、親の敵取る氣はないか、コレ其方も武士の種ぢやぞや。コレ七郎兵衛様、敵は何所の何者ぞ、おのぶ知らぬか知つて居るか、エイ、何故此母には隠すのぢや、エ不孝者」と叱られて、云はんとすれど泣いじやくり、おのぶ「アイ、コレ母様、最前おまへに藥をあけに戻り、田へ行て見ればと、様はあの通り、傍にござるは、御代官の臺七様が」と皆迄聞かず、おまよ「ナニ

御代官か、ム、スリヤ親父殿の敵は臺七め」と、立上るを七郎兵衛、七郎「コレくくくマ、マ、待てくくく、マア急かすとあとを聞けやい。チ、俺も畑であいつが泣聲聞き付けて、行て見れば臺七殿、日頃からの氣質と云ひ、コリヤてつきり手討にやられたと、思へどそれと證據もなく、村の衆も一統に、おのぶめが肩持つて、めつきしやつきの其所へ、臺七殿の弟臺藏殿が、一昨日の夜、隣村の明神の森に、切殺してあつたと、家來が注進、スリヤ與茂作を殺したも、臺藏殿を殺したも同じ切人に極ると、臺七殿の詞も一理、何でも近在に居る荒者か、浪人者どもが切取か、又は武者修行といふ様な奴の仕業で有う」と、噂の内に谷五郎が、以前の咄に氣の付く母、おまよ「ム、隣村の明神の森の中に、一昨日の夜、ム、チ、嬉しや兄様、敵が知れた、おのぶ悦べ」おのぶ「エ、」七郎「ヤ、敵が知れたとは、ド、どこの何やつ」おまよ「イヤ外でもない犂の谷五郎」七郎「ヤア、トハ又どうして」おまよ「サア最前何かと咄の次手、一昨日の夜は明神の森で一夜を明せしと、ツイ云つた咄も耳に留り、今思ひ當りしも矢張佛の御引合せ。其上小袖の袂先に、血の付有のも見付けて置いた。私が爲には夫の敵、此子が爲には親の敵。コレ兄様、何卒二人が力と成り、敵を討せて下さんせ、頼むはお前ばかりぞ」と、手を合すれば、七郎「エ、頼むの力とは何の事ぢやぞ、おれが身にも懸つて有る事、コリヤ親は泣寄氣遣すな、

儂おのれやれ年こそ寄よりたれ七郎兵衛、おのぶも必ず油斷ゆだんすな。侍でも浪人らうじんでも騙だます手なしぢや。ガ、マア病人あひまは危あぶないく、俺おれに任して奥へ行きや、サマア奥へ」と勸すすめ遣り、幸ひ薄暮うすぐし勝手かつてもよし、鉢巻はちまきしつかと身拵みぢへ、百姓ひやくしやう業はなま中に、鑄刀きうたなより棒三昧ぼうさんまい、娘は手馴てなれし草刈鎌くさかりがま、帶引ひきい締めて谷五郎が、歸りを今やと納戸なんど口、身を潜ひそめたる心根こころねは、健氣けんけいにも又萎しならしよ。永ながき日も早夕暮いらひひと入相いりあひに、迷ふ山道谷五郎、やうく戻る表口、あとより付け来る忍びの武士、手手てんでに十手差足じゅうしやあし拔足あし。とは知らず内に入り、谷五郎「コレハしたり、日が暮れたに火も點ともさず、コレお袋様、痛いたむ足で道に迷ひ、大きに隙取りました、嘸さかお待遠まちのほ。親仁殿はお歸りか、コレどこにぢや」と探り寄る、後へぬつと七郎兵衛、薙倒たぎたかさんと寄り棒の、さそくをきかして蹴け蹴こすこなた、親の敵と打懸うちかかる、娘が小腕こでんのなぐり鎌がま。「コハ心得ず」と谷五郎、かはしてずつと引寄ひきよすれば、わつと泣く聲母親が、差出す行燈あんどん七郎兵衛、臆おそを冷して力身居りきみゐる。谷五郎「ヤア 某それがしを親の敵とは、仔細しさいぞあらん、何とく」と「まさよ」ヲ云はいではいの、今日晝けふひる、上の田かみの畦道あぜみちで、夫を殺したは儂おのれであらうがな」谷五郎「ナニ與茂作殿を殺したとは」ヒヤア云うまいく谷五郎とやら、退引のつぎならぬ證據しやうこは、ソレ儂おのれが小袖こそでに血汐ちぢと云ひ、一昨日そごり日明神の森に、一夜を明したと最前さいぜんの物語「七郎」コリヤ其森の内に侍の殺してあつたも儂おのれが仕業しわざ、武士に似合はぬあらがうか、勝負々々」勝負々々と詰寄つよれば、谷五郎毫ちよう

とも臆せず、谷五郎云分は未練に似たれど、與茂作事は眞以て覺なし。如何にも明神の森の中に、一人を害めしは、此金江谷五郎」と、聞くより表の志賀臺七、ソレとかけ聲官平丹介、十手を振上げ取圍めば、「コハ狼藉、何奴」と云はせも立てず、臺七ヤア只今儕がぬかせし、森の中に汝が手にかけし臺藏が兄志賀臺七、弟が敵遁れぬ所、覺悟々々」と呼ばれば、からくくくと打笑ひ、谷五郎「與茂作の敵と切掛しは、老人と云ひ女はらべ、あしらひ居たるに好い所へ臺七とやら、相手に取つて面白し。誰かは知らねど明神の森にて一人の侍を殺せし一條、包ます語るよつく聞け。我武者修行の願ひを發し、あまねく日本六十餘州を廻りて、我に増りし人に逢はんと、一國に一箇の首塚を築き終れど、手に立つ者もなき所に、一昨夜隣郷にても、一人を手に懸け首を手向け、祈願を込めし感應にや、天晴ゆよしさ武士に出會ひ、再會の約仕たり。かく一人を切取れば、此家の主を何害せん。卑怯未練に包隠す谷五郎ならず、汝如きのへろく、武士、敵などは事をかしゃ、一度にかよれ」と身構へたり。「ヤア物な云はせそ討取れ」と、下知に隨ひ一二のかけ聲、左右に組付く丹介官平、首筋擱んで狗子投、手練の手竝にさしもの臺七、騙て討たんと引返す。遁さじものと駈出す谷五郎、どつこいさうはと帶際しつかり、取付く官平丹介を、蹴飛ばす金江の金脚に、叶はぬ敵るせと逃出す二人、襟際ぐつと引据ゑ、谷五郎「コリヤ此家の主與

茂作を殺せしは、汝等が主人臺七であらうがな。何科あつて手にかけてしぞ、サ有様に白狀ひろけ」と、挫付けられ、官平丹介「ア、申しますく、臺七様は寶の鏡、田の畦へ隠されしを、與茂作に見付られ、夫故の此行動、私共は知らぬ事、命お助けく」と、泣詫のこそ見ぐるしき。谷五郎「ホ、能くぬかした。何といづれも、モウ此上は某に」おさよ「ヲ、疑ひは晴れました。親仁殿の敵は臺七」谷五郎「ヲ、此奴も敵の片割、當座の腹癒まつかう」と、ぐつと一しめ目をむき出し、手足をがき死んでけり。「イザ此上は臺七め、追驅付けん」と立出る、向ふに臺七種が島、狙ひかたむる此方には、筒先き伺ふ表の松の戸、立切る曲者、「ヤア邪魔ひろぐな」と立掛る、志賀が眉間に打付ける、礫は御鏡悔り仰天、以前の手竝に二度のこり、鏡手早に拾ひ取り、跡を晦まし逆行く臺七、板戸蹴破り駈け出る金江、谷五郎「ヤレ待たれよ」と聲をかけ、覆面頭巾取捨つれば、「ヤ、昨夜明神の森にて」兵部「ホ、義を鐵石に結んだる、宇治兵部之助正之」谷五郎「ムウ其正之が何故に、敵臺七を見遁せしぞ」兵部「ホ、不審者、さりながら、貴殿の爲には眼前舅の敵というとも、勢ひ破竹の北朝を打亡し、南朝を取立てんと、義兵の大切を思ふ者、斯程の小事に拘るべからず。卑怯未練の臺七なれど、コレ今の如く飛道具にて取圍まば、貴殿孫吳が術ありとも、などか是に敵すべきや。大功は細瑾をかへりみず、殊に臺七普傳が祕方の毒藥、傳

授の一卷所持すれば、何卒傳へ聞かん其爲に、我手に入りし天眼鏡も、思へば邪宗不祥の器、天下を治むる寶にあらねば、彼へ返して恩をかけ、慙と此場を見通したり。只此上は與茂作の、娘達に力を添へ、敵を討たすが肝要ならん。敵臺七も當所に居がたく、鎌倉へ逃行かんは必定、我も是より由比が濱に立歸り、猶も味方を牒じ合はさん。ヤ、ナニ七郎兵衛殿とやら、何かどの様子はあれにて聞く、ハア御愁傷察し入る。中陰事なう相濟めば、必ず尋來られよ。姉娘も江戸にとやら、何かの用事も承らん」と、慈愛の詞寛仁大度。ハアト兄弟かたじけ涙、谷五郎も理に服し、谷五郎「ハ、誤つたり、臺七ごときの國賊を、相手と云ふは大人氣なし、敵討は兄弟の女、お頼み申すは兵部殿。我は彌此程の、貴殿の指揮に隨ひて、難波の浦の惣大將、四天王寺の東門に陣所を構へ、寄せ來る諸軍、仁木細川吉良石堂、北朝無二の賊臣共、みつの濱邊の眞砂の數や、潮の如く起るとも、習ひ得たりし諸家の軍法、魚鱗鶴翼堅早破軍、進戰退闘利變の術、堅きを碎き、鋭どきを挫ぎ、奇正突衝立花八陣、五位の兼備、四十八箇七十二種、二百八十四箇の兵略、爰に開きかしこに寄せ、變に應じ奇に望み、時に大江の岸打つ浪、難波の芦の浦千鳥、むらくばつと捲り立て、名を高天に輝さん。若しも天運至らば、固の場所を一足去らず、腹かつさばき討死の、末世の手本となすべし」と、詞は正に當れるかな、

反逆露顯の時至り、四天王寺の東門に、骸はさらせど名は朽ちぬ、金江が義心ぞ潔よき。兵部之助も莞爾と笑ひ、兵部「ホ、面白しく。某も鎌倉にて、志賀臺七に尋逢ひ、楠原普傳が秘法の毒藥、術を以て受傳へ、其後一人に力を合せ、姉は長刀妹は、田舎に育てば手馴しやい鎌、晝夜鍛錬修行を積み、親の敵を討たせん事、此兵部が方寸にあり、必ず氣遣ひ無用ぞ」と、實頼もしき武士の、花はみよしの南朝に、二代の忠臣菊水の、流は世々にかんばしき。涙拂うて七郎兵衛、七郎「エ、いさましいお咄を、聞くに付けても果敢ない與茂作、もとはやつぱり楠家の浪人、谷五郎殿へ云號の、娘は吉原傾城の、勤も親へ皆かうく、必ずくお見捨なう、お頼み申す谷五郎殿。兵部様にも此娘、姉と一所に親の敵、お討たせなされて下さりませ」と、病の母もともくくに、引合はす子も老の身も、目には涙の陸奥や、末の松山千代かけて、夫婦の固め經陀羅尼、願を金江谷五郎、今日より親の名を繼ぎて、金江勘兵衛正國と、名乗り別るゝ兵部之助、諸國を廻り武者修行、兵部「大願成就此上は、鎌倉に立越えて、姿を變るも一つの術、宇治の常悅正之と、尋ねられよ」と、互の誓。亡骸送る泣く三人、出行く二人も亡人を、心ばかりの弔ひと、云はぬ色なる一包、黄金花咲く山おろし、夜もしらぐくと白石の、親の敵の孝行一心、五十四郡や六十餘州、旭の勢ひ山比が濱、一天四海に菊水の、武勇の旗をぞなびかせ

り。

第 六

どぢやう「サア、且那方、お茶屋様へお腰こしでもおかけなさい。今日は結構けつこうなお天氣で、私も仕合、観音様くわんおんさまもお仕合でござります。咄はなしも差合のない私が、作つくつたのをあけやしよ。お聞きなさい、且那方の前だが、兎角さかどせ世界は儒佛神じゆぶつしんの、三つでなければいきやせん、其中でも佛法は口あたりが能いいから、とかく繁昌はんじやうするはナ。お立合にお寺様方もござりやせうが、アノ地獄極樂ぢごくごくらくの繪圖えいずをかけて、坊様ぼんさまが繪解えいげをするのをお聞きなさい、ハとんだ事よ、ハ、此方こなたに御ござるは極樂の體相ていさう、此世に置いて佛法信じ、善根ぜんこんの功力くくりきによつて、上品上生の佛體ぶつたいを得たる所でござる、こちらは地獄の體相ていさう、此世に於おて牛馬うしうまをむごうしたる報むくいによつて、人間の頭かぶちに牛馬の體相ていさうが付ついてござる、なんぞといふとナ、ばア様達たちが手を合して、なんまみだく、わしやアどうも呑のみ込こまないはい。且那方の前だが、牛馬をむごくした報むくいで牛馬になるなら、念佛ねんぶつを申さうより、手短てみじかに、此世で佛を憐あはれしくしたら、ナア佛になりさうなものヨサ。斯かう云ふ所はうべんが方便ほうべん、私共わがが斯かう云ふも、錢ぜにが貰もらひたさ、ハイ、是はお侍様、ハイ、是は、町人ちやうじん方は格別かくべつ、錢ぜにになる」と、お

前追まへつるしやう従口合じゆくあひに、一文三文四文錢もんせん、並大抵なみたいていな口ではないと、面々めんめん笑ひ催もよほして、我家々々へ立歸たてかへりる。跡あとにどちやうは錢揃ぜにそろへ、どちやう有難ありがたい、今日けふもまづ五百にはなりました。モシお茶やさん、よつほどせが付きましたから、一ぱい呑んで参りましょ」茶ちや「ナ、御大儀々々々。イヤ先に内うちから持つて來たコレほた餅もち、時分じぶんがよか参らぬか」どちやう「是は有難ありがたい。併し今は一ぱい呑んで参りませう、ほた餅は又後のちに」喰くうたら馬道の酒やをさして急ぎ行く。参り下向ひかのその中に、人付合ひとづきあひも吉原で、大福屋の惣六、同じく跡あとに牽頭たいごの五町、五町モシ角町すみちやうの親方わかし、私はちよつと寄る所よるところがござりまする、おまへは直すに御歸ごかへりりなされまするか」惣六「イヤ、江戸へ行く所もあれど、待合まちあひす人もあれば、ちよつと堺屋へ寄つて行こ」五町「ハイ夫なら後程々々」と、五町はかしこへ惣六は、茶屋の奥へぞ入る跡へ、佛には後うしろを見する尻喰しりくらひ、觀九郎くわんくわんちやうと云ふ悪女わるめ術じゆつ、來かかる向ふへ鐵棒かねぼうの、音もちりりん花川戸の番七が、番七「ホ、コリヤ久しう逢はぬが觀九郎殿、變る事もごんせぬか」觀九郎「イヤモ變る事だらけ、聞いてたも、親仁はながく、中風ちゆうふうの上、去年きよねんの春はるそつくり往生やうじやう、小僧こぞうめは癩かの蟲むしが出てころりとやらかす、日濟ひなの尻しりは七口喰くふ、そこで身代しんたいも賣つて任舞まひ、鼻かは今どぶ店だで、稼かせして置くはい。俺おれも當時たうじは苦くるに苦くるを重ねかさね、部屋へや子こでこそは候まよ」番七「ハ、ハ、此人ここのしはいつも氣きに腐くれのない人だよ」觀九郎「イヤ、まだ氣きを腐くらして

はならぬ、おれが手先で三浦屋へやつた女郎、此頃受出されて残り年が三年ある、此方の取込で構はいで居たが、先はれつきとした奴、此尻を持つて行くと、捨てても三十兩は取る、其證文はコレ此鼻が、懐にある」と咄せば番七、番七「ホ、ソリヤ金になるはいの。ヤ金になる次手に、今日よい咄を聞きました、奥州の何とやら、ヲ、石堂殿とやらの預りの、宸筆とやら、若し持つてゐる者があらば、持參せば、褒美は金子三百兩、下さるとお代官様より云付、何でもこいつを持つて出ると大きな仕合、貴様も廣く歩く人ぢや、随分氣を付けさつしやれ。イヤおりや大家様に頼まれた用がある、ちよつと行て來う。コレ茶屋様、此鐵棒頼みます。觀九郎殿此頃に」觀九郎「ヲ、行くか、其中逢はう」と兩人は、別れてこそは急ぎ行く。にた山道の二三三人、茶屋が床凡に腰かけて、甲人「御亭主何時ぢやの」亭主「アイモウ七つでもござりませう」甲人「ナント善公や、いつそ是から直に吉原へいつて、土手からまつちや呼のぐい上りは如何だらう」乙人「ヨシこいつは日本だ。コレ里遊、手前も行くか」丙人「知れた事さ。カノ柳樽にある、三人で三分なくなる智慧を出しとは、こいつはよく云つた」「コレもう一ぱいくんな」と煎じ茶も、ちやを云ふ通と知られけり。深き咎今より後はよもあらじ。ものぶ「コレ申し、問ひたい事がござり申さ、吉原で名の高い女郎サア何と云ひ申すぞ、知つて居なざるなら教へてくんさいチャア」旅人「ム、

其名の高い女郎と言つては知れぬが、夫は何所の名は何といふ」コナ人は名を知り申せば夫へ行き申す、おら姉サアでござるチャア。それを聞くべいと思つてナ、商人屋で聞けば髮結所へ行けと云うし、夫で聞けば、そりや通に聞けといひ申す。マア其通殿から聞き申すべいと思ひ付き申した」甲「ム、其通とはマアおいらだが」乙「ム、誰だらうな。ハテマア丁子屋で丁山か、雛鶴か、松葉で松の井か、扇屋で花扇か、中近で半夫か」丙「イヤ、今では葛屋の人町か、しほ絹か。斯ういつて聞かせても、長崎やへ阿蘭陀を見物に行つた様なもので、一つもわからぬ、ハテ氣の毒なもの。ア、もう遅くなる。イヤコレ何卒よい手がかり求めて尋ねて行きや。ア、不便や」と夕間暮鐘は上野か淺草を、わさくたいうて皆立つて行く。始終を後に觀九郎が、猫撫聲に傍へ寄り、觀九郎「コリヤわりや姉を尋ねる者さうなが、其姉に逢はせてやる」甲「おのぶ」乙「ヤアそんなら逢はせてくれめすか」觀九郎「テヤチ、逢はせてやるはやるが、コリヤ其汝が尋ねる吉原と云ふ所へ、奉公をせにやならぬぞよ」甲「ハテ、こがいな者でも置き申す人があらば居申すはサ」觀九郎「サ、そこちやて、その奉公するには、大ぶんむづかしい。コリヤ俺を伯父ぢやと云はねば、奉公にも置かず、姉にも逢はれぬ、俺を伯父ぢやと云へよ。チ、合點か」。サアくそんなりや俺が連れて行く、サアあいべ」親方惣六「エ、イヤコレ觀九、マア待つた」觀九郎

「ム、俺を呼んだは誰だ、ヲ、角町の親方、何ぞ用でもござんすか」親方惣六「イヤ外の事ではない、ガ悪い事をするなやい。高のしれた代物、笠の臺の飛ばぬ先、疾とと止にしたがよいぞよ」親九郎「コレ親方、そんな厭味は云ははるな、此娘は俺が姪、他人のかまう事ぢやない。ナア姪よ、コリヤ伯父ぢやぞく」おのぶ「アイをぢサアの世話となり申して、奉公に行き申す、必ずかまうて下さるな」と、譯も頑是も泣顔は、姉に逢ひたいばかりに、苦界の淵に臨むかと、思へばいと惣六も、不便さ餘り傍へ寄り、惣六「コレ親九郎、何かと云ふもめんどしい、此奉公人俺が買はう、サ俺に賣つてくりやれ」親九郎「ヲ、何國へなと賣る代物、直段次第でやりませう」惣六「ム、そんなら年も一ぱいに五十兩、但し不足なか、よもや不足はあるまい。ガ是で物いひあるならば、俺も正體急度糺す」親九郎「ア、コレくくく親方、氣の短い、夫では元直がはづれるけれど、エ、しよ事が無い」と矢立取出し證文を、認める中、おのぶ「コレ伯父サア、あの人に奉公すりや、姉サアに逢はれ申すか」惣六「ヲ、よいく、委細は俺が吞込んだ」と、證文受取り惣六は、おのぶ引連れ立歸る。金いたどいてぞくくと、悦ぶ折から來かよる五町、親九は木蔭へ向ふより、鬨がしさうにハイくくく、飛脚と見えて撥鬢頭、行常つて、飛脚是々物問はう、エ、淺草の浪人者は何所だ」五町ハテ滅相な、淺草の浪人者とはつまらぬ問ひ様。シテ又

其浪人者に何の用で」飛脚「イヤサ其御用と云ふは此状箱、急に渡さねばならぬもの、此中は忝くも、後醍醐天皇様の御宸筆、えらい金になる代物」五町「ナニ、其中な物が金になる」飛脚「チヤサ」五町「ム、どれちよつと見せさつしやれ」飛脚「ア、イヤ、是は大事の物、中々町人風情の見る物でない」と、振撈るのを引たくり、是はと立寄る首筋掴み、ぐつと一しめ七頭八倒、口に手を當て死骸片寄せ、状箱を懐中する間も傍の氣遣ひ、闇がしさうに來る男、男、ヤア五町爰にゐるか、我はくくくくナア、先月限に貸した金、元利共に五十兩、今日の明日のと嘘をつき、ようすつほりとはめたなア。サア今よこすか、サアどうぢや。ム、返事のないはよこさぬ氣ぢやな、どうで只では返すまい、お代官所へ連れて行く。サア今あゆめ」と、引立つる。「マアく待つて」と詫るのも、聞かぬ半へ觀九郎、觀九郎「其金私が貸して進じやう」五町「ム、ついに見た事もない人が、金を貸さうとおつしやるは」觀九郎「サア、何やら急に此場の手詰、そこが相談。知らぬ人に只は貸されぬ、何ぞ質物が見たい」五町「アイヤ質物がある程ならば、此難儀は」觀九郎「ハテ扱、其質物はたつた今、こなさんの懐へ、ア、イヤコレく、驚く事も何にもない。アノナ今の代物預りやしよかい」五町「ホイ、夫なればしよ事がない、まづ當分は貴様に是を預ける」觀九郎「チ、受取つた。ソレ五十兩遣はんせ」五町「エ、忝い。サア金戻す取れ、汝云分あ

る奴なれど、赦してくれる、長居せばはりのめす」と、立蹴にはつたと蹴倒せば、尻をかよへて逆歸る。五町は跡を見送りて、五町「どなたかは存じませぬが、御心入忝い。が、念のため中を改めて」頼九郎「ハテよいはいの、褒美の金は山割、人殺しを云はぬといふ證據は、此方も同類、ム、夫なれば其時まで。シテ此死骸は、奥山の片隅へ、人の知らぬを幸に」「合點々々」と引擔ぎ、繁みをさして急ぎ行く。觀九郎はしたり顔、觀九郎「コリヤ今日の様に晝が付く事はないはい。一寸來ると田舎娘、五十兩の取り、又宸筆の掘出し、是を持つて行けば、三百兩の褒美、コリヤ無盡場で貰うた百、ざらちよほで十貫になつた様な物ぢや、ハ、ハ、ハ。シタガ、其宸筆とやら、どんな物ぢや見た事がない、序手に拜も」と封押切り、開れば中には紙札一枚。觀九郎「ヤコリヤ富の札、しかも一昨日突いたのぢや、扱こそやらかされた。遠くは行かじ」と追うて行く。仕濟したりと立出る五町、付添ひ金貸以前の飛脚、飛脚「五町様首尾は」「シイ、胴欲な觀九郎め、一ばい喰つてよい氣味く」飛脚「ナント五町さん、飛脚の仕打絞殺さるゝ身振、何とあぢをやつたでごんしよが。ヤ是からは元の飴賣萬八」と、傍への荷箱取出せば、男衆「ヲ、おれが金貸の役もちつと響めて下され」五町「巧いものぢやく。イヤ今の觀九郎め、逢うたなら喧しかる、こちらは顔が合はされぬ。どうぞ思案はあるまいか」と、いふ中來かゝる豆藏のどち

やう、三人見るより、三人能い所へどちやう殿、コレわしらが逢うてはわるい者が爰へ来る程に、コレこな様の智慧で、追歸す仕様はないか」どちやう「ハテ智慧と云つては皆無な我々、追返す力は勿論、イヤモ是は御免下さりませ」三人「ア、コレく、力の入る事ぢやない、來ると云ふは女衞の觀九郎、わしらが逢うてはならぬしたら、コレ是非にこなたを頼みます」どちやう「ム、そんならアノ女衞の觀九郎めかへ、ム、彼奴なら騙し様がごんす、大抵悪い奴ぢやない。其罰でな、あいつの所の小僧めが、癩の蟲で死にやした。あいつが事は何もかも、よう知つてゐやす。が少し身拵へ、コレ此飴の片荷を借やす。まだ小道具がいる、ヲ、幸ひく、爰に鐵棒がある。したがおまへ方が爰にござつては、彼奴を騙すに心が置かれる、コレ氣遣ひなさんすな、一盃當てて見ませう。委細はナ、かうく。爰かまはずと、サ、早うく」三人「出來したく」と云捨てて、皆々連立ち急ぎ行く。斯とも知らず尻くらひ、酒も喰つて微酔の、蒲團がりをよろよると、觀九郎「エイ酔つたぞく。エ、いまくしい、どこを尋ねてもるをらぬ、モシそこらには居らぬか」と、見廻す向ふへすつくりと、どちやうは惣身に飴の粉のく、顔もべつたりうどんの粉、袈裟と見せたる糺ぎくの、繻絆も千手觀音の、宿りも痒き古頭巾、錫杖がはりの鐵棒に、寶珠にあらぬほた餅を、紙に包めどつとまれぬ、そも出來合の地藏尊。觀九は愉り、

觀九郎「ヤ汝はコリヤしろんほの宿なしか。早く其所をなくなれ」と、言へば妙なる聲を出し、どぢやう「善哉々々。我は是六ぞろのうけ、さいのかはりの四三菩薩とは我が事なり」觀九「ヤ何だ、四三菩薩々々といふのがあるものか、地藏菩薩と云ふは聞いた」どぢやう「チ、地藏でも四三でも、好きな名を付けて来たがよい。何でも半分まけてやる」觀九「べらほうめ丁半の安目ぢやあるまいし」どぢやう「イ、ヤ丁半とは、怖ろしや、鐵火やうちん阿鼻叫喚、一百三十六地獄、火責の罪を救ひ取り、極樂へ導く我が誓願。因果は廻る車の輪、今は錢の輪金次第、因果地藏と此地に現じ、又は塞の河原にて、十に足らぬ幼子の、中にも汝が助めは、子供にませた徒者、一重二重積む石を、阿責の鬼の鐵棒で、突壞されてアレ地藏様、あの鬼めがと吠えて来る。其外飾賣持遊びを、買ひたいと云ふ度々に、皆おれが賽錢を遣はせる。汝も哀と思へや」と衣の袖も泣地藏、袈裟で涙を拭ひ居る。さしも我強き觀九郎、我子の枷に縛られて、恩愛の涙ほたくく、觀九郎「ア、悲しい咄を聞きました。扱はお前様がアノ、因果地藏様でござりますか。私の所の小僧めが参りまして、きつう御厄介をかけます。承れば、お賽錢まで遣ひますとは、あんまりで勿體ない。ことに四文錢が三百五六ござります、是で何ぞねだります時、買つてやつて下さりませ。エ、大きにお世話様、お茶とでもあがりませ」と、涙に啜る二本棒、一本足らずを差出せば、どぢやう

「チ、よきかなく」。汝が其心正直なる故、去年孔雀長屋にて、此世を去りし汝が親仁も、今は極樂の東門の番人になつてゐるぞよ。汝に是も傳言あり「觀九郎」エ、扱もく、佛は見通と云ふが、色々の事迄御存じでござりますな。シテ親仁殿は、何と申しましたの」どぢやう「チ、よきかなく、今の世は專に後生願ひが多き故、極樂も大入、最早蓮花の上には居られぬ、門番のひきを以て割込でもしてやらん。一刻も早く來いとの勅説「觀九郎」イヤ申し、エ、氣味の悪い、憚りながら親仁にさう仰て下さりませ。よう云て寄越さつしやつたなれど、其様なよい所へ今行くより、地獄でも大事ないから、マア五六百年も、待て下されとお傳へなされて下さりませ。定めて門番してをるなら、小遣も不自由にある。小僧めが事聞た故、どうやら心があぢになつた。イヤ申し爰に南鏡が一片ござります、是をお前様と親仁と、山割になされてなりと、今行かぬ様になさつて下さりませ」どぢやう「チ、よきかなく」觀九郎「ハイく、是はお聞届け有たさうにござります。お前様も大抵の御苦勞ではござりませぬに、其重たさうな錫杖、ア、イヤ申しお前様の錫杖は、どうやら鐵棒のやうでござりまするの」どぢやう「チ、よきかなく。是も則ち因果地藏衆生濟度の暇には、汝が子供や親仁が噂、又方々の亡者の事、觸て歩く其故に、錫杖に引かへて、今では事を觸歩くを、冥途では洒落てな、鐵棒引と云ひやす。ハ、とんだ事よさ」觀九郎「ア

アイヤ申しく、どうやらお前様の聲は聞たやうな、ヲ、夫々若やお前はどちやう」どちやう」ア、イヤ、コレ、ヲ、よきかなく。賽錢變じて鰻と成る、地藏變じて泥鰌と成る、是も則ち因果の道理、最早我も文彌立歸らん、歸る所を見るなよ」觀九郎「ハイ見は致しませぬ」どちやう」見るなく、見ると一所に連行くぞ」觀九郎「ハア、悲しや、何の見ませうぞ」「見るなく、ソリヤ見るはく、見るなく」と足早に、葭簀の蔭へ隠れ入る。觀九郎「ハイく見は致しませぬ。どうぞお連なされぬやうに。モウお歸りなされたか」と、天窓をあけてうつかりと、始めて心は付きながら、狐のぬけたごとくにて、觀九郎「コリヤマア今日はどうか云ふ事だ、ア但し夢か知らぬ迄、夢ではないか、イヤく夢では有るまい。カウト、先爰へ日の有る中に來たは、順禮の田舎娘、騙して賣て、五拾兩懐へ入れたわ。そこで又宸筆の三百兩に成る物と替たわ。又夫が富の空札と替つたわ。追驅て行く、腹が減る、酒や肴を喰つたわ。錢が一本足らずと、南鐐一つ取られた。地藏はなくなる。ム、こいつは夢かしらぬ迄。コリヤなんだ、ム、コリヤ牡丹餅、ハ、ア夢にほた餅、ア、こいつはどうでも夢ぢやわい。ア、イヤく夢ではない事が有る。俺が懐にかの殘年の證文、三十兩になるやつがある、是があれば夢ではない。ド、ヲ、有るく、是があれば夢ではない。しかし、斯ういふ時節なれば、念の爲讀で見たいが、薄闇で讀めればよいが」と、何

を云ふやらやくたいの、内證ないしやう後に聞くどちやう、葎よし實じつの葎よしへ水飴みづあめを、塗ぬつて待まちつのは氣轉きてんの翹あち、觀九郎くわんくわんは證文しやうもん廣ひろげ、薄うす闇くらに透すかし見て、觀九郎くわんくわん「ドレム、お頼たのみ申ます仕切證文しきりしやうもんの事、一つ此こなべと申ます女子、我等實われらじつの娘むすめに紛まぎれ御座ござなく候、此度このたび我等不勝手ふかつてに就つき、右みぎの女子新吉原遊女奉公しんよしはらあそびぢやうごうは申ますに及およばず、道中旅籠屋飯盛下女だうちゆうはたごやめしり、其外端々茶屋酌取奉公等ほかぐちやしやくとりほうごうにも差出さしだし申度候まをさへ共、我等方われらかたに其住口御座すみぐちなく候まをさにつき、貴殿を相頼あいにみ、仕切奉公しきりほうごうに差出さしだし申候所實正まをさに御座候ござ、尤もつと、年季ねんかの儀ぎは、當亥極月あのかきげつより寅とらの極月迄まぎげつまで、中年十五年ななかとし、ム、今年こゝしは子ねの年とし、子丑寅三年うしとらよし、うまいうまい。ア、是これが有あれば夢ゆめではない。何時なんどきでも三十兩は取とると云ふものぢや。ア、忝かたじけない」と、戴いたく所ところをちよいと差さし、行方ゆきがたし知らず證文しやうもんの、紙かみは上あらせ給たまひける。觀九郎くわんくわん「ハ、アこいつはやつぱり夢ぢやわへ」と、いふ間にどちやうは一散いっさんに、跡あとを濁にごして三重急みづぎ行く。

第七

古いにしへの葎よし生あひおし所ところをば、今いまは吉字きちじに書替かきかへ、新吉原しんよしはらの繁昌はんじやうは、外ほかに類たぐひもなまめきし、或あるは貸本かしほん小間物屋こまものや、早こいぞめきは淺黄裏あさぎうら、陣笠股引國侍ぢんがさひきくにぞむらひ、のさく、歩あるく晝狐ひるぎつね、一度もこんと云いひもせず、跡あとふり歸かへりそより行く。所ところに久敷角町ひさしきすみちやうの、大福屋だいふくやの名取なとりの遊女あそびぢやう、洗あらうた髪かみも晝見ひるみせに、素顔すがほの儘まま

の美しく、ござり逢たるかべの峯、一網打ちたくありそ海、人魚の牛簀も斯やらん。新造禿か
寄あうて、甲女、コレしけり殿、竹がへしもモウ仕舞を、此頃は内のおかみ様も江の島とやらへ
お出なんして、跡は旦那さんばかり、私らも何卒よい男の金持たお客に請出され、江の島とや
らへ行たい。しけり殿は何が望ぢや「レリ」アイ、私やなんにも望はないが、何卒大名とやらに成
て見たい」と、いふを聞きゐる小間物や、「コリヤ凄じい望を云出した。して大名に成ば、てまへ
はどうする」レリ「アイ私や大名になるとや、中の町へ芝居を立て」小間物屋ム、中の町へ芝居を
立て、そしてどうする「レリ」アイ、使に行く度々に見んす」小間物屋したり、こいつは有難い。こ
いつは咄に成るぞへ。ノウ本重「本重ヲ、サかう云ふ所が此里ばかり。イヤモシ此中花魁へお
貸申した會我物語の跡、四冊めから持て参りました。是を宮城野様へ上まして下さりませ。又
此間お頼申しました女郎様方の名前、書付て下さりませ、細見を急ぎます」甲女「アイ、書付て置
きんせう。コレ小間物や殿や、下村の白粉を一つ、百助のくこを一員置て行う」乙女「ソレ、
私にも元結紙と鑲槳楊枝、そして此象牙の櫛に、抱澤瀉と抱茗荷、比翼紋に付て、早う出来る様
頼やす。二三日の中に客衆も御ざるから、其間に合ふやうに」と、色に見せたき紋所、精一は
いの眞實なり。小間物屋「アイ、随分急ぎやしよ。シタガ抱茗荷に抱澤瀉とは、ナントどちらも

しつこい望ぢやな」本真「サレバく、抱めうがが男の紋なら、是もサヅうそ鈍な奴である」乙女「アイお世話さ、人の客を悪う云て貰やすまい。しみく好ねへぞよ」本真「アイついぞ好たと云て、一人でも文の取持して貰た事はなし、私も抱めうがでも付けやんしよか」乙女「ア、云もんだ、見なんし宮里様、夫でも色事が有るとさ」本真「チなくて如何しんせう。主達はあだ付きてど、方々の新造様方は自由さ」乙女「コレ、なんぞ面白物が有るなら見せなんせ」「アイ」と風呂敷解きほどき、本真「マヅ女郎さん方には八文字お伽ほうこ小夜嵐、是は糸櫻本町育、こちらは妹春山、春太夫が當た物、モシ是は今年の新版藝者甚孝記、こちらは願撰大通通寶、どれも面白うござります」乙女「そんなら夫を」本真「又何ぞ外に、チ、此封じた本は」乙女「チャ馬鹿らしいやア。一寸と見なんし、あきれもしない」と、大勢がどつと一度に笑ひ本、小間物やはさし覗き、小間物屋「イヤ是斗は無筆にも讀る。テモ大きな物、こちらも凄まじい、書いたわく」。山伏の頭を斧で割た様な物だ」と、悪口云ふも影がさす、君は三夜の三ヶ月さま、甲子巳待庚申、當日念ずる本尊は、十七夜千手觀音。「チ、祭卜様よい所へ」と、早氣の移る女郎氣の、甲女郎「此中の待人はよう當りんした。又一寸と見て下さんせ」と、云へば法印算木取出し、法印「ム、是は離の卦に當る。ム、是は質屋か金貸だの」女郎「アイ所は何所と當て見なんし」法印「ム、所は

東、本所邊」女郎「アイ慥神田土手下とやら云ふ所、そして内から毎日金を貸した所へ、大勢で取に廻るとやら云ひした」と、咄すを側で本屋の重、「コナ法印何をいふ、神田と云へば南の方、毎日取りにあるくとは、夫はかの日なしではないか」法印「ハテ所は南なれど、東と言うたは則日濟の云違ひ、指でも髪でも切代へて、随分不參のない様に、文でせがんで見たならば、物にならう」と辯舌に、「同じく私が客人は、どう云ふ心か見ておくれ」法印「是は久しく便がない。お前の部屋を持つた時、無心の文に返答も、なしも襪も面目なく、來ぬのも道理震爲雷、新造の時に逢た儘」乙女郎「扱も奇妙に當りやした」「サアくおまへ」と又次は、「卜の表も巽爲風、好たが因果乾の卦の、髪物適用に立て、箆筒の中も坎爲水、客衆が有れば喧しく、鬢を搦んで引倒し、乾兌離、踏んだり過言坤、八卦にあらぬもつけ事、終に遣手の耳に入り、二階をとんと風地觀、お前も方々鞍替に、其行先も火山旅の、格子も時に合はぬ客、あふも不思議、逢はぬも不思議伏見町、盡ぬ縁を待つたがよい」と、云はれて「ハア奇妙な祭卜様、コレお初穂」と十二銅、包に餘る見通しと、出せば法印したり顔、法印當る道理此里に、愚僧も久しく年をへし表の袖の綻や、袂に納め立歸る。又打寄て新造禿、「コレ大きなきささ」買って來いんした。サア玉取て遊うぞ」と、餘念他愛もなき折から、奥より走つて出る遣手、遣手「皆様今日は店も

少ない故、世間より早うひけと旦那様の云付、皆二階へお出なんせ。マ夫みせ先で戯するか。しけりも花魁の用が有る、早う行け。お前方も大きななりをして、玉取らうより客衆でも、取る様にしなんせ、名代に出る計が勤でもないわいな」と、一寸云ふのも氣味悪く、商人どもは荷を背負ひ、商人ヲ、玉を取るくと思つた中、遣手衆の目玉を取り、コリヤおそろだんべいきさごだ」と、門へ出づれば女郎ども、サア皆様と夕ぐれの、打連立つて入る後は、又も賑ふ見せ先へ、大小しやんと立派な武士、人目を忍ぶ編笠の、内ぞゆかしき風俗の、後より付添ひ船宿熊、熊「モシ旦那、今中の町の蔦屋の店へ腰掛けて居た深編笠、此大福屋の宮城野様を揚げたいとやら云ふ咄、お前も又宮城野様をお揚げなされたいと仰る故、何かなしに私が、お急ぎぢや程に大福屋へお連申して行く、後から来いと茶屋へは申して参りました。サア早うお揚げなされませ」と、いふ間もあらぬ編笠の、供もよしのや伊平治が、来る道筋も長羽織、蔦屋の男が先に立ち、若衆申し熊さん、お客人をお連申し、後から来いと有る故、参らうと存じました所、又此お方のお出、今日はいせ時平藏は江戸へ出ました故、自由ながらお二人様を懸持「熊」コレ若衆、此お方に宮城野様をお出し申して下され。サア早うく。コレ待た、此熊が連れた旦那、そつちのお馴染ゆゑ、一寸訪れお先へ来たのは、彼の宮城野様を揚げうばかり、後から来た替

りには、名代なりと外をなりと、マア其談合かよかろぞ」と、手前勝手を聞かぬ伊平治、伊平治「イヤコレ能、其方が旦那衆大事なりや、俺とても同じ商賣、お互に茶屋へ落合つて面倒なら、座敷を替へて遊ぶ事もあれど、ハテ客衆は知らぬ同士、殊に御馴染と云ふではなし、コリヤ此方へ大夫様を貰をかい」熊「ム、遣るまいと云ふたら何とする」伊平治「ハテ一度も買はしやつた事ではなし、又此方の客衆は、此間咄にも聞たである。鶉の羽黒右衛門様と云ふ大盡様、初會から事によると請出さうと云ふも自由」熊「イヤ是伊平治、吉原ばかりは金の味噌は上られぬぞ、此方の客衆が請出したら、其時は何とする」伊平治「ハテそれぢやによつて今揚げるは」熊「イヤならぬ」と、互に云へば云ひ返し、藍けんほうのうすあられ、小紋も凡ら揉合の、出合頭に牽頭の五町、五町「テ、譯はいはずと皆聞いたが、コレ二人ともに旦那衆が大事故尤もなれど、俺もお二人様は知つてゐる、所を今我ら呑込で、宮城野様にお目にかゝり、主の心でどちらへでも、馴染に成つた其上では、是非お一人は出物が出来る、浪風なしに納る思案を」甲武士「テ、其思案は某が了簡。ナニ五町、宮城野は身どもは揚まい、彼方の合方にお取持申せ」熊「イヤそれでは此熊が」甲武士「ハテ立つ、たとぬは馴染になつた上の事、其様に急に及ばぬ」と、言ふに鶉の羽は笑壺に入り、黒右「是はく、どなたかは存せぬが、温順しい仰やり様、一寸お近付に成り申したい」

甲武士「イカニモ左様仕らん」と、互に編笠脱ぎ捨て、秋夜「お名は聞き及ぶ黒右衛門殿、拙者事は鞠ヶ瀬秋夜、以後はお心易く」黒右「イヤ御丁寧なる御挨拶。シテ宮城野を私方へ揚げさせ、其元様にはどれへお出」秋夜「イヤ拙者儀も申さば瘦浪人、中々其元様のやうに、請出すなどと申す事は罷りならねど、もし今日は貴殿に揚げさせ、又明日にも拙者が参り、互に買論などと大人氣ない事も致さんかと、憚りながら思召も恥しく、それ故お近付にも成り申した。兎角遊びは一人ではさえぬ、ナント御一座申しても苦しからずば推参申さうかな」黒右「イヤサ強て求め様と拙者は申さねど、此船宿が申した故、却てお氣の毒に存まする。先貴殿宮城野を揚げてお遊びなされ」と、義理もどうやら惜さうな、顔を五町が、五町「何さく、あの様に仰る秋夜様、一念の残らぬ其證據打寛いで騒ぎませう。爰は店先サアママあれへ。コレ若衆、マアお連申さつしやい」女郎「アイ蔦屋の若衆一寸爰へ。今日は此方の内は店も少い故、早う引きましたが、外はまだ引けませぬ、晝の分も」五町「コレやひを云ふな、皆五町が呑込だ。コレ熊、伊平治、手前達も其様に白眼あうてる事はないわい。旦那衆さへ御合點なら、立つと云ふ物ぢや。何も角も俺に呉れ。サア是二人ともにわつさりと、一つ打て」しやんく「祝うて三度しやんくのと濟んだ此場の立引、呑込む鶉の羽黒右衛門、一物ありや鞠ヶ瀬が、衣紋流の人品に打連内にぞ入にける。早

書店も入相に、花蘆巻いて片寄せて、簾下せば開く障子、勝手はとつかは膳盡し、美を盡したる妓女達が、皆様お出でと夕まよの、用足す禿大根漬、一寸向ふへ一口の、茄子も色の榮耀喰、二階座敷は身拵へ、新造禿がてんぐくに、運ぶ櫛箱鏡臺に、其佛を映しては、花の姿を宮城野とて、本原の萩の露おもみ、觸らば落ちん愛敬は、里に名高き情知り、人のながめも細見に、山形のな氣散は、紋日もよそに宮里が、宮里「モシ花魁へ、先に本屋の重様が、此中お借なんした、曾我物語、其跡ぢやと云うて置いて置んしたぞへ。イヤホンニ宮柴様、今日の客人は中の町の蔦屋から二人一座、お前にも早う身拵へして、お出なんせと遣手衆が申しんした」宮柴「チ、急しない、今身拵へして行んす。したが知つた顔でも有るかや」宮里「イ、エ、どれもく侍衆さ、一人はよいが外に獨は穢くろしい髭の、目の大きな花魁の客衆だと、吉野屋の兄様が云ひなんした、モいやな客人でござんす」と、悪く云ふのも譽るのも、にべなき新造の後生衆。宮城野「コレく又そんな事云うて、遣手衆に叱られようぞへ。お前方はマア座敷へ往きなんせ」宮里「イエく、お前と一所にまゐりんす。座敷では牽頭持の五町さんが、いつものお道化、眞に可笑ありんすにへ」宮柴「チ、可笑次手に宮里様、昨日旦那様の連てお出なんした奉公人、をかしい物云ひぢやないかいなア」宮里「サアイナア、遠い國から來たと云うて、中居衆が詞を慰めば、姉を尋ねて來た者

だ、姉あねを知らせて呉くんなされと云つては泣なんす。モシ花魁おいらんへ、今一寸呼よんで来てお聞かせ申しんしよ。サア宮柴みやしば様御ごさんせ」と、打連うちづれ下へ立つて行く。宮城野みやぎのは打笑うちわらひ、宮城野みやぎのほんにあの衆しゆとした事が、ひよかすかと苦勞くらうのない、よい氣きぜんでは有るわいの。コレしけりや、此手拭てぬぐも搾しぼつて干して半插はんさう 櫛くし子へ出しや」「アイ」と禿かぶろがまめやかに、袂たもとを帯おびへかいしよけに、取片とりかた付つける其所へ、新造しんぞう二人が作そうて、「サアくこちへ」と座敷ざしきの内、おのぶはついに見なれぬ簞笥たんす、錦にしきの夜具よぐに三ツ蒲團みづせん、赤らむ顔かほの緋縮緬ひぢりめん、うろく見廻みまわし。ものぶ、コレ女郎めづらサア達、人の寐ねをべつてゐる所を、用ようサアあるから早く来いと、二階にかいサアぶち上あて、コリヤマア何たる所だツテヤア。どこもかも光り申ひかて、お洒落しやらくの櫛くしサア、見る様に塗ぬりてべエた簞笥たんすサア、其上そのかみに夜よの物もコリヤ金切かねきたア、モしやア蒲團みづせんも蘇枋染すほうぞめの色いろのよさ、私わたしらア臥ねつたら踵かかとの舐あかがりサア引懸ひっかつて、うつ切れ申ますべし。おやつかな魂消たまけ申ますく」と云ひければ、皆々みな可笑おかしさ押隠おしかくし、新造しんぞうコレ其子そのこや、てまへが年は幾歳いくつに成り、國くには何所どこでどうして來た。夫おつとを咄はなして聞きかしていなう」「チ、私わたしら國くにサア奥州おくしゆ、父ちちや母ははに別わかれて一人、江戸サアはあらく盛さかる所だアと聞きき、其その姉あねサア吉原きちげんで名の高い女郎めづらサアに成なつてゐるさるとの咄はなし。童子わらしの身みとして敵てきない思おもひをして、尋たずねてくるも海山うみやま物語ものがたりの有ある事ことをふたア」新造

「モシヤ、コハ馬鹿ばからしい。ヤ何なんだかねつかから知しれんせんよ。其上そのかみに吉原きちげんで名の高い女郎めづら衆しゆが姉あねさ

んとは、マ滅相な尋ねもの」のぶ「サアそれだアから頼み申すは。昨日観音サアで、目まなこの怖い人が連れて行て、逢せてやらうと駕サアに乗て來申す所を、爰の御亭の世話に成り申して昨夜から居申す。脚かけ申すも他生の縁。ほんに赤はらはたれ申さぬチャア」新造「ちよつと見なんしチャアこ言ひすはイナ。ホ、ホ、。そして赤はらはたれぬとは、マむさい咄ぢやないかいな」と皆皆轉て打笑ふ、中に宮城野、宮城「コレ皆様、少い子を其様に笑はぬもの、誰も目見の其時は、恥かしい事ばかり、今あの子の云つた、だよアがアまと云ふのはナ、父様母様と云ふ事、赤はらをたれぬとは、嘘をつかぬといふ事ぢやわいなア」新造「扱もがおれ其譯を、お前如何して知つて居なんすへ」宮城野「サアそれはの、チ、毎度私が所へ旅人の客衆がお出なんしたから、それでよう覺えて居るわいな。イヤ客衆で思ひ出した、奥の客衆も待兼である、私も今行く程にな、お前方皆様連れてよい様に。コレしけりも中の町の井筒屋へいて、孫治様に昨日の返事は來たか聞いて來や。此子は私が用がある。皆様早う」と姉女郎の、詞に面々立上り、「ほんに勤と云ふ物は、何國の人にも逢ねばならぬ、宮城野様のお咄で、此子の咄が解りんした。私らとても外ではない、だだアやがアまの爲に賣れて、此勤をするからは、客衆と寢そべる度事に、赤はらたれて氣に入つて。小遣ひ貰を」と口々に、奥座敷へと急ぎ行く。跡打詠め宮城野は、おのぶが傍へ差寄つて、

宮城野「コレ其子や、さつきにからの咄には、姉を尋て此里へ来たと言やるが、マア其方の國は奥州で、何と云ふ所ぢやぞいの」ものぶ「ヲ、私らは奥州白坂の在、逆井村といふ所」と、聞くにはじめて宮城野が、胸にぎつくり、傍を見廻し、宮城野「ムウそんなら其方のとよ様の名は、與茂作様と言やせぬか」ものぶそれを知召すそれ様は、姉サアでござるか」と、飛立ちながら、ものぶ「イヤくくく、母の常に云はしやるには、姉サアの方にも印が有る、それを互に合せた上、心ざしも打明ろと云召した、印があらば早う見せて呉んされなう」宮城野「ヲ、常々大事にかけて置く、その證據見せうぞや」と、立つもいそぐそくくに、箆笥の上に硯箱、夏書の帳に書かけの文も心は通ふ神、淺草寺の觀音の、扉表具にお備も、上は鼠が引出しを、開けて中より取出す、守袋を見るよりも、こなたも首にかけまくも、思ふ壺井の御守、「コレくくく、國を出る時母様が、大事にせいと下さんした、ア、河内の國壺井とやらの御守。ヲ、とよ様は桶家の御浪人、扱はそなたが妹で有つたか」ものぶ「姉サアでござるか」ものぶ「ヲ、嬉しや」と縋り付き、外に詞も泣くばかり。折ふし亭主惣六が、奥座敷へ宮城野が、出ぬはいかにと座敷の口、覗けば内に泣入る二人、仔細あらんと暖簾の蔭、身を潜めてぞ伺ひる。背撫さすり宮城野は、顔つれぐくと打守り、「ヲ、妹よう尋て來てたもつたなう。年はの行ぬ其方、よもや一人來はしや

るまい、とよ様かかよ様が付てお出なさつたか、もし道ではぐれでもしやつたか、サちやつと云うて聞しやいの」と、言へば妹はしやくり上げ、はつと計りになき沈む。官城野「コレ〜、斯う廻逢ふ上は、悲しい事は何にもない。泣ては濟ぬ、さ何とぢやいの」と、問はれて妹はなほ涙、ものぶ「コレエ父は五月田植の時、代官の志賀臺七と云ふ悪でよな侍に、切られてお死にやり申したわいの」官城野「ヤア〜、そりやまあどうして〜」問うもうろく「狂氣の如く、ものぶ「アコレ〜、其様におもしやると、胸先が突張申して、一つも口へ出申さぬ、マダ悲しい事がござるチャア〜。私もすんでに殺さるよ所、庄屋の伯父御が駈付て、かんで見ても何のまあ、正銘證據が御座ないから、きつと敵と云ふ事もならず、父は犬死。語るも長い事なれど、そんなの云號の御亭にも尋逢ひ、此江戸サアへ歸り申した、跡は私と母ばかり、便ない身に下地の大病、重り〜てがアまは六月の十六日、悲しや終に死しやり申たハイナウ」官城野「ヤア」ものぶ「チヲ悲しいは道理でござるチャア〜。跡に残るわし獨、何條にも彼條にも仕様はなく、庄屋の伯父御が引取て、福島町へ出はつて、奉公しろと云ひ申す。何の奉公所かい、口惜いと悔しいでござ腹はやめ申す。それからそこを駈落して、それ様がなつかしさ、坂東順禮すると云うたら、お寺で笈摺拵へてくれ、段々尋ねてくる道筋、慈悲せごんの有る人は、飯喰せたり手の内くれ、背

戸の木部屋に留て貰ひ、又は邪見の人の家、軒下に寝そべつても、邪魔な餓鬼子とてへんさ打れ、なづきのするをこたへく、ほんにてきない思ひをして、尋ねて昨日淺草の、お観音の引合せと、守に入れし戒名の道引で、廻逢うたも血筋の縁。コレ便になつてくれもしや」と、歎に交る國詞、涙になまりはなかりけり。宮城野始終聞く中にも、悲さつらさ身も世もあられず、急ぎ來る涙押し下けて、宮城野コレ妹、定し常々母様のお咄にも聞きやらうが、慥其方が五つの年、父様は水牢とやらのお咄め、其御難義を救はん爲、母様と談合の上、八年以前に此身を賣て人手に渡り、遙々爰に流の身。ア、思へばく世の中に、わし程因果な者はない、遠國隔て此里へ、來たは丁ど十二の年、とよ様やかよ様のお顔も覺えて居るけれど、外に兄弟とともなう、そなた一人を便ぞと、案じぬ日とては、ないわいなう。客衆を送る後朝に、東雲つぐる鳥鳴き、悪いとどうやら氣に懸り、お二人ともに御無事なか、妹はまめで大きうなり、お傍にゐるが浦山しや、つらい苦界の其中に、傍輩衆の母様が訪ひ音信の度々に、悲い咄聞せたり。又仕合のよい時は、嬉しさうな顔をして、モウ何年で年が明け、内へ去んだら誰様と、女夫となつて如何してと、身仕舞部屋の咄をば、聞く程胸に一ぱいの、涙は落ちて白粉の、融て化粧で隠くせども、向ふ鐘に偽の、なきて苦界の、我身の上、巡る紋日も松の内、桃の節句に菖蒲蒼く、軒の燈籠二度の月、菊の節句や

俄の時、仲の町に出て居ても、若父様に似た人のありと思へば心付け、又は莊廓の勤には、田舎ぞめきの見物が、覗く店先格子先、見るのも若や父様が、尋ねて逢にござんしても、それぞと知れる種にもと、思うて暮せばあじやらにも浮氣心は夢にさへ、結びし帯の解もせず、云號ある此身に、つらいせつない、エ、恥かしい、悲い勤も親の爲、何卒早う身儘に成り、父様や母様と、一所に暮して如何してと、そればかりを樂に、月日を數へ指を折り、待ち暮したる甲斐もなう、思ひがけない父様は人手にかよつて果ない御最期、又其上に母様にも長い別れに成つたとは、マどうした薄い親子の縁、親を大事にする者は天道様の恵みがあると、云ふのも嘘ぢや偽りぢや、頼みをかけし稻荷様觀音様も聞えませぬ」と、愚癡に差込む癩癩も涙に洗ふ如くにて、身も浮くばかり泣きければ妹も共に正體なく、あのぶ「コレく姉サア、便と思ふ其方が其様に泣かしやつて、俺は何と成る物ぞ、よいしやんしてくれもしや」と、すがり歎けば、宮城野「テ、いとしやなう、海山越えて遙々と尋ね逢うたる此姉は、あるに甲斐なき勤の身、そのみならず此わしを尋ねんばかりにそなた迄、又此里へ身を賣るとは、何の因果か情なや」と、兄弟手に手を取りかはし、あやも歎の有様は、秋の最中の月星に、雨雲かよりし如くにて、涙の時雨ぞ哀なり。歎きの内に宮城野は、氣を取直し泣く目を拂ひ、宮城野「コレ妹最前其方の咄の中、云號の夫も江戸へとやら、

其お人の名所は「あのぶ」イヤ名も所も知り申さぬ」宮城野「シテ敵臺七とやらの顔は」あのぶ「ア、よ
う覺えてる申す。目まなこの大きい鼻の平たい男サ」宮城野「モウ宜い云やんな壁に耳、父様は武
士の果」あのぶ「スリヤ其方や俺も侍の種だから一時も早う敵が討たうござるわいの」宮城野「ヲ、よ
う云やつた、でかしやつた、コレ親の敵は俱に天を戴かぬとやら、幸ひ奥の一大座、騷の紛れ此
里を、缺落するより外はない、何角の事は一時も早う立退田甫の方、私についてサア來や」と
抱へ引縮身繕ひ、立出んとする所へ、惣六「宮城野何處へ」と主惣六、宮城野「エ旦那様何時の間に」
と恟りは、隠せど聲に知られけり。惣六「イヤおれはたつた今、恟りせいでもよい事を。コレ宮
城野、マ下に居や、そなたはアノ敵、エ、イヤサ堅き約束した男がある故に、廓を缺落、ハテ
さうであらうく、悪いぞやく。又其子は其方知つてゐるか」宮城野「アイ、イ、エ、アノ先き
に新造衆が昨日から來たと云うて、連れて來てぢやによつて、あまり不便さ」惣六「それで呼でお
きやるか、是も尤も、サア二人ともに用が有る、ちよつとマ、爰へ」と、云はれて何と詮力
も、流石ちひさき女の魂、「旦那様赦して下さんせ」と突懸る刃物搔潜り、側に有りあふ鏡臺の、
鏡おつ取り打落し、惣六「コリヤ早まるな急所でない程に、心を急すとマ、、俺が云ふ事を、サ
ア熟くりと聞きやいなう。コレ兄弟、エ、アイヤサ是は鏡臺、鏡に映る二人が顔、似たりや

似にりや杜若花菖蒲、其五月雨の暗き夜に、敵を討つたは曾我兄弟、ハ、ハアコリヤ假名本の
曾我物語、第四の巻、幸ひ俺が讀で聞かそ。光陰惜むべし時人を待たざる理り、隙行く駒、繫がぬ
月日重つて、一萬は十三歳になりけり。身の不肖なるに付けても、又公方を憚る事なれば竊に
元服して、繼父の苗字を取り曾我十郎祐成と名乗けり。コリヤ十郎元服の事、又此末箱王は母
の教に箱根へ登せしを下參して、北條殿と云う烏帽子親を取り、曾我の五郎時宗と名乗り、マ
かう云うてはあぢいな所へ曾我物語、一つも合點は行くまいが、よう推量して見や。河津殿の
種でさへ親の無い身はあれ是と、繼親の、イヤ烏帽子親のと頼む、サ其中の憂艱難、モ我一存
では可かぬぞや。其方が若爰を缺落して、敵、ヤサ其堅き男を尋ねてもいはゞ女の身の上、しつ
かりとした北條殿と云ふ様な後立がなければ、中々思ひは晴されぬ。其中には悪い魔がさして、
むざ／＼月日を送る事も有る物ぢや。ハテ曾我殿原でさへ、大磯化粧坂の傾城に心を奪はれ色
色の貧苦、ハテコリヤモ芝居でもようする事ぢや。又譬此廓を逃げ果せてからが、遠國生れの
其方が事、當分先の的も無う、うろ／＼するのを内外の者が見付け、イヤ／＼どこそこに居ます
ると云うを聞いて、打捨つて置くとは主の身ではどうも云はれぬ。ハテ其方ばかりが親に孝行で
はない、勤をする者に親に孝行でない者は一人もないわい。それぢやによつてあれもかう

かうぢや、是も孝行ぢやと其儘で置けば、おれも女郎屋をやめねばならぬ、コリヤ浮世の身過世過。又面々の内の駈が女郎買に行くに聞けば、ヤイ爰な癡愚者めが、勘當するぞと呵り付け、人の子の道樂者が來ると、爲に成る客人者ぞ、随分と大事にしやと女郎どもにも云ひ付ける。マ此様な得手勝手な商賣はして居れど、慈悲と情と云ふ事は心に不斷忘れはせぬ。不思議に昨日淺草で、廻り逢うた奥州者、姉を尋ねるばかりに此身を賣るとの志、直に女衞に金渡し、連れて來たのもそなたの身の上、國に妹が有るとの事、若やと思うた甲斐有つて、二人寄つて最前から、何やら咄す、扱こそと煙草吞ながら、隣の部屋で聞いてるれば、切ない哀な咄を聞き、悲しうて涙が溢れ、手に持てる煙管の雁首上りを打忘れ、火皿で口を火傷したわいなう。元より浮氣な事もなく、勤大事にして呉れた其方の事、何の悪う思ふぞ。まして何にも知らぬ女的身、今突かけた此刺小刀、俺にさへ打落さるゝ位で如何して、相手は武士ぢやないか、若歸り討ち、サ内へ歸つても手前が恥になる。それぢやによつて云號の夫が北條殿と云ふ様な後立になる人が出來た時は、ハテ惣六は男ぢや、證文の金高は表向無代でもやるわい、必ず儕を笑はさぬ様にしてくれよ。モ芝居の積物や俄の世話もせぬ法も有る、眞實誓文陸ではない。五つや三つの頃よりも曾我兄弟は心懸け、十八年の苦勞辛苦。それ程には待すとも、アレ天道の恵があらば、

今にでもよい幸が有る物ぢや。コレ身の上大事に時節を待ちや」と、曾我に比へて兄弟に道を教へる通り者、宮城野は猶しやくり上げ、宮城野常からお氣質知ながら親の別れに氣も亂れ、手向ひ致した私を、憎いとも仰しやれず、却つてお慈悲の御詞、有難しとも忝なしとも冥加の程が恐しい」と妹もともに手を合せ、只伏拜む嬉し泣き、惣六「ア、コレくくく其禮に及ばぬわい、モ聞分けてさへ呉れば、俺も嬉しいく」と、義理を立貫く男の惣六、隠せど袖に隠されぬ、胸に餘し哀には、通も不通も涙なり。奥座敷より遣手のまさ、まさ「サア申し宮城野さん、先きにから客人もお待兼ね、コリヤ誰だと思や旦那様、ヤ新參の在郷そこに居すと下へ行きや」惣六「アイヤあれが事も宮城野に、内でなと遣つて貰をと、それを今頼みに來た。コレ宮城野、随分今の事を、ナ合點がいたか」まさ「ヲ、それなればよい。サアく、早う來や」宮城野「アイ一寸と顔を直して」惣六「ヲ、イヤ素顔でも随分美しい」と、譽るも眞眞、賣物に花も實も有る亭主が詞、アイと返事も泡沫の、淀む隙なく行く水の、流は絶えぬ勤の身、妹を爰に奥座敷、引別れてぞ、三重新造伊平治「狐を釣らう、狐を浮かせ、狐を釣らう」五町「取つて見せうぞ」新造伊平治「狐を釣らうく、サアく、釣たぞく、サ、五町呑々」五町「南無三、化かすく」と思つたら、ツイ釣られた。ヤ釣れたで思ひ出した、此宮城野様は遅い事、モシ新造様方へ、早う呼び申してお出なんし」

新造「アイノ、モウ今來なんす、それ其處へ」と、いふ間もなく、古の歌に讀みしも哀なり、宮城が原の旅寝かな片敷く袖に鶉なく、涙隠して、宮城野ヲ、五町様、皆様ようお出で」と座に直る。五町「イヤようお出でなんした所が、先きからお前をまつの大木様、サテ旦那、此大入盃で一つお始め」黒右衛門「イヤ先あなたから」秋夜「イヤ、此秋夜より其元様が、カノ宮城野殿をお待兼ね、初對面の盃」伊平治「ヤア是はきつい通り者、此伊平治が仲人で、御祝言の盃は、是三々九度の黒右衛門はサアおあがりなされませ。サテ花魁、是は私がお取持、ドレ、お酌致しませう」宮城野「ヲ、伊平治様、つぎなんすな拜みんすにへ」伊平治「何、拜みんす、ヤをがみんすの谷渡り、向ふへ渡つて秋夜様、此盃はあなたから、一つあがつて誰様へでも、宮里様にかへ。よしよし、先是でお盃もすみ町の親方の所なれば、女郎様方の御器量も日本一の君」新造「コレたんとは云はれぬぞ、モシあのおかめの面は、此頃方々に懸けてござりますが、何の爲でござります」宮城野「アノお徳女の面の事かへ、あれを懸けて置くと仕合が能いとの事、それでかけて置きなんすわいなア」新造「ア、仕合とは有難いナウ五町、是も狂言の筋に成りさうな物かい」五町「成るともく、此頃揚屋町のせうか様が付けた通人舞、新造様方彈ておくれ。今爰で神降し、末社と云ふも我々が名、牽頭といふも一つにて、コレ此面を斯う被り、あれにまします新

造の上著を暫かりに著て、既に拍子を初めけり。歌通人舞を見さいな、大通人の客撰には、いつも廊へ通ふ神、文の文魚も走り出で、男の喜十立ぬいて、もの雄跡の鯉藤さい、よいきせきではないかいな、首尾を占ふ六川の龜も八龜と文洲に、來之有ればさい先も、よしやなりよし振も吉原、漁長十橋森羅牧十、渭州左達に秀民眉月照さふ里の夕映、祇爾秀でて菊も香ばし、阿能待美や江戸の幸、墨河安穩千局萬川、歌の嘯掬も勇ましや。帮間末社のかみも賑はし、只今奏づる舞樂清く、袖をひたして面白や、大通舞を見さいな。宮城野新造「やんやくくきつい物だく」五町「イヤこじ付けのあてぶりどう御ざりますか」秋夜「イヤ面白事の有つた、それ一つ呑め」五町「マアコリヤ山吹色有難いく」と、いふに鶉の羽も負けぬ顔、小判取出し扇の上、黒右「ソレ伊平治、皆の者にとらせいく」伊平治「ハイく、サアく、時ならぬ惣花ぢやく、皆々寄つて戴けて有る、秋夜様コリヤ何と云ふ事で御ざります」秋夜「ム、みさむらひ、御笠とまをせ宮城野の、木の下露は雨にまされり、コリヤ唐崎と書いて有る」宮城野「そんならお前は唐崎様のお客様かへ、夫なれば彼方へお知らせ申しんしよ、定めて主が今宵は悪うござんすによつて、夫で私を名代の心かへ、しみぐお有難うござんすにへ」黒右「是はく迷惑千萬、此扇はちと譯有る事」

宮城野「サア其譯の有るお方へ」黒右「イヤサ身共が國元の下役唐崎松兵衛といふ者、宮城野の萩見物の折柄、彼奴手自慢で此扇、書て呉た古歌、又今日逢うたそもじの名も宮城野とは、誠に是も結ぶの縁」宮城野「イエ〜初にお目にかよつて、かう申すもどうやら何とか思ひなんしよが、結ぶの縁の門違ひさ」是は迷惑、執心で參たに違ひは御さない、何のそもじにあかはらはたれ申さぬ」と、急ばついで出る國詞、新進モシ花魁へ、爰にも赤はらがいひんす、主も奥州者だな」と云はれて鶉の羽が胸り眞面目、黒右「イヤ〜身共は京ちや、京生れぢや、夫ぢやさかいで方奉公して、奥州にも少し居た事も有れどチャ、夫はずつと久しい事だ。今は西國の大家に奉公する、江戸は始めて、生れは京ちや、京の六條數珠屋町夫でサ、酒を呑とつとやくたいぢやわいなう、無茶ぢやわいの」と、訛散らした京詞、宮城野は黒右衛門が奥州詞に心付き、妹を呼で見せたさに、宮城野「コレ五町様、昨日來た十二三の子、奥州者とやら、モ可笑い物言ひ、一寸爰へ呼んしよ」五町「是は面白うござりましよ、サアしけり殿呼んで〜」黒右「ア、是々なんの在郷娘、呼んだとて酒呑相手には成るまいし。夫よりはおいねかおなほを呼びにやれ」と、何か心に黒右衛門、恠に當つた此場の時宜。五町「モシ宮城野様あなたの詞を承るに、上もかみ最上でがなござりましよ、唐崎様は女郎の名ではなし、松兵衛様とやらの事、松は唐崎ナア、霞は外

山、のふさとなとさよいよへ「伊平治」サア〜此奴が當ぶりで當をつて、又こじ付をるわいイヤ
申し旦那、口説の種の此扇、私がお貰ひ申しましょ。ヤお供の衆も嘸御退屈、いつそ川岸へでも
お連申しましよか」黒右「夫もよからうぢや、早く行つて迎ひは七つ半に來さつしやいぢや」
伊平治「ハイ〜そんなら花魁皆様。コレ五町、熊やそこを頼む」と提燈のぶら〜歩き出て行
く。熊は手酌で大盃。熊「サア五町、さらば貴公へあけ屋町」五町「ヲットいたゞき笠盛稻荷」
宮城野「ヲ、二人ながら大きな盃でぬし達はホンニアマすつてん童子を見る様でおさんすにへ」
五町「アイ私やすつてん童子だ」熊「ヲ、俺もすつてん童子だ」五町熊「アすつてん童子〜」。エ
ハ、ハ、ハ、いかに戯と騒ぎ飲。秋夜「イヤ何、五町黒右衛門殿も最お淋なされたからう。マ、ハ、ハ、
先二階へ」五町「左様でございます。イヤ申し花魁、黒様を必ず尿で殺すまいぞ」黒右「殺すとは
諸侍を」五町「ハテ可愛がつたりがられたり、氣も魂もハ、ハ、ハ、ぬける故、殺とは通の詞でござ
ります。お侍でもお公家でも、名を取らうより床を取れ、サアママあれへお出なされませ、秋
夜様と私は、奥へするいきのぐい呑と出かけませう。皆様奥へ入らせられませう」五町「すつて
ん童子〜」騒ぎにつれてぞ入りにけり。提燈提けて伊平治が、内を覗いて、伊平治「ア、
黒様に逢ひたい物ぢやが、ドレマア座敷へ行て、アイ〜夫では人目が有る大事の御狀如何して

お目にかけてうぞ」と、云ふを後に立聞く熊、持つたる状箱搔摺む。伊平次「コリヤ何ひろぐ」と拂ひ退け、「此伊平治が持てゐる物、ちよつかいをさつかけて、イヤどうするのだ」熊「ハ、ハ、如何するとは知れた事、何か密事の其状箱、中を一寸見たいから」伊平治「イヤならぬわ、鶴の羽様のお馴染から、内證の手管の文、持て来るのは船宿の役、外の者に頼みはせぬ、封目急度通ふ神、山之神には引裂かれても、いつかな見せぬ色紙をば、鼻つ紙の分際で、見様とぬかすと、土手下の紙洗橋へ叩込で、還魂紙の涙を溢させるぞよ」熊「ハア、面白い、花のお江戸町廣い中、此熊が目通りで、時の京町と黙つて居れば無上に味噌を揚屋町、モウ角町にして置れない、伏見町の節々を、砕いても取にや置ない、野郎め、水道尻を打叩かれて、謝りんしたと云ふなよ」伊平治「アノ汝が」熊「われが」と互に詰寄り軋合ひ、尻引からけ身繕ひ、奥は騒ぎの三味線の、拍子に紛ると二人争ひ、後に伺ふ黒右衛門、作足きいたる伊平治が、急所をすかさず眞の當、うんと計にたぢろく熊、得たりかしこへ隠るゝ伊平治、何國迄もと大野屋は、跡を慕うて追て行く。黒右「伊平治様子は見届けた」伊平治「スリヤアノ最前より何も角も御存か、先刻御國元より御狀到來、何角の様子は存せねど、中は密書と承はる、夫を嗅付け熊めが狼藉、必ず拙者にお心置なく、御披見あれ」と差出す、状箱の紐解きほどき、封押切て繰返しく、讀度々に悔りびくり、傍

見廻し懐中の、矢立取出しさらくと、手早に返事書認め、黒右「使は萬屋に待てをるか某直に逢うて「伊平」イヤ〜爰を只今お歸りあらば、何か譯の有る様で、却つて惡うござりましょ。何か知ねど其御状は私が持つて」黒右「イカニモ〜心きいたる汝が有様、云付ける事も有る。先返事をちつとも早く「畏つたと急ぎ行く。跡打詠め黒右衛門、狀繰返して、黒右「何々、先達つて貴殿手に懸られし、逆井村の百姓與茂作娘、八年以前江戸へ参り、只今にては吉原にて宮城野と申す由、又々妹も當地を立退き、定めて是も江戸へと存じ、必ず油斷有間敷、急使早々申遣し以上、唐崎松兵衛。スリヤあの宮城野が、ム、宥からの座敷の體、稍ともすれば心を付る詞の端々、昨日來た奥州者、慰みに呼んで見ろ〜と云たは是も確に妹め、モウ此家に長居はコリヤならぬエ。イヤ〜高が女郎さいたつた二人、人知れず打放し、枕を高く寝るがよい、夫と刀の目釘を濕し忍入らんと伺ひ居る。あなたの座敷に密々聲、何事やらんと立聞けば、五郎そなたは親々の云號、某は谷五郎、今の名は金江勘兵衛「宮城野」そんなら云號の夫で有たか。何かも妹に聞やんした。親の敵の志賀臺七、今日爰へ來たこそ幸、咄太刀して敵を討せて下さんせ」五郎いふにや及ぶ。我爲にも舅の敵、某も奥州にて、彼を討漏したるが残念、小指の先にも足ぬ奴、氣遣仕やるな今の間に「宮城野」ハ、ア忝うござんす」と、互の咄を聞居る臺七、

谷五郎とはコリヤ堪らぬ、如何して爰へと胸震ひ、差足拔足表の方、こそくくくと逃て行く。時分はよしと吉野屋が、縁先の釣燈籠、小石拾うて打付ける、音に秋夜は奥より出で、秋夜「伊平治首尾は「伊平治」まんまと仕果せ此狀箱」秋夜「シイ、兼て常悅殿と某が大望の企て、鎌倉中の井の中へ毒を流し、皆殺しにせん工、其第一の毒藥秘法、忍び松明軍慮の一卷、楠原普傳が志賀臺七へ傳授せし所、然るに彼當地へ登りしと聞き、何卒近寄せ奪取らんとすれど、面體知らぬ其上に、本名を隠し此里へ入込、是幸と此秋夜も、遊所の出合に心付け、疾より一味徒黨の面々、形を替へて付纏ひしに、黒右衛門と云ふは臺七と、しかと本名知れざる折から「伊平治」ハア、夫故に宮城野兄弟が咄を立聞き、又松兵衛が書し扇、最前拙者が貰受け、是を贗て内通の手紙を拵へ、本名を明せし上は、謀を以て一卷を奪取り、其上常悅殿の頼みの通りの、宮城野に敵を討せ」秋夜「ヤレ音高し有竹作平、贗筆の達人ホ、でかされた」はつと計に此方より、隠せし一腰脇挟み、傍へ心次の間より、宮城野は身づくろひ、表をさして駈出す。秋夜「コリヤマアくくく待つた、氣色を變へて何國へ行く」宮城野「どこへ行くとは知れた事、親の敵の志賀臺七、追駈て本望を」秋夜「ヤア討してよければ某が討してやる、敵討は今はさせられぬ」宮城野「ム、そりや又何故でござんすへ」秋夜「サレバサ、今敵を討せては某共が大望の、イヤサ爰は廓、夫故に只今

も謀を以て此場は見返し返したわい「伊平造、ム、スリヤ物影にて承はりし、谷五郎殿も宮城野殿は御存じないか」宮城野「ナニ谷五郎様とは、ドレ何處に」五町「チ、其谷五郎も宮城野も、是に居りまする」宮城野「ヤアお前は牽頭の五町さん、そんならお前も」五町「驚きは尤も形を糞し入込み、昨日も浅草にて、道ならぬ金の騙事も軍用金集めん爲、我本名は坪内多島」秋夜「チ、聲色に眞似の名人、適々」五町「ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、」ひつそいゐる。秋夜「ヤコレ氣遣有な宮城野、常悅殿の頼み故、此廓を聞合せ、大福屋の宮城野は奥州生れと聞し故、某揚けて身の上を問落し、力にならんと來りしに、今日黒右衛門との出合、是も尋ねる志賀臺七、先彼が祕書を奪取らぬ其内は、敵討はマアならぬ、則常悅にも知らせやりし上は、兄弟が身の上も自由にならん」と、詞の中に大野や熊、息を切て駈來り、熊「秋夜様是に、最前作平が鬮筆、邪智深き臺七必ず油斷は致すまじと、兩人疾より申合せ、互に争ふ狂言の楯、直に常悅様の御宿所へ參り則ち用金三百兩、跡金明日持參の上、宮城野殿は身受け致さん、金子は是にござります」秋夜「ホ、常悅殿の宿所迄行戻り二里餘り、半時かよらぬ其内に韋駄天走り聞及ぶ、日に三十里行く道の達者」ホ、熊川三平出かされたりくと、響る詞に作平多島は、作平多島「臺七此場を逃歸りし上は、如何致し候はん」秋夜「イヤ此場を遁れ逃去りしは、只敵討の用心ばかり、先づ宮城野が手附三百兩、亭主へ渡し、

跡金は明日迄と申されよ」惣六「宮城野の身受の金、是へお渡し下さりませう」秋夜「何其元は御亭主か、宮城野が身の代は六百兩とな、則ち手附三百兩、ソレ御亭主へ渡し召され」多鳥「ハツ」ト答へてならべる包、何心なく立寄る惣六、油断を見濟し切込む多鳥、身をかはして鏢元確乎、惣六「コリヤ何するのだ、ハ、アコリヤ又五町が、茶番狂言の稽古か、眞劍ではヤ危い」と、突退る間も兩人が、一度に抜て切りかくる。「エイ」とさそくに蹴上る疊、我身の盾に飛鳥の早業。秋夜「ヤレ手の内見えた過あるな旁先づ引かれよ」多鳥作平「ハ、ア」秋夜「ム、扱々驚き入つたる御働、隠しても隠されぬ新田家の浪人、島田三郎兵衛殿と疾々より知つたり、何卒南朝の御味方と成り、我々が大望の片腕とも成り給はらば、常悦も祝著致さん。偏にく、お頼み申す」惣六「イヤ大望と仰やりまするは、コリヤ夜具でも拵へるか、新造でもお出しなされますか、爰は廓諸人の入込み、洩るも安し何を仰やるも皆酒の咎、私は亭主、客衆の事は存じませぬ。又本名とやら假名とやらを明すも時節が御ざりましよ、何にも聞かぬといふ證據は、コレ誓紙の文言、宮城野そこで讀で見やく、」宮城野「ヤアコリヤ私が年季證文ぢやござんせんかへ」と、いふに駈出る妹のおのふ。惣六は引捉へ、惣六「小媚の良い故詞付も直したいと思ひの外、此不器用では直るまい、内に置いても高が腰元、宮城野が受出された錢に付けてやる、随分目を懸け遣

つてやりやれさ」宮城野「ハ、ア有難いお志、お禮は詞に盡されませぬ」と、伏拜みくく兄弟悦ぶ
有様に、秋夜「何妹迄も添られては此方も痛み入る、せめては残りの三包を」惣六「イヤモシ其三つ
は捨鐘の、モウ九つの鐘も鳴る、コレ宮城野夜更けぬ中に早う行きやソレ」宮城野「コリヤ大門の切
手エ、忝い」惣六「ハテ禮には及ばぬ、アレ引四つのアノ拍子木」

第八

我家に、千尋の影を榎の木蔭、牛込邊にゆつたりと、浪人ながら貯へに、餘る風雅の茶心や、
手前も清き宇治の常悅、心置なき友どちと、つれづれ晴す夜咄の、用意をかねて妾のおせつ、身
の願ひさへ世を忍ぶと、おのぶが名をも改めて、竹刀、鑢、仕合の稽古、懸聲いとど柔くも、流石
手垂の閨の友、傍に並るる女子ども、皆それづくにかよへだすき、片唾口紅粉吞込んで、脇目も振
ぬおせつが受太刀、付入る信夫が八重垣くづし。出来たく信夫殿、破軍の太刀を四
寸に拂ふ利方の工夫、心懸が見えました」と、云はれてはつとよしばむ信夫、女ども口々に、
おなよ「テモ扱もく器用なお子、モシさう氣轉が利過ぎては、追付け男持たしやんして、お寢間
の口舌に殿御をば、天井裏へ彈きあけ、腰拔させて拜ますは、ア、今の間の事である、ナウおす

け殿「あすり」ヲ、おなよの云いやる通り、此方こちとも男おとこに尻餅しりもちを、ほつたりこく搗つかす秘術ひじゆつを問ふ心掛こころかけ、もちつと情なさけに入いて置おこ」と才曲さいまぐれば、あせつ「ア、コリヤけうこつな物の云い様人聞やうひききも宜よろうない重ねかさて急度きつた嗜ため」と、行儀ぎやうぎも家の躰しつげ方かた、信夫しんぶは氣きの毒取どくとりりなして、言い々ごおせつ様さまのお詞ことば、皆みな惡わるう聞きかしゃんすな。それに付ついて姫御前ひめごぜの嗜たみに成なる稽古けいこのお相手あひて、毎日まいにち々々ご習なうても、心こばかりの不器用者ぶきようもの、必かならずす笑わらうて下くださんすなへ、追付おつけ日の暮くれお客きやくのお出いでに程ほども有あるまい、次つぎへく」にてんばども、あんけり烏明うそめいた口くち「ア利口りこうなお子こや」を汐引しほひに、皆みな々々ご勝手かつてへ入いる跡あとに、かよへ解とき捨すて襷たすきを外はずし、あせつ「ヲ、信夫殿しんぶ、敵志賀臺かたさ七等しちとうは、常悅殿じやうえつとは近ちかしい中なか、鶉うの羽は黒右衛門殿くろゑもんと云いふ事こと、そもじも姉御あねごも知しつての上うへ、敵討かたうちを急いそぐとの思おもひためは尤なほもながら、鞠まヶ瀬せ様さまとの密事みつじの企くはだて、それに付ついて黒右衛門殿くろゑもん、親したするも一術ひとじゆつと、常悅じやうえつ様の奥深おくふかい御思案ごしあん、女めの私わしが問まれもせず去さりながら、兎角武藝うかくぶげいが肝心かんじん關門かんもん、抑おさへて置おく敵かたなれば、今討いまうちとも儘ままなれど、稽古けいこが足たらねばまさかの時に、遅おそれと成なると吳々くねくの御詞ごことば、それ故ゆゑ心こ躰たみの爲ため、私わしが稽古けいこに準ならへて、そもじの稽古けいこ、こなたは嘸さかかしもどかしう思おもはつしやらう」信夫しんぶ「アイ私わしもさうは思おもうても、放はなれてゐる姉様あねさまと、一つにならねば討うたれぬ敵かた、御二人様ごににさまのお情なさけで受出うてされてござんしてから、一度文ひとたびの便べんも聞きかず、お爺様おやさまとおお嬢様おぢやうさまとも、便たよりに思おもふは姉様あねさまお一人ひとり、此様このやうに音信おんしんのないのは、若煩もしわづらうても

居やしやんすか、又とよ様やかゝ様のやうに、ひよつとした事でも有るか、案じて暮す私が心、思ひ遣て下さりませ」と、咄す中にも憂き涙、「チ、道理ぢや〜、道理」と背撫で、身につまさるゝ露雫。落日の紅ういと照そふ微醉機嫌、常悦は閑居の障子、吉見勝右衛門に開かせて、腎打かける脇息褥。常悦「ヤ、ナント勝右、今讀だ六書の中、柔能く強を制するとは、御身よくサ此語を會得有つたか」勝右「ハアコレハ〜、先生の存寄らぬ御尋、成程其語は孫子が、鶏陽山に入つて、賊軍を防がせるに、女兵を以て打勝たる、例を引いて注せしとは」常悦「ア、イヤサ〜、其女兵たるといへども、一致に心固まらねば、泰山に打つ卵にも劣る道理、季氏が野外に虎を射たる弓も矢も、鐵石ならねど心の羽ぶくら巖に立つ、何も案じる事はない。今鎌倉中に名を知られた宇治の常悦、受合た敵討、討さいで濟むものかと、サ酔紛れにむだ云うは、勝右御免」とそらせし咄、こなたにおせつが、あせつ「アレ今のを聞いてか、こつちへ聞くと主のお詞、アノ一言を頼にして、何にも案じる事はない、ヤ、モ、モ、必々急ぬがよいぞへ」と、諫めに嬉し悲さを、信夫が便杖ぞとも、柱時計の音冴えて、火や點さんと告げ渡る。常悦「チ、秋の日足の心なう、今日も暮たか。ソレ今宵は鞠が瀬、稀人を同道と云越された心待、ソレおせつ、放れ座敷の床懸物、花も生たか、釜も懸たか」「アイ〜〜」あひの襖ごし信夫を連れて勝手口、入る

さの秋の風防ぐ、障子吉見が建切る折から、次の間よりも咳拂ひ、鞠が瀬秋夜入り來れば、あるじ常悦吉見諸共、夫ぞと出づる入魂の挨拶、そこく座も定まり、常悦コレハく秋夜殿、在鎌倉の諸侯達へ、日々に出入の際なき某、いつぞはお招き申し入れ、お咄と存じをつた。ヤモ折に幸、兼て密事の用談も、續く積鬱晴し申さう。イヤまづ奥へ」と變せば、それは身どもも同じ事、劍術指南の弟子衆は、皆歴々の大身故、平外の雑談も差扣へ、鬱散を心懸しに、今宵の招きは別して樂、秋の夜長の物語、久く絶しナソレ御秘藏の御調でも承はらう」「誠にそれよ、琴三味線の連引に、幸の相手を同道、ソレ松田氏おきのを是へ」早くくの聲の下、彌多七連て宮城野が、今は目立ぬ袖頭巾、地味な小袖も愛くろしく、切戸開いて、宮城野ヲ、辛氣。御玄關に待して置いて、いつの間此お座敷へ」秋夜ヲ、サ、二月ばかり程経ながら、まだ字治殿へは連立ぬ宮城野」常悦ム、スリヤ稀人とはおきのが事か、ヲ、よくぞく、サアくこちへ」に、「アイク」と、いんす詞もどこへやら、町と廓とをなひ混の、かよへ解くも艶めかし。常悦も片頬に笑ひ、常悦ヲ、今は廓の勤も引いて、秋夜殿の世話に成り、藝道修行と噂に聞いて、イヤモ何より重疊さりながら、今宵は分て其方にも、ちと遠慮有る密々咄、能く御存の鞠ヶ瀬殿、同道せられしには様子が有らう」イヤ其義は此彌多七が、参りがけにも申し居つたが、それに構

はず同道なされた秋夜様の底意は」と、云ふを打消し、秋夜「ハテコレく松田殿、ソリヤ身どもが胸に有る。何は格別常悦老、兼ておきのが頼み居つた、時節は今と存じの外、黒右衛門は鞠が瀬の浪宅を出奔したと様子を聞き、こなたの思案も此おきのへ聞かせ度く、同道したはそれゆゑ」と、云へどもとかうの答へもなく、常悦は傍の碁盤、吉見に云ひ付け引き寄せさせ、外へ散せし園碁の他事、常悦「何と秋夜様、先日勝て勝据ゑた返報がへし、敵討の氣はないか、サア一勝負」と碁筒の蓋、取れどもとれぬ宮城野が、心に心おく石の、秋夜も探る胸の端、かけて四番と膝すり寄せ、秋夜「一勝負とはおもしろし、まづは先手」と打つ石の、定石ならぬ常悦が、手まへの角に扣へる黒石、しかける鞠が瀬遠巻がかり。宮城野は目も放さず、願ひの辻占つけの櫓、引いて見るのも心のねたば、松田吉見も密事の甲乙、是なんめりと差視く、秋夜が思をはねかける、宇治が「物粘ける雁行。常悦「イヤ征とお出でか」秋夜「してうとは、へ、、、事をかしい、尻もむすばぬ兩手がけ、是では黒が」常悦「ア、遁れる手段、そこをしきつて追詰める」秋夜「ヤコレ此白、石ナ此白石の敵討」常悦「ム、敵討々々、今一打を此席で、のぼすが上々上分別」宮城野「ソレ黒石が隅の手に續かうとするはいなア。ドレく黒石は水の色、北朝に渡らせぬはこびが見たいなア」吉見「ヤ小賢い黒石殿、どう逃げたうても此白石、ム、持か劫かと此吉見も」

宮城野「そこを一目かう上げては、秋夜様必油斷をして下さすなへ」秋夜「チット合點油斷はせぬぞ」常悅「イヤまだ早いく、油斷がよいぞ」秋夜「何早からう斯う追詰、ハア油斷せぬか」宮城野「油斷せぬとはお氣短か、それナア向ふを切るはいな」と、我を忘れて急立つ宮城野。常悅「ハテ差出過た黙れ。女に習うて秋夜殿が相濟うか、不躰千萬、扣へて居よ。サア秋夜殿、お手はこなた、早くく」秋夜「ア、手前かなア、てまへがお手は女に習ふく、女々々々、テ、女でも岡目八目助言に付くが當世」と、渡らせぬ目算違ひに流石の常悅、常悅「イヤ秋夜殿、其お手御無用、折角助ける黒石を」秋夜「テ、打詰た白石が智、此間の敵討、念なう本望遂けたり」と、聞いて一間に伺ふ信夫、宮城野諸共氣もいそく。常悅は氣色を變へ、常悅「ヤア差向ひの甲乙を、詞の助太刀受るさへ、大人氣ない鞠が瀬殿、女を頼みに打つ碁なら、常悅が相手に足らぬ、無禮至極」とねめ付くれば、秋夜「ハ、ソリヤ貴公が大人氣ない、尤も碁に打入るときんば、人事を忘れ禮義を缺く事、前九年の頼時なんど、まよある例といひながら、それは格別、コリヤコレ高が女、ア、嗜み召され」とやり込むれば、氣の毒さうに宮城野が、宮城野「ほんに私とした事が、座席もろくに辨へぬ、不調法は廓の癖、お赦しなされて下さりませ」常悅「ハテ扱喧しい、下れ。育賤い流の女、常悅に近寄て無禮の助言、嗜め」と、碁笥おつ取つて打たんず能圖へ、おせ

つが駈出で、縋つて止むる一座のしらけ。秋夜は手を組み此場の様子、何を知つてと振切る常
悦おもせつ「イヤ申し左様でござりませぬ、様子はあれから聞いて居りました、常々のお心こころばへに、
似合ぬ御短氣ごたんき、皆様みなさまの思召おぼしめしも氣の毒さ、殊更ことさら此子は鞠が瀬様、お世話に遊ばす今の身の上、云
はど當座たうざのお氣慰きなぐさみ、碁にお負遊まけばしたが、恥辱ちじやくに成るといふではなし、御機嫌ごきげん直して下さり
ませ」と、詫る詞わづに宮城野が、「私が足らはぬ心から、お師匠様ししやうさまともお主しうとも、力に思ふお二人
様、お見捨みすてあつて是がまあ、何と望のぞみが叶ひませう。コレ申し秋夜様、お詫申し下さりませ
く。コレ申し彌多七様、お詫申て下さりませ。コリヤマア何と致いたませう。コレ申し常悦様、
堪忍かんにんして下さりませ」と、願ひある身の木の下こもぎに、漏る涙なみだのあやもなき。常悦は立てたる燈火あかり、傍
なる碁盤を片手煽あふり、闇と消ゆれば驚く面々めんめん。秋夜横手よこてをはたと打ち、秋夜「ハ、ア及ばぬく。
天に翼つばさし地に跨またる貴殿あなたが所存しよせん、察入さつしゆつたは秋夜一人、端近はしちかで些細ささの論、云散いひちらする拙つたなしく。
奥へ推參すゐさん仕う」常悦「ナニサく、常悦が火を消したは宮城野が阿婆摺あはづれの、所作しよさ柄がら見るも餘り氣
の毒、暗闇くらやみの強異見こほいけん、香かやは隠かくると我工夫わがくふう、色をも香をも、ア、秋夜殿の早呑込はやのみこみ、深入ふかいりばしし
給たまひそ」と、故由わけ籠こもり句くの詞ことばのにべ、心おせつも宮城野も、思案しあん取々とりとり。常悦重かさねて、「秋夜殿
イザ一問ひとまへ、皆も一所いっしょに。コリヤ宮城野、必今の強異見こほいけん、跡あとに残つて忘れぬ様、篤たくと心をナウ鞠

が瀬殿」秋夜誠にそれが肝心要。常悅老の志、イヤサ譬へ心に忘れても、汲やしつらん旅人の、高野の奥の玉川の水く、ナ合點がいたか」と底意をば、残す詞の露の夜や、暮に數ある鞠か瀬が、屈せず疊む胸の内、すどしき宇治の常悅おせつ、松田吉見も諸共に、心を兼て入りにけり。跡宮城野が物思ひ、色なる浪の月代や、定に萩の穂に出づる、影さへ遅き願の一圖。宮城野「廓で皆のお咄し有つた、常悅様のお情とは、どうやらそぐはぬ今の仕讀。合點の行かぬお心を、汲みやしつらん旅人の、高野の奥の玉川の水とかけたるお詞の、謎かは知らねど解けやらぬ、様子ありそな仰り様、ハテどうかな」と、とつ置いつ、軒端信夫が奥よりも、そろく臙月影に、「姉様爰にごさんすか」宮城野「ヤアさう云やるは妹ぢやないか」信夫「アイ」宮城野「チ、息才で嬉しやく。逢ひたかつた」と取繕る、便り涙の姉妹が、思ひに窺るゝ哀さは、血筋の縊や糾るらん。信夫は涙の目を拭ひ、信去申し姉様、此東で名に知れた、常悅様にお頼み申すは、佛神の御引合と、お前の云うて下さんした、詞にいと頼もしく、お世話になる内おせつ様のお情迄、残る方なき稽古の修行、奥州者と知れぬ様と、詞付までお世話に成り、恩に恩有る常悅様。されども本望達するは、急くな早いと止てばかり、其上先刻の碁の腹立、私や立聞して居りました。頼み切つた常悅様、あのやうに仰つては心置れる姉様」と、膝に凭れて嘆ち泣く。宮城野「チ、さ

う思やるは道理ぢやが、浪人ながら大名高家に、もてはやさるゝ常悅様、かよわひ其方や此私に、頼まれさつしやる氣は金鐵。ガよもやとは思へども、目指す敵の黒右衛門、麴が谷を出奔して、行方知れぬと聞けば聞く程、云はど古主の惣六様の、志も立たぬと云へ、便々と待つては居られぬ、工夫思案も互に女、果敢ない所存と此世の夫谷五郎様、未來の父様母様の、草葉の蔭よりお阿が、思ひやられて悲や」と、手に手を取つて又さめく。昔の下行く木々の露、涙の隙に懐より、位牌取り出し庭の面、手向は父の恩に知る、須彌山形の手水鉢、上にとりく、沖津海、舟の位牌を立並べ、ともに敬ひ手を合せ、宮城野、棲霞了養信士、俗名は父様の與茂作様、丁度今宵が御命日、南無阿彌陀佛く。それから程なうお果なされたお母様、殘霧妙養信女様、おまへの手引で遙々爰まで、尋ね迷ふ父の敵、陰身に添うて、お守りなされて下さりませ」と、姉諸共に向合の合掌、傳ふ事に水晶の、數珠線かけし桂陰、「御養育の御恩も送らず、程遠い此地へ来て、隔てて居れば二親の、お過ぎなされた月日さへ、七日々の弔ひも、知らで過した不孝の不孝、重きが上の憂き勤、鏡に向ひ融く紅も、思へば血の池、氷の地獄、罪のありたけ仕盡した、今更せめてと付狙ふ、敵に廻り逢せてたべ。さは去りながら女の身の、二人より外便のない、わたしらを娘に持ち、極樂世界へ成佛とも、拜まれ給はぬ未來の闇、嗚かし迷うてござら

うと、悲しいはいのく、妹「口惜しい姉様」と、位牌の前に身を打伏し、涙にすだく蟲の音に、いと秋さへ更けぬらん。宮城野やうく泣く目を拂ひ、宮城野「コレ妹、そなたを世話の常悅様、わしとても受出され、武藝を教へ貰うたる、恩義の深い秋夜様、譬お心背いても、黒右衛門さへ討果せりや、お二人の世話甲斐は有ると云ふもの。爰を拔出し黒右衛門、何所に居るとも尋出し、討たうとは思やらぬか」信夫「ヲ、さうでござんすとも、黒右衛門が居る所、火の中水の底にもせよ、顔は見知つて居りまする、探し出して討ちませう」宮城野「ヲ、出かしやつた、サアおぢや」と、互に帯締め裾打合せ、件の位牌を守りと肌、用意の懐劍一文字に、駈け出すあとより、「待てく女云ふ事有り」と聲かけしは、宮城野「座敷に誰も人は居ぬが、庭傳ひに來はせぬか」と、月に透せど定かに知れず、ハテ何所からと盤桓、「イヤ爰から」と庭先の、井戸の中より水にも濡れず、ぬつほり鶉の羽黒右衛門、段平大小長月代、錆たる井桁書かに踏越え、のさのさ上る縁の上、續いて兄弟かひくしく、面々懐劍拔連れて、左右に圍へばちろりと見て、黒右「ヲ、出かすく。此黒右衛門を汝らが敵、志賀臺七と知つたか知らぬか、腰押して討たせてやらうと、常悅秋夜が隠まうた宮城野信夫、親の敵の此臺七、討つて本意が遂けたからうなア」宮城野「ヲ、云ふにや及ぶ、思込んだ父様の敵臺七、ヤそなたを討いで置かうか」黒右「ヲ道理々々、

其健氣なる汝達が所存を感じ、敵討の勝負して、討れて呉れうと云ひたいが、マアならぬ」
宮城野「イヤ、なつてもならないでも、此場を遁して済むものか」「ヲ、済む、コリヤ済む譯を云
つて聞かさうか。元來常悅秋夜ともに、思ひ立つた大望有る故、此黒右衛門を密々に頼んでナ、
アレあの空井戸より叶ふ山の寶藏へ拔道掘らせ、大望の用に立てる金銀を取入れさせは、なれ
ども、人の聞えを憚り、麴が谷を出奔させたも、ナコリヤ、皆常悅と相談つく、汝らが怖うて逃
たでない。斯うした密事を頼まれる黒右衛門、いもけの様な者、一疋や五六疋殺したとて何の事、
また其上に楠原普傳が家に傳へし一國殺しといふ毒藥、忍び松明の秘授秘傳、普傳が死後に知
つた者は、日本に某一人」宮城野「ム、スリヤ、其秘方こなたが知つて、常悅様に傳へるのか」黒右「マ
ちよつと小口がこんな物、まだ此胸に大海を呑み干す器量、兼備た黒右衛門、汝らが敵といふ
ソ、其頬筋、歪まぬ中に取置け」と飽迄惡口憎しとは、思へど恩有る常悅が、望についてる
る人と、聞いては刀の手も弛み、宮城野「ム、スリヤ先の詞の端々、未傳授も受け給はず、高野の
奥の玉川の、水によそへし毒藥の、秘方を知つたアノ臺七、お二人望みの叶ふ迄、コレなう妹、
此敵は討れぬはいの」「姉様コリヤマア何と」「如何せう」と、積る恨を姉妹が、恩義に迫るはら
はら涙、落ち瀧津瀬の吹越て、懸樋も月に照添へり。黒右衛門顔さし覗き、黒右「ちつとさうも

あるまいなア。イヤ又廊くろわで見た時ときより、格別かくべつちが違ちがうた其泣顔きなきがら、生地あらは顯あらして美うつくしい。コリヤ宮城野、
 とても義理ある常悅じょうえつが、爲ためにならぬ敵討かたきうち、さらりさつと止やめにして、黒右衛門くろゑもんが心に従したがひ、應おこ
 と云つて抱だかれて寢ねい」と、いとど憎體にくてい應答おうたもせず、無念じねん々々くを堪こたへる二人ふたり。黒右くろゑ「ハテ其様にひ
 こしやくせずと、サア身みが可愛かほくば返事へんじしや、どうぢやく」と支さへる信夫しのぶ、引退ひきのけ突退つくだけ宮城
 野みやぎのに、ほうど抱だか付つく欲惡煩惱よくあくばんなう。宮城野みやぎの「エ、こよな大惡人おほあくにんの鬼おによ蛇へびよ、そもやそも現在げんざいの」黒右くろゑ「チ
 ャト敵たかは知しれて有ある、粹すいに育そだつた様やうにもない、ね給たまへ」と、肌はだに手てを入れ傍はうじやく若無人わくぶじん、又取また
 絶たがる妹いもうとを蹴け飛とし、黒右くろゑ「ハテ氣きの通とほらぬ、見ぬ顔かほせい」と、うきを宮城野みやぎのふり放はなす、手に當あたつたる
 以い前ぜんの位牌ゐはい、引出ひきだして、黒右くろゑ「コリヤ何なにぢや、棲せい霞か了りょう養信士やうしんじ、俗名ぞくな與茂作よもさく、ム、コリヤ身みが手に
 懸かたわいらが親おやの位牌ゐはいぢやな」と兩人取付とりつを拂はらひ退のけ、黒右くろゑ「サア宮城野みやぎの、應おこと云いうて
 爰こゝで寢ねるか、厭いやと云いへば此位牌こゝゐはい、踏割ふみわつて退のけるぞよ。エ、否いやか應おこか、否いやなら親おやを踏ふみ碎くだかうか、
 サアくくくく何なにと」と付廻つけまされ、不便ふびんや宮城野みやぎの泣音なぐねさへ、聲こゑを信夫しのぶがおろく顔かほ、いつそ
 詞ことばも出ででばこそ、顔見合かほみあして齒はをくひ締しめ、口惜くちみ涙なみだ堰せきあへず。黒右くろゑ「エ、めろく」としぶとい性しやう
 根ね、目覺めざまししせん」と位牌打付ゐはいうちけ、踏付ふみつけく粉微塵こなみじん、「コレく待まちつて」も聞きかばこそ、位牌ゐはいと共とも
 に縁ゆかりより蹴落けおし、黒右くろゑ「コリヤ女郎めらうどもよう聞きけよ、敵かたきなんぞと身みが傍そばへ寄よりあがれば、此位牌こゝゐはい

がよい手本、骨も皮も粉に成つて、ぱつぱと散るが大事ないか、命が物種止しにせい」と、不敵の仕業にせき上げく、宮城野「コレ妹、モウくく、義理も情も恩も實義も、思はれぬ様に成つた。一度ならずお位牌迄、二度の敵の志賀臺七、覺悟しや」と立上がる。秋夜「ヤア兩人暫し疎忽すな、齷相せまい」と後の襖、引開けく鞠が瀬秋夜、おせつもろとも小四方に、一通取戴せ黒右衛門が、右と左に差置いて、秋夜「貴殿を敵と附狙ふ二人の女、刀を指す役目なれば、頼むに引かず隠まへども、向後彼らに加擔せず、足下に引引まじき神文」もせつ「アイ、秋夜様と御一所に、常悦も同じ血判、お渡し申せと妾を名代、サア御披見あれ」と兩人が、詞に彌鼻高く、黒右「ム、ハ、ハ、ハ、ハテ御丁寧な神文、まづ何かは差置いて、へ、見るにや及ばぬ。ソリヤ其筈、叶ふ山へ拔道掘り開け、軍用に手岡へさせぬ、是一つさへ貴様方の守り神も同前、其上に一國殺しの毒藥、忍び松明の傳授迄、覺えぬいた某、貴殿を始め常悦殿へも云はつしやれ、ソレ足も向けて寐さつしやつたら、眞赤な罰が當るぞや」と、上見ぬ驚のはねかけ顔、せきのほす氣を宮城野信夫、静めくして手をつかへ、宮城野「是迄段々お世話に成り、親の敵志賀臺七、討てばお望みはぬとは、知らぬ願ひも詮ない事、お情の御恩報じ、私らをお手に懸られ、未來の父へ云譯させて下さりませ、コレ申し秋夜様、おせつ様、お情お慈悲に殺して」と、命惜まぬ姉妹打伏し歎くに取

まぜて、癩しやくの痛いたか宮城野みやぎのが、苦しむ體ていに妹いもうとが、心細こほそくも介抱かいほうの、氣扱きあつひこそいちらしよ。おせつは心思こころひやり、おせつ「いとしやなう、親おやの敵かたきを討うたうくと、東あづまのはてから鎌倉かまくらへ、難行なんぎやう苦行くぎやうも厭いとはずに、けふが日迄ひまで私わしらへ氣兼きかみ、武士ぶしの詞ことばに討うたさうと、請合まがひひながら此神文このしんぶん、サ、此神文このしんぶんを書かく上かみは、彼忍かのしのぶび松明たいまつの祕傳ひでん、一國殺いつこくころしの毒どくの祕法ひほう、サお傳つたへなされて下くだされまいか」とおせつもともに餘儀あまのりなき頼たのみ、黒右衛門くろゑもん大口おほくちあき、黒右くろゑ「ハ、、、ア貴様あなた達は豪傑ごうけつ々々、ヤ非道ひでみちい物ぢや、如何いかにも祕方ひほうは是々と、残のこらず身みどもに云いはせて置いて、煎せんじ殻がらをアノ女郎めらうどもに、ウ、ハ、ハ、、、」と、嘲笑あざわらふ。秋夜あきよ「ハテ扱あそれは氣まはの廻まはり、斯程かほごお頼たのみ申ますのも、明朝あけむせ六むには御身上ごみづかみ相極あひまり、御目見ごめみ有ありと常悅老じょうえつらう、御懇意ごこんいの密談みつだん故ゆゑ、是非ぜひに今宵こんよひと傳授でんじゆを急いそぐも時節じせつ柄がら、押推おしするにはちと御短慮ごたんりよ」黒右くろゑ「ア、イヤ短氣たんきにござる、拙者おぼ大きな短氣たんき者ものさ」秋夜あきよ「ソレ其お腹立はらだちを偏ひこへにお直なしなされまして」黒右くろゑ「チ、直なしたくばアノ宮城野みやぎの、口説くさ落おしておこさつしやるか」秋夜あきよ「サアそれは」黒右くろゑ「成なるまい、否いやなら斯かうぢや」と宮城野みやぎの目がけ、きらりと手裏劍しゅりけんすかさぬ信夫しんぶ、露路ろぢけ下駄取たつてしつかと受け、信夫しんぶ「コリヤ姉様あねさまを何なんとする」と、詰寄つめよす擬勢ぎせいにおせつが片唾かたづ、秋夜見あきよみとれて、秋夜あきよ「ア天晴あつはれ々々、ハテ教おしへたり覺おぼえたり」と、あたりさはらぬ詞ことばの褒美ほうび。黒右くろゑ「ヤきつい響なめ様やうナア。コリヤ小あまめ、くすねられぢやならぬ、其小柄こづか是こへ持もて」信夫しんぶ「アイ」黒右くろゑ「早

う持て」信長「アイ」「早う」と大人氣なく、小柄に事寄せ差出す手先、取らんず氣色に宮城野が、
笄かぎばつしり黒右衛門、腕うでに當つて拂ふ間に、遁のがれる信夫悦ぶ秋夜、おせつは早業教はやわざをぢへ方、心で
響ひびるも、互の目遣めづかひ、膨ふくれ返つて黒右衛門、黒右くろみぎどいつもこいつも、能い氣味さうな眼付、見
度くないぞ、黒右衛門が云ひかより、宮城野口説くさくが厭いやならば、毒藥松明傳授どくやくたいめいでんじゆする事も厭いやぢや。
常悦じやうえつが世話に成り、身上しんしやう片付望かたづきのぞみにない。ヲ、氣に喰くはぬ、いつそ大望鎌倉かまくらへ、注進ちゆうじんするも出
世せの種たね、何と動きはとれまい」と、身をかへり見ぬひろ八町、一足飛の横渡いっそくとびし、傍そばからあぶあ
ぶ矢橋船やばしね、志賀しがの浦浪吹うらなみふきこして、擡かぢ取り兼ぬる高搖たかねすり。秋夜は日頃ひごろの短氣たんきの蟲けし、堪こらへぬ氣性きせうに
寄よるぞと見えしが、蹴落けおされたる黒右衛門、庭へどつさり眞逆まごさか様。是はとおせつも兄弟おとうも、驚おどろ
く中に黒右衛門、はふく起立ち、黒くろヤイ鞠まりが瀬、重々ぢゆうぢゆう恩有る黒右衛門、脚あしにかけた罰當ばちあたり、
目に物見せん」と寄るがんづか、縁先えんさきへ引摺寄ひきずりよせ、「人非人めが動くまい、師匠ししやうの惡事の腰押こしおしし
て、欲よくに耽ひけり色に迷まよひ、立場たちばもない身の上を哀あはれ、麴かうぢが谷やつの浪宅らうたくまで、お世話有つた大恩たいおんの常
悅殿じやうえつ、剩あまへ出入でいりする大身おほみへ、お目見めみまで云ひ次つぎいだ義理ぎりも思はず、拔道ねけりちほ掘つたを恩おんにかけ、宮
城野を口説くさかねば大望たいまうを注進ちゆうじんとは、身の程知らぬ自滅じめつの惡言、モウ毒藥どくやくの傳授でんじゆも入らぬ、うぬが
ないとして此方こなたども、奇術マジックにことを缺かくべきか。コリヤく兄弟おとう赦ゆるしてくれる、今こそ敵かたき尋常じんじやうに、

討てよ勝負」と突放せば、今更何と宮城野も、信夫もともに、「私ら故、御大望の妨げに、成ると聞
 いてはそもやそも」ちせつ「イエ〜大事御さんせぬ、今の様な悪口聞いて、女の身でさへ悔しい
 に、秋夜様のお腹立、更々無理とは思ひませぬ。構はず勝負」とおせつが諫め。猶逆立て黒右衛門、
 黒右「云ふまい〜、あいつらが荷膽せず、身共に弓を引くまいと、兩人が其神文、反古にして武
 士が立つか」秋夜「ヲ、此神文こそ我々が、大望に代へ力と成り、其方を討たせ呉う」と、宮城野
 信夫へ遣す血判、「最前見ぬが汝が不覺」と、おせつ諸共押開けば、狼狽へ眼に見て悔り、黒右「エ
 エ謀れたか残念々々。此上は破れかぶれ、鎌倉へ注進して、追付吠顔、待つてをれ」と、駈出す
 後に宮城野信夫、懐劔抜く手も見せばこそ、伺ひ寄つて雙方より、かばと別られ七轉八倒、
 無念々々と黒右衛門、狂ひ死に死たるは、心地よかりし有様なり。秋夜おせつも煽ぎ立て、手
 柄手柄と賞する中、奥より出る松田吉見、旅装束に風呂敷携へ、松田吉見「ハア、出来た〜」。様
 子はあれにてお聞きなされ、常悅様のお差圖にて、アノ女中を介抱し、奥州表へ送りながら、先
 途見届け立歸れ、急ぎの使延引すなど、我々に仰付けられ、取る物も取あへぬ此支度。宮城野殿
 信夫殿の支度も道にて調へん。サア〜早う」と急立てば、「何から何迄お心遣、せめてお禮
 を皆様へ」松田吉見「ヤア禮所でない本國へ、早う知らすが此方の世話甲斐、關所も氣遣臺七が、

首は跡より送るべし。早うく」とおせつともとく、「お詞背くは却つて無禮、そんなら皆様よい様に」と、彌多七勝衛に伴はれ、まだ明やらぬ出沙や、陸奥さして急ぎ行く。跡は月澄む客路次の、陰も遙かに見送る秋夜、おせつもともに一間に向ひ、秋夜安堵有れ常悦老、事調ひし」と詞の下、障子押開け主の常悦、白無垢居士衣も祭忌の著服、出る燈火輝く庭先、黒右衛門がのたれし死骸、むつくと起て立つよと見えしが、水氣忽ち漲る白砂、見とれる宇治が照月にユソタヤデイスの幻法秘印、ほどくに猶も吹く水煙、ともに跡方生々しき、血も屍も消失せて、残るは以前の天眼鏡、居士衣の袖に飛移る、邪術の奇特目の傍、神變稀代と云つべし。二人も不思議と感ずるばかり。常悦指ざし、常悦「アレ見られよ秋夜殿、我兵部之助と云つし時、諸國を經廻り、洞理軒に習ひ覺えし隱形分身、奥にて示し合せし如く、幻法にて此鏡を、黒右衛門が形と顯はし、宮城野信夫に討取らせ、彼らが功を立てたと悦ばせ、本國へ追還せば、是より後に黒右衛門を、親の敵とねらふ者、鎌倉にはよもあるまじ。此術なさん」と明りを消し、「一旦捨てたる幻術なれども、去りがたき今月今宵、月陰にウルガンソン、觀念せしかひ有つて、英雄の士を助けしは、サンダマルの加護なるぞや。アラ心よや悦ばし」と、語れば秋夜が、「持病の短慮、僥忽の振舞、是も幸ひ、とは云ひながら、いとしいは二人の衆」「マダぐどくと黙り召

され」と、制し止めて鏡を納め、襖障子に尻ざし轄、常悅秋夜は居間の床、常懸の大横物、掛地を取れば壁に隱家、扉を内より大の男、上下鬘斗目青月代、身のしが隠す志賀臺七、正銘大小立派の人品、悠悠として座に直り、常悅秋夜に一揖し、黒右一葉ふ山の軍用役、仕果せて立歸り、御所望故に天眼鏡を渡せし上、忍び松明毒藥傳授、御望なれども今以て、お傳へ申さぬ某が、心底を推量あり、宮城野信夫を追還されし、今宵の幻術驚入る。高が女の事ながら、サ油斷人敵、是より世間の廣くなるも、云はど御兩所入魂のお蔭。剩へ今曉明六つ、御大身へ御目見えの御推舉まで、なし下されしお世話のお禮、ヤモ詞にも盡されず。此上は毒藥傳授忍び松明、秘方の一卷、楠原普傳が家の祕密を御譲り申す、必ず他見御無用」と、したり顔に懷中より、出す一卷を押戴き、秋夜と共に繰廣げく、常懸ハア明白々々、去りながら、鳩鳥の生血を搾り、砒石の煉様射鬮の法、水に混へて濁らぬまで、全く傳書に顯し難き、口授口傳あると聞く、共に師傳を明かされよ」と、蛇の道さがす平身抵頭、餘儀なき詞に、憂七、ホ、流石の宇治殿奇妙々々。其口傳こそ祕中の祕事、申したけれど人や聞く。ソレおせつ殿、硯々」心得おせつが床の間の、料紙の蓋をとりくくや、黒右衛門筆おつ取り、かの一巻へ書添へる、毒の分量極味の奇製、残る方なくさらくく、書く度々に常悅が、悦喜に連れてぞくく、鞠が瀬、「臥龍烽火の陣松明、

火箭の奇法も序ながら」と詞に随ひ文字に運びて口傳の奥義、残らず暫時に書認め、筆差置けば一卷を、卷納めく、常悅ハ、有難しく、英雄の士を得たればこそ、粉骨碎身しても得がたき此一巻、望足りぬる時節も今。秋夜殿、悦び召され「秋夜、誠にく身共とても、日頃の心願満足せし、是と云ふも黒右殿の御懇志ゆゑ」と只管禮讓、詞についておせつもいそぐ、「是からはいつまでも、お中よう御立身を待ちます。マア酒一つ」とあしらひも、東の空に茜さし、月も入るさのおしあけ方、常悅「アレく最早夜明の鐘、御目見えの刻限違へず、扇が谷の御屋敷へ、イザ黒右殿趣き召され」と、詞に猶も打點き、黒右「コレハく御深切」と、庭に折から數多の歩立、鈴々鐵砲切火繩、左右にこそは居並んだり。黒右「常悅殿、コリヤ何故」常悅「ホ、ウ、御屋敷までの途中にて、萬一今の女が餘類、待伏せなど致し居らば、彼等に云付けたつた一打、ヤモお手下されるには及ばぬ。コリヤく旁、黒右殿の前後に引添ひ、固めの手配氣を付けよ」と、残る方なき心遣ひに、「却つて痛入り申す」と、おせつが送りを辭退の式臺、臺七郎が出世の門出、追付知行を鶉の羽重ね、おさらばくと見送る常悅、秋夜が實儀黒右衛門、力身反つて出でて行く。仕濟したりと三人が、吐息つくく次の間より、いつの間にかは宮城野信夫、白無垢袴、鉢巻まで、用意につれた松田吉見、鈴々出づる密々聲、松田吉見「御兩所様のお心ざし、あの

お二人に聞きまして、すぐに裏から用意の出立。シテく黒右衛門は何方へ」「チ、兼ての場所は扇が谷、所の役所へ届置けば、苦しい早うく。我等も跡より後詰、門出の饒別此やい鎌、お氣の付いた秋夜様、宮城野殿へは此長刀」「エ、忝い」と兄弟が、勇み進んで立出づる。常棧コリヤ必ずおくれを取らぬやう、心の備へは爰なるぞ」と、一句の示しに罵まされ、思詰めたる宮城野信夫、物をもいはず手水鉢の、片側すつぱり長刀の、音より妹が飛石を、二つに鎌のむね打割り、信夫サ是では討たれますまいかな」出かした行け」を氣のはり弓、矢竹心に追うてゆく。秋深き草葉も半てりそめて、露ぞ置くなる扇が谷、常悅秋夜が同意の面々、勝負の場所を固めの手配、立に立たり辰の刻、肩臂張て志賀臺七、一圖に目見えと仕濟し顔、來かかる陰に人數の騒、早押推の小腰を屈め、黒右コレハく御大身より、某を御迎ひの旁ならん、嗚お待兼、思はぬ隙人、何れも御前宜敷様、お取なし下されよ」と、採手を構はぬ堅めの人々、警固人「ソリヤ黒右衛門辻さぬ様、取巻き圍へ」と身構へに、胸り仰天黒右衛門、黒右扱は汝等は最前の、女めが餘類ならん。夫もぬからぬ常悅老、秋夜の差圖は此時々々、ソレ火蓋を切らつしやい」と、猶も落付く黒右衛門、中に取込む一同に、動かば討たんと、狙ひの筒先、黒右ア是、身共を討つぢやないはいなう。エ、悪い呑込」と、一人氣を揉むあひもあらせず、宮城野

信夫伴うて、駈け付ける島田三郎兵衛、思ひがけなく出来れば、なほく不審のきよろく眼。
三郎兵衛聲をかけ、三郎「ヤアうつそりの黒右衛門、宇治鞠が瀬の術にて、心を赦し傳授の祕方、
篤と知られし上からは、我意に誇る汝が自滅、觀念して尋常に、此兩人と敵討、用意の場所へ誘
き出せしと、松田吉見が知らせによつて、常悅殿秋夜殿になり代つて、身共が後詰、遁れぬ所、
覺悟せい」と、聞いて臺七地團駄踏み、黒右エ、又謀られし口惜や、モウ此上は死物狂ひ、肩持
つ頼みの女郎ども、すたくに切りさいなみ、汝等が大望残らずぶちまけ、注進して腹癒ん」と
と、りきんで見ても鐵砲に、弱れど負けぬ佛頂顔、わるさ子供に二日灸、逆そよくれのだよけ
者、追取巻いて宮城野信夫、今ぞ誠の敵討と、勇む人々サア勝負、勝負々々とせり立てられ、ふし
やうく上著を脱ぎ、白無垢ばかりに身輕の立、三郎兵衛氣色を改め、三郎兵衛當所の役
人諸共に、宇治鞠が瀬も遠巻ながら、あれなる假屋に見物あれば、晴がましき此勝負に、後め
たき臺七が、白無垢の肌付、ソレくいづれも吟味あれ」と、差圖にみなく立寄つて、兩肌無
理に押脱せば、眼力違はぬ鎖帷子、ソリヤこそ大きな卑怯者と。人前にて剥ぎ取られ、面目砂
にまぶしける。宮城野信夫もぞくく小踊、天へも上る心地して、假屋の方を伏拜みく、残
る方なき御恩の程と、矢來の場所へ立向へば、臺七も咄やきく、恨めしさうに睨め廻し、同

じく入來る矢來の内、島田も引添ひ聲鬨まし、三郎「仇ある者は相互の敵討、勝負の勞を太鼓の
 數、音を究めてかけ引させ、鬨討つとも討たるよとも、互の運に任せよと、常悅老の差圖なれ
 ば、雙方共に心得られよ」と、例格故實の茶碗に水、敵と味方の前に置き、三郎「イザ尋常に」と矢
 來の外へ、引けども心は引かぬ氣に、息を詰めたるばかりなり。兄弟進んで聲をかけ、宮城野「先
 つ頃奥州白坂の城下に置いて、其方が討つたる與茂作が娘宮城野信夫、爺様の敵志賀臺七、サ
 ア立上つて勝負しや」一發七、テ、身が手にかけた與茂作が娘兩人、返討だ、觀念せい」と、拔身引
 提げ立向ふ。宮城野は以前の長刀、信夫も共に鎖鎌、互に心を一致の金氣、殺伐鋭どき臺七が、
 祕術に怯まぬ柳が枝、雪折せざる姉妹、目放しもせぬ三郎兵衛、外の見るまへ勵の勝負、火花
 を散らして、挑みあふ。始めの程は臺七が、嵩にかよつて見えけれども、骨髄覺えし兄弟に、
 惱まされるも天命の、石突返しに脾胃を圍ふ、其間に得たりと鎌投げかけ、打落したる左の腕、
 右へ廻つて又利腕、づんほら立の志賀臺七、無念とあせるを長刀に、脚打かけて一搦ひ、薙倒
 し薙倒し、助かけたる宮城野に、續いて信夫が逆手鎌、首搔落し聲涼しく、信夫「親の敵志賀臺七、
 宮城野信夫が討取つたり」と、につこと笑うて立つたる有様、悦ぶ島田同意の面々、巢立の小
 鷹鶴が、鷲を羽うつて當てたる如く、感じ入る聲響める聲、暫しは鳴も止まざりし。息つぎ

あへず、宮城野「是信夫、兼てそなたに云置く通り、斯く本望を達した上は」信夫「アイ、合點で御
ざんす」と、一度に一腰拔放し、我と鬢切かくるを、目早き島田駈け寄つて、二人が刃物撈取り
撈取り、三郎「コハ何故の剃髮」「イヤくくくお止めあるな」とせり合ふ内、常世「ヤアくく兩人
早まるな、しばしく」と聲をかけ、常悅秋夜は假屋より、しづく出来る悦喜の顔ばせ、宮城野
信夫に打向ひ、常世「密事合體の谷五郎に、所縁ある其方達、秋夜殿と云合はせ、本望を遂げさせ
し上は、本國奥州石堂家の領分へ送りかへし、時節を待つて金江氏へ添はせん計ひ、我々が心
をもだし、押て薙髮は其意得ず」と、秋夜と共に言葉の枷、有難涙の顔振りあけ、宮城野「船車にも
積れぬ大恩、お心背くでなければども、親の敵と云ひながら、女のざいに大膽な、人を殺せし罪
亡し、親のため敵のため、尼になるのがせめてもの」三郎「ハテ氣の弱い、親夫に武士を持ち、
姿を變へて先祖へ立つか。お世話あつた御兩所、此島田が先途まで、見届けられる所存はない
か」と、理に抑へられ、ハアはつと、さすが所縁の島田が諫めに、思ひ止りし兄弟の操違へず
常悅が、討死の後骸の恥、雪むる心阿部川や、彌勒の世にも朽せざる、恩がへしこそ殊勝な
れ。時刻移れば常悅秋夜、同意の諸士に打向ひ、秋夜「イカニ旁、勝負を見届け當所の役人、假
屋より退出あれば、日も傾きて遠慮に及ばず。宮城野信夫が勝利を得たる、爰は所も扇が谷、

大望成就も未廣がり、北朝を打破る、隱謀評議の場所と定め「秋夜」島田殿と我々三人、桃園に義を結ぶ、牛に等しき黒右衛門が、血汐を嘔つて盟を立て、秋の木の葉の鎌倉を、ちり／＼に打亡す、計策の手始よし。まづ奥州へアノ兄弟、送りの役を和殿に頼み、すぐさま軍勢催促を」と、引かせぬ詞に三郎兵衛、三郎「いつぞや廓でお頼みの、鞠が瀬殿も同座と云ひ、辭退致すもをこがまし。奥筋の一味を集め、此鎌倉へ登るはいつ頃」秋夜「ヲ、夫こそ毒藥地雷の相圖、發する時を手筈として、南朝の汚名を雪ぐ旗上げの惣大將、鞠が瀬秋夜が心魂に徹したり」と、きつと目くばせ常悅も、心を悟つて上著を脱げば、兩勇劣らぬ大將出立、錦の直垂萌黃匂ひの小手脚當、人集の中より陣羽織、采配床几もいつの間に、菊水の旗翻騰と、揃ふ心の三郎兵衛。同じく上著取捨れば、肌に着込の滋金物、南蠻鎖も南朝へ、「一味の手始は見給へ」と、隠し持たる塗込鞘、拔ば玉散る焼刃も鋭く、臺七が一の胸、死骸すつぱり血刀を、天晴血祭心地よやと、兩將立寄り打守り、秋夜、常悅「ハ、ア見事々々。やきばは愚中心迄、一日にしるき貞宗の、刀は北朝不吉の切先、味方に有ては吉事の名作、ハ、頼もしく」と、肺肝迄も見透す度量、神機妙算同意の人々、共に感ずる計なり。宮城野信夫も盡しなき、禮はつどくおせつ様、情の因おく筋へ、直に出立つ三郎兵衛、常悅も安堵の肩、常悅「關八州は秋夜殿、島田氏をば副將と、頼

めば心に危みなし。かへすくも短慮の振舞、心に止めて出されそ。我は是より都へ登り、五畿七道を狩催し、金江勘平に牒合ひ、笠置の山に程近き、古郷の井出の親里に相留り、鎌倉の騷動次第、彼地にて旗上せん」と、秋夜諸共貞宗の、刃の血汐三人が、口に含める誓の暇、共に宮城野金江が噂、都の空も懐しき、奥の心も細布や、島田が連れて行く二人、叔父への土産は臺七が、首を信夫がおし包み、涙も今を名残とは、知らぬ三人三方へ、別れ別ると一味の人数、共に評議の飛鳥山、淵瀬定めぬ 三重習かや。

第九 道行いはぬいろぎぬ

爰の在所に良いこの嫁御、外の男に氣を揉み洗ひ、かいけ柄杓の、縁は千年かけ水の、流と人の行末は、いざ白石や小石、千代に八千代と結びあうたる妹背の、契は堅き石堂の、館を出て伊達助も、角の取たる玉川の、里の紺屋の吉六に、千束の姫も陸奥の、古郷を捨て井出の里、きのふは袖の錦木も、けふの細布手に巻いて、花の露添ふ玉水の、水仕奉公も慣れやすき、賤の手業の晒布、晒して染て、水に幾度濡た同士、互に肩も春の川邊の、麗に山吹匂ふ岸傳ひ、洒場指して行方の、山の端毎に花曇、櫻を誘ふ春雨の、降らばかざさん笠置山、降らずば木津

の川風に、戀風添へて二人連、若草や寢よけに見ゆる嫁が秋、さいなくさうかいな。氣をつくづくし細々と、文のすみれは筆つばな、八重山吹のかへす書、さいなくさうかいな。よい中同士としらつよじ、浮名菜種のさいたづま、うら紫の藤の花、さいなくさうかいな。浮名たつとも厭ふまじ、いとふまじとは思へども、袖を絞の鳴見染、思ひ切るせときらぬ瀬と、二世と書たる誓紙の誠、かならずやいのと寄添へば、私故仕馴ぬ賤のわざ、堪へてたもと締る手も、女たらしの袖のうち、ほんに此頃しみくと、お顔の窠を見るに付け、よしな私がある故と、思へば身で身が憎らしさ。此世は儘の若楓、色にぞ井出の下紐の、結ぶ縁はいつ迄も、かはらに下りて袂絡け、かいしよらしけな取装も、面白や、布つく振のやさしさよ。なつきにけらし衣干すてふく、なつきにけらし衣ほすてふ戀人を、したひ紺やのやさ娘、八尾六つれて玉川の、水にうつらふ花の顔、遠目にそれと見るよりも、八尾六「チ、イ、吉六イナウ、お竹ヤイ」とどす聲も、思ひは同じ心の色香、落る所は谷川の、流に二人が立寄つて、娘竹「コレ吉六、あれを見や」蝶が戀する色かせぐ、わけも女の心から、かいしよらしいがいとしようて、井出の山吹、男の木性、川の水性、夫婦ぢやと、固めた中ぢやないかいな。私も心は河原の眞砂、よみ盡くされぬお情と、寄ればお竹が押隔て、「コレ男下に居や。さりとては悪性なく男づら。エ、

聞えぬ」と顔背け、恨みかけたるなよ竹の、節を籠たる憂き思ひ、中に分入る八尾六が、引けど
靡ぬ三味の糸、つんとしたのが猶たまらぬ。我等は何と奈良晒、せめて一白搗かしておくれ、つ
き立の布なんどは、力を入れてとんとつく。とんくとつくべと思へど、あの子の顔見りや手を
つく。品ものめ。ほつとり者めへ女夫晒が、ならざらしへ、とんとつく杵で、突張こうだずんば
いほう、ふりくづんばいほうくと抱付き、靡けくと八尾六が、付つ廻しつ、お竹をかこふ
吉六に、纏ると娘振袖や、云ふも云はれぬ竹垣の、中を隔てて、アレくくく、見え渡るく、
笠置木津川みかの原、何れ劣らぬ名所がなく、立浪がく、瀬々の網代にさへられて、流る
る花をせきるよく。所から逆なく、布を手毎に井出の里人打連れて、我家へこそは、三重歸
りけれ。

第十

京の水色よい染出しの、殿茶小紋を見初めて染て、今宵必かならずやいの、松葉小紋の變ら
ぬ色を、其方もサ、此方もサ、其方もサ、其方も此方も、思合ふのが、ハテナ幸小紋、謠諷ふは泡の、寄
る澄の水や井出の里、所に古き紺屋有り、彌左衛門とは通り名を、受けて世話役堅親父、弟子を

相手に商賣も、如才夏物仕入時、受取物は山吹の、花の女夫も夫ぞとは、云はぬ色なる伊達助が、
 姫諸共に此家へ、染り安きは下ごまの爪に藍染む糺業、お竹と呼れ吉六と、變る姿ぞ淨世なる。
 彌左衛門「サアくく、吉六もお竹も一服せい。ヤレくく、汝等はマア來てまだ間もない者共
 なれど、心一ぱい精出して呉るので、覺た者よりやつと仕業の果が行くわい。此八尾六は何所
 へ行たな。エ、間がな透がな出歩き居る。ア、大方湯屋で、又いけもせぬ新内節がな唸つてる
 をろ。ヤ夫はさうと此お姫は、まだ髪を仕舞すかな。めんえう此間は身仕舞に隙が入る程にの、
 いつ迄も子供の様に思うて居れど、親旦那がお過なされてから、わしが替つて世話するも、今
 年でかうと、ハ、ヲ、丁度あの子もモウ十七、そろくと蟲の付たがる時分ぢやてや。ア、ど
 うぞ何事も無い中に、實體な能い髻を取て、早う此世話を脱れたいものぢやが、ナウ吉六「吉六「ハ
 イ左様な事が随分とようござります。ナウお竹どん「竹「ハイそんな事が大たい能事ぢやござん
 せぬ。髻様がないとそこら傍がそはくく、ひよつともう此方の人に」吉六「ヤ何と云やる、
 お竹「竹「イ、エサア、アノ此方のお娘後のお染様に、其蟲とやらが付うかと、私やたんと案じら
 れます。どごぞかう遠い所から、早う髻様を取て、お上なされますがよささうな事のやうに、
 私は存じられます」と、思ひのたけを篠目に、詞のはりやもらすらん。彌左衛門は氣も付かず、

彌左「イヤサア、夫でも滅多に氣を知らぬ者は、どうも入られぬてや。ヤ何吉六、其方は國に二親もないと聞いたが、定てまだ女房も有まいなう」吉六「エ」彌左「サ有か」吉六「ア、いや」彌左「ム、まだ有るまい」と打點く、心の工面十面の、目顔で止めてもとまらぬお竹、竹「コレ申し旦那様、夫聞ておまへ」彌左「ハテ何にせうと彼にせうと、そなたが構ふ事ぢやない。ナニ吉六、一人身なればちつと此方に、相談の品が有る」と、聞く程胸にあたりの人目、私が大事の男ぢやと、云つて仕舞をか如何せうと、急き立つ袂を引止むる、男の手先へ焼煙管、吉六「チ、アツ、、、」「エ、仰山な。何所が熱い」と目に角を、立ては見れどどこやらに、流石夫とも得も云はぬ、女心のやるせなき。彌左「コレハしたり、騒々しい。吉六にとつくりと、在所の事を聞かうと思や、めんえう女子と云ふものは、得知れぬ事を差出るものぢや。コレお竹。其方は爰に用はない、奥へ行て共々に、お娘の髪を手傳うて、早う仕事にかよらしやませと云や、サアいきやく」竹「アイ」彌左「エ、何をうちくと、きりく行きや」と叱られて、跡に心は残れども、是非なく立て入りにけり。折からひよかく所のあるき、使丁「申し彌左衛門様く、庄屋殿迄たつた今、ござりませとの云付、サアくく、早うくく」彌左「エ、喧しい何の用ぢや」使丁「イヤ何ぢや知らぬが都から、高の師泰様とやら云ふお侍が、何ぢやか大勢引連て、お尋の筋がある故、村中

を召めしなさるよ。何なんちやか知れぬがござりませ」と、せり立てられて彌左衛門、彌左、そんなら序ついでに得意ごういも一ぺん。コレ吉六其布地拵ぬのせしちへが出来たら、板場いたばへ早う形付かたづけさしや。どれ往いてこう」と引ひかける、羽織はおりの袖そでを通とほす間まも、あるきがせがむ表口おもてぐち、とつかはとして出て行く。跡見送あとみおくつて吉六は、吉六「ハ、八尾六、モウ歸りさうなものぢやが。干物ほしものも取入とらいねたし、紋もんの上繪うはゑも急ぐと有るは」何からしやう染物そめものの、絹きぬの色々いろく取出とりだし、吉六「ム、コリヤ幕地まくぢ。何なんちや書付かきつけは、紋丸もんまるに二ツ引び、ム、はて合點がてんの行ゆかかぬ。正敷まさしく是は足利あしがひの定紋ぢやうもん、今目前いまもくぜんに見るは是これ、此虛こゝろに乗かつて中黒なかぐろを、押立おしだよとあるしらせなるか、但時節じせつを待つとあるか。ハア、いやく。エ、こちらは何なんちや、瑠璃るり紺こんに釘貫くぎぬき、ハ、テモ大きな紋ぢや。エ、コリヤ折介せりすけの看板物かんばんものぢやナ。ヤ夫やうぢはさうと、お娘むすめはもう出て見えさうなものぢやが、先まづにかたぐの約束やくそくを、よもや違ちがひはあるまいが、首尾くびびはど「うぢや」と戀人こいびとを、松帆まつほの浦うらの夕棚ゆふだに、燒やくや藻汐もしほの身を焦こがす。お竹おたけはそつと差足さしあしに、奥おくの透間とよまを忍しのび出いで、お竹「コレ申し義興よしきよう様、イヤ、アノナニ吉六殿、今更云ふに及ばねど、斯かういふさもしい宮仕みやづかへも、此家こゝへたよつて常悦じやうえつを、味方あじに付つける術てだての爲ためぢやと、おつしやつたやうにもない、其常悦じやうえつは打うやつて、妹娘いもうとのアノお染おぞめを、どうやら味方あじに付けて、此家こゝを取立とてるお心こゝろと、見たはまんざら違ちがひはあるまい。それでは互たがひに云いひかはした、憂うれき艱難かんなんも水みづの泡あわ、聞きえませ

ぬ」と取付いて、わつと泣くにおさゆる袖。吉六「ア、コレくくく、聲が高い、又しても我を忘れて、俺が心を知らぬか何ぞのやうに、エ、嗜みやくく」も竹「イエくくく、何ほ其様に云はしやんしても、此道ばかりは」吉六「ハテ扱愚癡な事ばかり。大事を抱し此吉六、色に亂るゝ性根と見たか、皆是南朝の御爲。只我々が身の上を、けどられぬが肝要と、云聞したを忘れしか」と、詞にお竹も胸押さけ、「女の愚癡な心から、見捨られもする事かと、案じ過しの餘りぞや。そもや館を立退いてより、母様にも兄弟にも、代へてお前が大切さ、手馴ぬ業も殿御の爲と、辛抱してゐるものを、常々からお前はアノ、此家の娘と何ちややら、面白さうなさどめ言、わしが男といふも云はれぬ下女奉公、飯を焚いたり水汲んだり、いとしい殿御を寝取る女、エエ戀の敵に様付けて、化粧手水の給仕まで、お竹どうしや斯しやと、呼つかはると憂さつらさ、紅白粉やつや油、皆お前に見せうとて、髪まで私に小言ばかり、是で好いかの何のとて、作る女の顔貌、美しう移るとは、磨かぬ鏡の恨めしや。何の因果で娘御の、ある所へは奉公に、来た事ぞいの」と恨泣、洩れもやせんと義興も、心遣ひの折からに、娘お染は吉六に、思ひ染込む暖簾の、間より出でて二人がそぶり、見るより俄に顔色變へ、も築コレ面妖なわがみ達は、人が居ぬと傍へ寄つて、見苦しい。女の傍へ男が寄るといふ事が、どこの世界にあることぢや

ぞいの、人が見てもじだらくさうで、マア第一、主しゆうの此私わしへ不寐ふびと云ふものぢや。吉六も吉六ぢや、ずつと此方こつちへ遠のいてゐるたがよいはいの。そして、コレ吉六や、此染物は始うけだての受取うけとり、念いの爲ためぢや、此注文と引合さう」と、何がな傍そばに置きたがる、娘心の戀こひの山、早入相いらひむに心急せき、息いきせきとして八尾六が、戻りかよつて内の體てい、ちらりと見るよりもがりの陰かげ、伺かひひるるとも白布しろぬのの、端はしをお竹がお合手あひてと、向ふへ直れば、お染、イヤくくくそなたは頼まぬ、モウやんがて日も暮くれる、行燈あんどうの拵こしらへして、御持佛おぢぶつへも御明みあかしあけや。コレ吉六、爰まへ來きや、サア此端持はしつて墨打すみうちを、見てたもやいの」と、寄添へば、竹が傍そばからつこど聲、お竹、マアくくくくお前も滅相めつさうな、いかにマお主様しうさまぢやと云うても、そりやモウあんまりあつかましいといふもので御ざんす。現けん在ざい女房にようばうの、イヤアノ、女房のない吉六殿ぢやとても、姫御ひめごのお相手になると云ふ事が、どこの世界にあることで御ざんすぞ。人が見ても自墮じだ落らくさうで、マア第一、傍そばで見てるらるよものぢやござんせぬ。ホンニく吉六殿も吉六殿ぢや、まそつと此方こつちへ退のいてゐるたがよいはいな」と、無理に押分け引退ひきのくれば、猶逆立さらだつて、お染、コレお竹、何なにの其方そなたが騒さわいだて。コレ吉六、主しゆうの云い付ひ背そびきやるか」と、又引寄る主従しゆうじゆうが、あなたこなたと争あひを、見てゐる八尾六むしやくしや腹はら、遠慮會釋えんりよあしやくも三人の、中へすつくり懷手ふてころで。見るより悔ひつり吉六お竹、うぢくもぢく娘のお染、

「コレ八尾六、二人ながら主の云ひごとを、ねつから聞きやらぬはいの。ちつとさう云ひ付けてたも」八尾六へ、ン、ア、結構な事で御ざりますは。全體お前には此私が、よつほど氣が有つた故、ちよこくしかけて見たけれど、主と家來の悲しさは、蹴飛ばされたら夫ぎりに、張込も云はれぬ故、エ、七面倒い打やつて、思ひ切つてゐた所へ、コ、此吉六、始めて目見えに來た時に、コレお染様、ソレお前がナ、アレあしこからちよつとのぞをくれた其時の、其目付の其いやらしさ。ヤこいつはけたいぢやと思つたが、角抜く度に鬢鏡で、俺が顔をつくく見るに、どうでも父上や母上が、おれを拵へらるゝ其時は、甚喜悅で有つたかして、笑ひく刻まれたと見えて、つい此様なちやり頭にしてのけられた。ア、いか様、お染様の氣のないも、無理とはさらく思はれぬと、とんと悟りを開いた所に、コ、こ、此お竹女郎、お前と吉六が味な目付をしたというては泣顔、何やら二人囁いたと云うては泣顔、ハアコリヤ浦山し涙ぢやなと思つて、何が寐所へ這かけたたりや、久しいものぢやが、又はね出された。あちらでは突出され、こちらで彈出され、突出したり彈られたり、悉皆油鍋へ心太、てんとたまらぬ、コリヤおたほう、おふくの中でこな様に、コリヤどうぢやいやい。なんほそもじが吉六に、氣があつても、お主の娘御といふ、向ふにアレ關がすわつてあり、埒の明かぬ事に手間取るより、

コレ此八尾六、少々付は見にくからうが、心の内は系櫻かな、何と付合ふ氣はないかいな」
 「エ、コレ八尾六、あだ口を聞く手間で、きりく干物取入れや」と、主の權威にへらず口、「ア
 アあるは否なり思ふは成らず、ア、戀程せつないものはない」と、呟きながら立上り、節くれ
 立つたるもがり竹、竿にひらく、こなたはじやらく、お竹がくるく、繰寄せて、引合せ
 見る吉六お染、「此紋所の蝶々が、直に祝言媒役、そなたは男蝶私や女蝶、斯う染込んだ此
 そめが、かう引く布は天の川、比翼の蝶々合點か、アノ不肖らしい顔はいの。コレ此布を斯う
 持つて、斯う引いて、斯う巻いて、斯う取付いて」と抱付けば、吉六「ア、申し暑くろしい、
 アレくく八尾六が、アレアノマ顔を御覽じませ」お染「エ、何ちやいの、八尾六は家來ぢや
 もの、大事な」吉六「イ、エ大事が御ざりますぞ」
 「とつとモウくく悟り切つた此八尾六
 でさへたまらぬもの、凡人間たるべきものが、コレガマア見てゐらるゝ態かいな。ナウお竹
 ほん」お竹「ハテ、こちらは家來ぢやもの、構はずと見て居たがよいはいの」と、いへど尻目や
 頤で、當付らるゝ吉六が、吉六「アレくお竹も見て居りますぞへ」お染「ム、見て居れば
 何とぞするかや、そなたの女房ぢやあるまいし、かまはずとよい返事、おうといやらにや放し
 はせぬ」と、ちとまだ早き染色の、二人がじやらくら八尾六は、物干竿をぐわつたびし、闇り

紛れかつちかち、かちく鳴らす火打石、竹が急ぐ程火も移らず、お竹「エ、どんな火打箱」八尾六が道理「八尾六」イヤモくくく染物も乾くものぢやないはいの」お竹「エ、まだ火が付かぬは、氣が付かぬか」八尾六「吉六殿も吉六どん、大事の染物のしはせいで皺だらけ、彌左衛門様が留守なりや、爰の内は暗闇ぢや」と、火打こちくく八尾六は、仕事も脇へふくれ顔、八尾六「エ、吉六早う鬘斗て仕舞はぬかい」吉六「イヤ俺はのらはせぬけれど、爰へ来いとお召小紋、何するも奉公ぢや。ナ申しお染様、さうでん茶でござりませうがな」八尾六「ム、地口置いてくれよ、夫がどこに相傳茶、あんまり藍が勝過ぎるかな」お竹「ヲ、八尾六殿の云うてぢや通り、イヤモウ今日も明日もさめ小紋でござんす」お竹「イヤコレ竹、聞きにくい。そなたの殿茶か何ぞの様に、當世茶も知らずに、誰が頼んで色上吟味、こび茶な事置いてたも、お納戸茶にすつこみや」と、云はれてせき立つお竹が日色、術ない者は吉六一人、染物手早に疊み付け、仕事ばさして遡入れれば、「イヤくく、彌左衛門の留守の内、返事聞かねば氣が濟まぬ」と、續いて駈入る娘のお染、心ならねばお竹も共に、行かんとするを八尾六が、後より引抱かへ、八尾六「コリヤくくく君よ、二度とは云はぬたつた一度、又一度が厭なら一分二厘でも大事ない、コリヤ叶へてくれ」とし

める手を、すけなく振切り飛退とびのいて、お竹「エ、八尾六殿、何の事ちやぞいの、人の心も知らず、てんごうさんすと喰付くひつくぞ」八尾六「ヤ何ぢや喰付く、へ、何のく、喰付かるよは愚おろかの事、少々はモ喰殺いごされても厭いとやせぬ、幸ひ薄暮うすぐれ丁度能い首尾、帶をとかすとついちよこく」と、又取付けばしつこいと、下地したぢのもやく、腹立はらだちまぎれ、傍そばに有合ふたばこ盆ぼん、襷たす絹卷しんまき校欄まきしめ箒はら、當り眼まなこに投付けく、奥へ走れば八尾六は、「コリヤ手ひどい」と云ひつよも、同じく奥に入りけり。春の日も西に傾く年輩としばいも、昔小紋ひかしちもんの片意地かたいぢづくり、澁柿染しぶがきそののかうかつ親父、得意廻りの戻りがけ、すつと這入はいつて、彌左やひだ「コレハさて不用心ようじんな、吉六よ、八尾六、ナニお竹も、ソレ行燈あんどんへも火を點ひさぬかい」ハイくくと納戸なんどより、附木つけぎをしほに皆立出づる。彌左やひだ「庄屋殿仕舞うて、商先あきなひさきの旦那衆だんなしゆう、脈の上つた古懸ふるかけ、おこさぬは合點あひてんでも、次手ついでながら催促さいそくしたりや、いかす村むらの孫三むすみが、錢ぜに三百の内上うちあけ、足の次手に戻りがけ、此三方このへうねぎり詰めたが、おれが年と六十八文、三方が若いか、おれが年が安いか、サ、サ、皆よつて評判ひやうばんつきやく。コリヤ八尾六、染物は皆出来たか」八尾六「ハイ、大方に片付かたづきました」彌左やひだ「おつとよし」八尾六「ヤコレ、お染様も吉六も爰へおぢや。コレ、こなた衆は味やるの、いつからのせよくり合、隠かくさすと云はつしやれ」お築おぢ「チ、そんな事誰がいうた、こちら二人ふたりに覺おぼえはない」と、口は涼すずしく手はもちく、

吉六はたどお竹が手前、顔もしかなの煙草盆、呑まぬ煙に紛らかす。詞改め彌左衛門、「ヤコレお染様、呵るのぢやないが、わしが云ふ事よう聞かしやりませ。こなたの兄御勝助殿は、商人嫌ひの兵法好き、武者修行とやらに出て行かれたはとうの事、夫を氣病にお袋の死なしやつたは去年の夏、臨終まで苦に召され、俺を枕元へ呼付け、兄にこりた妹娘、好た男と女夫にせい、頼むは其方、家の家督の極るまでは、町所をも勤めてくれと、おれが前の名長兵衛を改め、去年から彌左衛門と、かへたは爰の旦那の名、お袋の遺言なれば、好いた男と見て女夫にするのぢや」エエと胸り吉六お竹、娘はとかうの返事さへ、醫に覆ふ振の袖、心の丈が手拭を、嚙んで振向く夫の顔、夫と知らねば彌左衛門、「厭でないやら、恥かしさうな、嬉しさうな、何やらも欲しさうなアノ顔。へ、、、ハ、、、コリヤヤイお竹よ、何をばた／＼し居るぞやい。吉六も厭ではあるまい、直に紺屋の旦那殿」と、云へば八尾六差出口、八尾六「ソリヤママあんまり急で、早速に返事もなるまい。マア受人にも相談して、親判から庄屋組中、向ふ三軒兩隣、御念佛講へも談合極めて上の事、彌左「ハテむづかしい、女夫中に受判や、御念佛講は入らぬはい。又厭といへば爰には置かぬ、追出さるとか聲になるか、二つ一つの返事聞こ、どうぢやく」と、詞にお染はもどかしく、も染女夫にしやうと結構な了簡、何の否があるぞいな、ナウ吉六、さうである

がの「彌左」ハテこなたばかり呑込んで落付かぬ彌左衛門、おうといへば此三方が、直にこんこんの盃臺、何と八尾六さうぢやないか「八尾六」ハイ、イヤモウこんくやら盃臺やら何ぢややら彼ぢややら、一向譯がない、とんとやくたいでござります」彌左「何ぬかし居るぞい。竹もまだ二階掃居らぬか、マ、箒持ちて其態何ぢや、エ、きりく、行き居れやい」も竹「ハイ」行き居れやいと呵り付けられ是非なくも、塵に交はる紙屑を、お染が方へ掃付けて、ぴんしやんとして上り口、彌左「ハテ仰山な女子ぢや」と、吹きながら立上り、彌左「ヤおれが居るから結句遠慮、媒は宵の中、八尾六來い」と引連れて、勝手へこそは入りにけれ。跡にお染が何となく、今では結句改り、心どぎまぎ胸せかれ、言寄る詞納戸口、有合ふ針刺引寄せて、針のみすどに願ひの糸、通りも早き色の道、吉六お染が傍に寄り、吉六「申し、お染様、此中染めた此手拭、ちよつと端に何たと印、松葉なりと縫うて下さりませ」お染「ソリヤアノ、いつぞや時行た寄せの唱歌、まつにこんとはわしや氣にかゝる、つれない心」と寄添うて「わしが心は此糸を、斯した所が判じ物」吉六「ハ、ハ、そりや知れた事、平假名のしの字」お染「サア、いとしいはいの」と糾れ糸、解けかゝりし下紐の、井手の下行く水馴竿、深い浅いを探りあふ。吉六「申しお染様、チトお尋ね申したい事がござります」お染「チ、改つた、何事ぢやいなう」吉六「アイヤ、何の事でもござりませ

ぬ、ガ、アノ、お前の兄御は、宇治の常悅様と申しませうがな」も「エ、兄様の名は勝助」
吉六「サ、其勝助様が常悅と名を變へ、鎌倉にござるを、お前知らぬといふことはあるまい、
斯敷されて夫婦になるからは、何事も隠さぬが互の眞實、サどうぢや〜」とうらどへば、
共も「サイなう、兄様は此内を、家出して行かしゃんして、夫から一向便もなし、力になつて共
共もに、お行方も尋ねてほしい。何かの咄もたんと有る、モウ夜も更ける行て寢よう」と手を取れ
ば、吉六「ア、得心で女夫になるから、今宵に限つた事ぢやない、今夜は延して明日の夜か、い
つそ紺屋の明後日になされませ」も「エ、何ぢややら氣の知れぬ、私が心のやうにもない。こ
ちへおぢや」と手を引かれ、絲いとによるべのふしの間も、お竹が手前氣の毒を、ア、しやう事も
なく入りにけり。一間の内に彌左衛門、持佛ぢぶつに向ひ打鳴らす、かねては母の遺言を、立てし位牌
へお染が縁、結ぶを告げる看經かんきんも、昔氣質かたぎの檜木ひぎの音、「南無阿彌陀佛〜」。ソレ新らしい
夜著出して、ナ能いか、南無阿彌陀佛〜」春の夜の、そよ吹く風の音信おとづれも、あるかなき
かの旅薦僧たびこせう、此家の軒のきにゐみて、「昔に變らぬもがり竹、住居すまひもかはらぬ我家なれど、今土手際
の戸治うぢが噂うはさ、母人は去年の夏、過行すまゆかれたと聞く残念、念佛ねんぶつの聲は慥たしかに長兵衛、冥途めいずの母の呼
入れ給ふと、我身の不孝が思ひ知られて、ア、詮せんなき後悔こうかい無益むやく々々」と高きは父が讓ゆづりの敷居、越

えて笠取る庭の内、「誰たを頼たまん」と案内あなの聲、彌左「アレどなたやら、お得意せき先さきからお人がある、ソレ茶でも持つて出ぬかいやい。南無阿彌陀佛なむあみだぶつくく」勝助「イヤ勝助かつすけぢや、身共みどもぢや」彌左「トハ、前の旦那だんなに生寫いみづつし」と、不審ふしん立出で透すかし見て、彌左「ヤアこなたは息子むすこ殿とのぢやないか」勝助「長兵衛堅固けんこで祝しゆ著ちやく」と、草鞋わらじ解ほどく間も待兼まちかねねる、老おいが深切しんせつほやく機嫌きげん、彌左「ヤレく嬉うれしや、サ、サあがらしやれく。今の先もこなたの噂うはさ、家出いっせさしやつたを、數かずへて見れば十三年、ア、今頃は何處どこに如何どうしてゐるやしやるやら、今日けふは出世しゅつせして戻かへらしやるか、明日あすは心も直ただつて歸かへらしやるかと、待ちに待まちつたる今月こんげつ今宵こんよひ、ヨウマア戻かへつて下くださつた、と云いひたいが、聞きえませぬ。内の勘定かんぢやうなるらぬも知しつてゐるこなた、厄介やくがいを儻おれに振向おこけ、面白おもしろさうに薦僧こもそう姿すがた、尺八しゃくはちの竹たけよりは、なぜもがり竹たけに氣きを入れいれさしやらぬ、罰さちの程思ほどひ知らしやつたか。トいうて其厄介やくがい被かつたを恩おんに著あるおれぢやござらぬ、妹御いもうとのお染様おせんさまもモウ十七、髪かみの飾かざりりや衣装いしやうまで能あたい物が欲ほしい最中さいちゆう、此間こゝも云いはしやるには、コレ彌左衛門やえもん、アノ隣まわりのおよし様さまのしてゐるさんす、黒緇くろじやま子の帶おび、私わしにもどうぞ買かうてほしいとせがましやる、コレこなたも帶おびどころぢやあるまいぞ、ちと物ものに勘略かんりやくさつしやれ、去年こぞから段々だんだんの物入ものいり知らぬか、随分ずいぶん内の仕事しごとを精出せいださしやつたら、買かうて進しんぜると呵しかつたら、アイく、随分ずいぶん仕事しごと精出せいだす程ほどに、何卒なんぞ買かうてくれてよ、詞ことばも返かへさず聞き分わけるに エ、こ

なたはなう。おりやモウ其時にはの、コレ此白い目玉から、黒緇子の様な涙がこぼれたはいなう」と、親方思ひの偏窟親仁、昔作の形板に、地味な涙を流しけり。常悦も打絶えて、勘當の身の悔泣、今更返す詞もなし。彌左衛門目を瞬き、彌左「コレ、まだ其上に母御さまも」勝助「イヤ、御死去の様子は參りがけ、村はづれで承はり、申さう様もない残念千萬」彌左「其残念が遅いはいの。ア、併し、今泣かしやるが眞實眞身、母御様が存生の中云はしやるには、コレ長兵衛、此勝助めは何國に居るぞ、此母が死んだら、日頃の不孝思ひ知り、嘸勘當が悲しかろ、若し心も直り戻つたなら、勘當を赦してやつてくれと、親旦那の名をおれに譲つて置かしやつた、久離は切れぬ、赦します」勝助「何々、彌左衛門と名を變へ、赦してやるとは、ア、有難い御仁心、ぞつこんに滲み渡り、家來とは思はぬ彌左衛門様、親父様」彌左「爰な若子勿體ない、主が家來に何の禮」勝助「イヤそなたがあればこそ、勘當も赦りたでないか」「赦りたが夫程嬉しいか」「嬉しいうなうて何とせう」「おれも嬉しい」此方もそちもこちもと手を取組み、盡きぬ主從縁の糸、袖や絞に染めぬらん。常悦猶も感じ入り、勝助「千金にも代へがたきは人の實心」彌左「サアくさう思はしやるならアノ佛間で、改めてお詫事さつしやれや。まだ其上に母御様の、くれぐくと云置かしやつた事もあり、委しい事はアノ一間で」勝助「誠に夫も老人の心休め、イザ同道」と打連れて、一間へ

こそは入りにけれ。早灯火も眠る頃、遠寺の鐘のたうくと、やよ更渡る丑みつ時、奥より出づる吉六が、以前の姿引かへて、大小立派の長上下、お竹も元の千束姫、見かはすばかりの襦袢姿、千束姫「申し義興様」義興「コリヤ、シイ聲が高い。兼て云聞かせし通り、此家の盼勝助が、隠謀企ある様子、疾より知つて入込む所、古郷を慕ひ戻りしは天の與へ、南朝へ味方せば差赦し、北朝方へ加擔せば、首討つて尊氏を亡す血祭、ぬかるな千束」と嘯き點き忍び入らんとする一聞、障子の内より聲高く、常世「吉六と姿をやつし入込みし、新田義貞の弟義興、宇治の常悅見參」と、一聞の障子押開き、長絹に長袴、金作りの陣刀、威あつて猛き其骨柄、義興臆す色もなく、傍近く進み寄り、義興「某が本名察する上は包むに及ばず、汝如きの有賤しき匹夫めら、謀反などとは事可笑しや。名もなき軍は萬民の愁、尋常に首さしのべ討たるよや否や。但し心を改め義興に仕へ、南朝の御味方申すや、サ、返答聞かん」と、詰めかくれば、常世「ホ、健氣なり新田殿、南朝無二の忠義臣、實義貞の舍弟ぞかし、頼もしょく。某が宿意の一條、名もなき軍に豈天下を苦しめんや、我も南朝譜代の忠臣、楠判官正成の一子正之、ハレ珍らしき對面や」と、優美の顔色、義興からくと打笑ひ、義興「ヤア手詰に至り、此場を遁れん其爲に、正成の一子とは、何を證據、ソレ聞かん」と云はせも果す、「ホ、不審尤、我正しく夢の告にて、一子なる事悟りし

上、今又奥にて亡母より某へ、残し置かれし定紋の旗、彌左衛門より譲受けたり。イザ疑ひを晴されよ」と、懷中より取出す、楠家に傳ふる菊水の旗、折に幸ひ山風に、へんほんと翻がへる、實かんばしき橘の、氏の系譜ぞ著るき。義興ハツト横手を打ち、義興「ハ、ア誤つたり誤つたり、斯く明白なる楠の正統、いかで疑心を生ずべき。今より共に心を合せ、勢ひ微弱の吉野山、花咲く御代に颯へさん」と、誓は龍虎の新田楠、義兵の礎、常世「ハ、ハ、幸ひく、常悦が去りし頃白坂にて、思はず手に入る石堂家の繪旨、我が手にあつて益なき賜、千束殿への我寸志」と、渡せば取つて押戴き、千束姫「マ忝い、さりながら、我等夫婦が姿を窺し入込みしも、常悦様を討取る手筈、斯うお心が解合からは、此場の様子味方の者へ云聞かせ」義興「ホ、能くぞ心付きしぞかし、片時も早う合體の委細を知らせ、師泰が捕手を破らん。千束來れ」と引き連れて、出行く兩人奥の間より、「コリヤ待て吉六、お竹も待て」と、しはがれ聲、お染が手を引き彌左衛門、力味返つて大胡座、彌左「ヤイ吉六め、イヤサ本名は新田殿であらうが、また千束姫で御座らうが、コリヤ見よ、コ、コレ、奉公人請狀の事、一此吉六と申す者、コレ、コレ、此竹と申す女、跡の文言讀むにや及ばぬ、サ是が此方にあるうちは、御大將でもお姫様でも、やつぱり紺屋の下人吉六、飯焚のお竹に違ひはない。主の俺が用がある、マ、爰へ來い

爰へ來い。コレくお染様、何も泣く事はござらぬぞや。ヤイ二人とも爰へ來をらぬか、暇の乞捨は天下の法度ぢや。コリヤやい俺は何にも知らずに、奥の間に寢て居たりや、此子がござつて、コレ彌左衛門、吉六と云うたは義興様、お竹は千束姫様とやら、女夫ぢやけな、そんな上つがたに、紺屋の娘がどう女夫になりやうぞ、止めたうても此様な形で、あなた方に詞を交すも恥かしい。したがあんまり残多い程に、せめても一度あなたから、何となりとお詞が聞きたい、ちつとの間なりと止めてくれてよ、寢て居る俺を揺起し、しくくと泣いて居さしやる、ヤコリヤ又尤、無理ぢやない、ヲ、一ばん云はにやならぬ所ぢや、大事ないく、氣遣ひさしやるなど受合つて、留めに出た此親仁、論より證據、書た物が物云ふはいやい、書いたものが。お竹めといふ女房のある上、ナゼ此子に疵付けた、コレマ、いかな大身れきくでも、大事の大事の娘御の喰辻は、人體に似合はぬく」と、わよりかけたる主思ひ、理の當然に義興千束、行くも行かれず顔見合せ、黙然として在せしが、義興ハ、ア尤の一言去りながら、聞かるよ通り敵方を、取挫ぐ性急の場所」彌左「こりややい、紺屋の内に中形や、小紋の形はありうちぢやが、敵がたとは何の事ぢや、其様な用を、誰が云付けてわりやするぞ、最前祝言までしたぢやないか」義興「イヤサ、夫はさうでも、しかと妻に致したと云うではなし」「サ、妻でなければ

ば、お染様はおまちやないか」と、こねる紺屋の糊加減、ねまりの強き親仁なり。千束も氣の毒、千束「サア、其奉公人に、何卒お暇を」彌左「チ、其様にびらく」と長い物著た奉公人、職人の内には合はぬ、成る程暇もやらう、ガやるにしてからが十日と廿日は、お禮奉公も勤内ぢや、お染様の得心さしやるまではマアならぬ、出替り時まで待つて貰をう、ならんぞくくすんどならんぞ。ア、あんまりしやべつて腹がへつた、コリヤお竹よ、飯焚いたか」千束「イ、エ」彌左「是は扱、早う焚をれやい。出来たらソレ、茶漬け一杯喰せ。コリヤ吉六よ、何うろく、ソレ味噌摺つて、汁拵へい」と、我儘も、主命何と長袴の、裾踏しだく膳拵へ、姫君變じてまま焚や、袖の錦に襷がけ、手拭ちよつと奥様も、今更何といふ食の、まよならぬ世を姫は氣の毒、「手つだをかいな」と云ひつゝも、男の袖をすり鉢の、目と目を味噌のこい中や、お竹は胸の中くわつく、じやく時の釜の下、火を引き椀拭く、鍋取の、「お公家様でも大名でも、喰はねばならぬ」と彌左衛門、箸箱取出し待居たる。常悅は諸手を組み、始終の様子伺ひるる。お竹は時分と杓子とり、櫃に移せば陰々と、湯氣立のほる不祥の氣、常悅きつと目を付け、常悅「ア、ラ心得ぬ、一掬の米一盞の水、釜中に熱して人間の生育す、生成の根元食類の冠たる一物、宇宙の珍寶是に過ぎず。今器に移せる飯の湯氣、殺罰の氣を顯はすは、ム、軍將合體

の今此時、味方に取つて不祥の逆氣、我手に於て事破れん覺なし、扱鎌倉に置いて秋夜が方に、凶事あるは必定、アラ不思議や訝し」と、そなたの空、詠めやつたる叡智の明察。義興千束人々も、共に怪む其折から、百廿里を二日半、飛鳥の如くに熊川三平、常悅が前に手をつかへ、三平「扱も今度の御采配、鎌倉表の惣大將と、定め置かれし秋夜殿、軍用金を集めんと、出入の具足師藤兵衛と云へる者、招き寄せて酒興の上、一味の密事を明かされしに、其場は承知の體にもてなし、内へも歸らず、鎌倉の決斷所へ即刻注進したるよし、鞠が瀬殿を搦めんと、既に其夜の亥の刻過、捕手の役人市垣將曹、組子引連れ込み入る所、例の鎌鏑縱橫無盡、寢卷の素肌に術盡きて、怯む所を折重り、繩めに引かると決斷所、其間に老母が即座の氣轉、連判狀は火鉢の中、燃え立つ煙に立紛れ、漸と一方を打破り、此旨注進仕らんと、夜を日に繼いで參上」と、大息ついで訴ふれば、是はと人々呆るゝ内、凜々然たる宇治常悅、無念骨髓に押通り、眼は裂けて血を注ぎ、常悅エ、口惜や殘念やな、日頃短慮の鞠が瀬秋夜、一方を預けしは一生の我が誤、三平は様子難波の浦の勘兵衛へ、片時も早く告知らせよ、急げく」の下知より早く、飛ぶが如くに駈り行く。彌左衛門はうろく聲、彌左「モウくくくかうなる上からは、此子の事は千束様」「何のいなア」「格氣どころぢやござんせぬ、大事の殿御を二人して」「エ、有難い」

とお染が悦び、忙い中で妹背の固め。忍び立聞く八尾六が、身構へして踊出で、八尾六「何もかも皆聞いた、師泰公の下知を受け、犬に入込む此八尾六、報知は斯う」と有合ふ火入、もがりの竹に投付ければ、合圖の狼煙あがるにつれ、遠音に響く貝鐘太鼓、義興すかさず首筋掴み、ぐつと一しめ投付ければ、目玉飛出て死してけり。常悦は突立上り、「此場は我に任されよ、義興殿には二人の女、彌左衛門諸共に、一先立退き笠置の古城へ、早くく、道程近きは長池玉水、此地へ來る道筋は、皆常悦が味方となし、笠置の要害堅め置きたり。軍慮を爰より見せ申さん、彌左衛門」と詞の下、千束お染も奥の障子、明方近き笠置の城、中黒の旗菊水の、旗手にさし物數千の人馬、折知る花に色添ひて、晝と見まがふ提燈松明、目覺しくも又潔し。常悦庭におり立つて、何かは知らず川岸の、八重山吹をかきわけて、仕度する間に義興は、二人の女彌左衛門諸共に、引連れてこそ出でて行く。ほどもあらせず寄せくる師泰、大勢引具し大音上げ、師泰「此家の内に謀反の張本、宇治の常悦隠れ居るよし、合圖によつて向うたり、最早遁れぬ、尋常に腕を廻せ」と、呼はつたり。常悦騒がず悠々然と、床几にかより、常興ヤア謀反とは存外なり、敏達天皇の後胤、楠判官正成が一子正之、常悦と假名せしは大望露顯に及ばぬ以前、今日只今憚りなく、北朝を取控く、大元帥の目通なるぞ。徳になつき禮儀を施し罷出よ。對面して

とらせん」と、勇備の詞にさしもの師泰威に恐れ、如何はせんとためらふ内、どうど響し大石
火矢、大地は裂けて燃え立つ炎、祕法の火術に師泰主従、微塵に碎けて死してけり。常悅につこ
と打笑ひ、常悅、年來凝つたる地雷の試み、アラ心よや悦ばしや。是より直に笠置の城へ後詰し
て、北朝を取擽ぎ、目出度御代にひるがへさん」と、英雄魏々たる丈夫の魂、實桶の二葉の
勇氣、逞しかりける、三重 有様なり。

第十一

蚩蜂集つて大樹を動かす、義興を搦めんと、笠置の山を十重廿重、淀野木津川壅の隙、甲の星
を暉かし、喚き叫んで攻登る。爰ぞ一期と義興は、太刀眞向に差かざし、火花を散らして戦ひ
けり。智勇兼備の太刀先に、多勢もあぐんで見えたる所へ、思ひがけなく後陣より、崩れかけ
たる北朝勢、義興得たりと殖立つれば、右往左往に敗軍す。義興猶も追驅るを、常悅しばし
しばし」と聲をかけ、宇治の常悅駈來り、常悅、金江熊川に謀を傳へ、北朝の後陣より只一戦
に打勝つたり、心安かれ義興殿」義興、ハ、ア驚入つたる貴殿の妙計、南朝ふたとび榮える吉相、
頼もしょく」と悦び勇む折こそあれ、小治郎伴ふ寄浪御前、千束お染彌左衛門、金江熊川駈來

り、寄渡南朝北朝和睦調ふ上からは、鞠が瀬殿も相助り、兩將に異變も有るまじ。常悅殿の情により、ゆんし繪旨も手に入る千束お染も妻妾、新田楠石堂家の、契りは堅き白石噺、姉と妹が孝の道、道に道ある時津風、北は越後路、南は紀の路、津々浦々の末迄も、納り靡く君が代は、目出たかりとも中々、申すばかりはなかりけり。

碁太平記白石噺終